財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第363集

霜 田 遺 跡

一般県道川原畑大戸線地方特定道路整備事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2006

群馬県吾妻県民局中之条土木事務所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

霜　田　遺　跡

一般県道川原畑大戸線地方特定道路整備事業に伴う
埋　蔵　文　化　財　発　掘　調　査　報　告　書

2006

群馬県吾妻県民局中之条土木事務所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

霜田遺跡遠景（岩殿山標高620mから南西方向を望む）

3号竪穴住居出土遺物

5号竪穴住居出土遺物

6号竪穴住居出土遺物

序

一般県道川原畑大戸線(377号線)は、図面上では吾妻郡長野原町の川原畑地区を基点とするものの、基点から吾妻町大柏木までの区間が不通区間であり、実際に走行出来る区間は吾妻町内の大柏木から大戸の国道406号線からの分岐点までです。そのため大柏木地区から川原湯方面に向かうには、大戸から三島を通り吾妻渓谷を抜ける東回りと、坂上地区の中心である宿から須賀尾峠を通り長野原町横壁へ抜ける西回りの二つの行程がありますが、どちらも大きく迂回する形であり、坂上地区全体にとってネックとなっていました。

今回、八ッ場ダム建設に伴う大柏木地区に大規模な土置き場の建設が予定されたことから、その搬入用として川原湯側からトンネルが掘削されるのに伴い、その工事用道路の意味合いから本道路の拡幅改修が計画され、道路事情の大幅な改善が図られることとなりました。

この工事に関連した埋蔵文化財の発掘調査は、群馬県土木部の中之条土木事務所と特定ダム対策課八ッ場ダム水源地域対策事務所の委託を受けた財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当し、平成13年に実施されました。その結果、古墳時代の遺構・遺物をはじめとして、縄文時代から中・近世にかけての資料が検出されました。

この埋蔵文化財の発掘調査の成果が出版される機会に、これまでお世話になった県土整備局特定ダム対策課八ッ場ダム水源地域対策事務所、県教育委員会文化課、吾妻町教育委員会には深甚の謝意を表し、本報告書の出版が地域の歴史理解の一助になることを念じつつ、報告書の序といたします。

平成18年2月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇夫

例　　言

1．本書は2001（平成13）年度の一般県道川原畑大戸線改築工事に伴う霜田（しもだ）遺跡の発掘調査報告書である。

2．霜田遺跡での今回の発掘調査の範囲は、群馬県吾妻郡吾妻町大字大戸字仲田159、160－1、161－1、162－1、167－1・2・6、168、170－3・5番地である。（Nakada・Odo Agatsuma-machi Agatsuma-gun Gunma-ken）

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団では本来、遺跡の名称については「大字・小字」の併記という形で表記しており、本遺跡も原則では所属する大字の「大戸」と小字の「仲田」を付した「大戸仲田」遺跡となるはずである。だが、既に名付けられた遺跡名がある場合は周知されているということで、群馬県教育委員会、あるいは遺跡の所属する市町村が作成した遺跡台帳に記載されている遺跡名が優先することとなっており、それに従って「霜田遺跡」の名称を使用することとする。

3．発掘調査は、群馬県（特定ダム対策課）の委託により、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。本遺跡の発掘調査時の組織体制は次の通りである。

期　　間　2001（平成13）年4月1日～2001（平成13）年6月30日
管理・指導　小野宇三郎、吉田　豊、赤山容造、住谷　進
事務担当　大島信夫、笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、森下弘美、片岡徳雄
吉田恵子、並木綾子、内山佳子、若田　誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子
調査担当　麻生敏隆、新井英樹

4．発掘資料の整理および報告書の作成は、群馬県吾妻県民局中之条土木事務所の委託により、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書の作成期間・体制は次の通りである。

整理期間　2005（平成17）年7月1日～2005（平成17）年11月30日
履行期間　2005（平成17）年7月1日～2006（平成18）年3月31日
管理・指導　高橋勇夫、津金澤吉茂、矢崎俊夫、中東耕志、西田健彦
事務担当　石井　清、竹内　宏、須田朋子、吉田有光、清水秀紀
今井もと子、内山佳子、若田　誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子
編　　集　麻生敏隆、飯田陽一
本文執筆　矢口裕之（第2章第2節）、飯田陽一（遺物観察表・土師器）、5章－委託（文頭に表記）以外、麻生敏隆
遺構写真　麻生敏隆、新井英樹　　遺物写真　佐藤元彦
遺物観察　麻生敏隆、飯田陽一　　保存処理　関　邦一、土橋まり子、小材浩一、森田智子、津久井桂一
機械実測　伊東博子、岸　弘子、田所順子　　資料整理　大嶋　緑、小池益美、高橋裕美、宮沢房子、吉川えり子
委託測量　株式会社　測研　　分　　析　第5章の各節本文頭に記載

5．石材同定にあたっては飯島静男氏（群馬地質研究会）にご教示を得た。

6．出土遺物および遺構・遺物の図面・写真類は、一括して群馬県埋蔵文化財センターおよび財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が保管している。

7．本遺跡に関して、本報告以前にその概要が収録・公表されたのは下記の書籍である。
年報21　財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002

8．本遺跡の発掘調査にあたっては、赤城村・渋川市・子持村・箕郷町・榛名町在住の多くの作業員さんにご協力いただいた。

9．発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏よりご協力・ご助言を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略）
群馬県　群馬県教育委員会　吾妻町教育委員会　吾妻町立坂上小学校　吾妻町立坂上中学校　有限会社加部石油
長野原町教育委員会　国土交通省八ッ場ダム建設事務所　新井順二　唐澤定市　白石光男　高橋　進　高橋政充
富田孝彦　橋爪　務　蜂須賀良正　福田義治　丸山文三夫

凡　例

1．本書で使用した国家座標は、日本測地系によるものである。本調査ではその数値をそのままグリッドとして使用した。

2．本書における遺構番号は算用数字で、調査時に付されたものをそのまま使用した。

3．遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。縮尺の異なるものが併載される場合は、それぞれにスケールを付すか、遺物番号に縮尺率を併記した。

遺構図　竪穴住居1：60(1号のみ1：40)　住居竈1：30(1号のみ1：20)　土坑1：40　溝断面図1：50

遺物図　縄文土器1：2　弥生土器1：2、1：3　土師器・須恵器1：4　縄文石器・石製品1：1、1：2、1：3　鉄器1：2

4．遺物番号は本文・挿図・表・写真図版と一致する。

5．図中で使用したスクリーントーンは以下の通りである。

地　図　①遺跡範囲図

遺構図　②焼土　③石　④浅間B軽石

遺物図　⑤敲打痕　⑥煤付着部分　⑦木片

6．面積は、住居の周縁をプラニメーター（タニタ　プラニックス7）を用いて3回測定し、その平均値を記した。

7．挿図中の方位は調査時に使用したグリッドの準拠したものであるが、本文中の軸方向記載で用いた方位には、真北を用いた補正を行っている。

8．出土状態のうち、＋は床面や底面からの高さ（cm）を示す。また⇔は接合を示す。

9．計測値には次の略語を使用した。「口径」→「口縁部径」、「胴径」→「胴部最大径」、「底径」→「底部径」、「高さ」→「器高」、（　）→推定値、〔　〕→現存値

10. 杯は、その形状からａ類とｂ類に区分した。

11. 胎土の表記には次の略語を使用した。

A：緻密な胎土で、赤色味の強い焼き上がりとなることを特徴としている。石英の細片、バミス、赤褐色の鉱物粒が少量混じる1～2㎜大の岩片を含む。6住－8のような杯類に多いが、6住－22のような壺にも見られる。この胎土の土器はいずれも丁寧な作りである。

A′はA同様の胎土で焼き上がりが黄橙色味をおびる土器である。

B：素地や混入物はAに近いが、やや砂質で、器面が若干ザラザラしている。6住-10を代表とする。

C：ややボソボソした素地で軽量。焼きしまりに欠ける素地だが、外見や混入物はAに近い。3住-1を代表とする。

12. 暗文状ヘラ磨きについては以下の通りの略記号を使用している。

Ⅰ種　一本一本丁寧に、ほぼ等間隔で施している。

Ⅰ′種は一本一本が雑なため、Ⅱ種との中間的な仕上がりとなっている。

Ⅱ種　雑に施して、交叉するような部分も見られるが、数本単位のまとまりが観察できる。4住-1を代表とする。

13. 遺物の重量の計測にあたっては、10ｇまでは0.1ｇ単位、6000ｇまでは1ｇ単位、20㎏までは50ｇ単位、20㎏以上は100ｇ単位の秤を使用して計測した。

14. 各地図について、使用した原図類の名称については、その都度記載している。

口絵
序
例言
凡例
目次（文章・挿図・表・写真）

第１章　調査の方法と経過 …… 1
第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
第２節　試掘調査の成果 …… 3
第３節　発掘調査の方法 …… 5
第４節　発掘調査の経過 …… 6
第５節　整理の方法と経過 …… 8
第２章　遺跡の環境 …… 9
第１節　地理 …… 9
第２節　地形と地質 …… 10
第３節　歴史 …… 14
第４節　基本土層 …… 17
第３章　検出された遺構と遺物 …… 18
第１節　遺跡の概要 …… 18
第２節　縄文時代の遺構と遺物 …… 19
第３節　弥生時代の遺構と遺物 …… 20
第４節　古墳時代の遺構と遺物 …… 24
第５節　平安時代の遺構と遺物 …… 40
第６節　中・近世の遺構と遺物 …… 44
遺物観察表 …… 46
第４章　ま と め …… 51
第１節　土器 …… 51
第２節　石製模造品・玉類 …… 56
第３節　焼失住居 …… 58
第４節　石組カマド …… 60
第５節　吾妻町の古墳 …… 63
第６節　土壙 …… 70
第５章　自然科学分析 …… 71
第１節　土層とテフラ …… 71
第２節　プラント・オパール分析 …… 77
第３節　炭化種実 …… 81
第４節　樹種同定 …… 82
写真図版
奥付

挿図目次

第１図　霜田遺跡詳細位置…… 2
第２図　試掘資料①…… 3
第３図　試掘資料②…… 4
第４図　調査区設定…… 5
第５図　霜田遺跡位置（国土地理院20万分の１「長野」）…… 9
第６図　遺跡周辺の地形面区分…… 12
第７図　遺跡周辺の地質…… 13
第８図　周辺の遺跡分布（国土地理院：５万分の１「中之条」･「榛名山」･「草津」･「軽井沢」を編集、6.25万分の１に縮小）…… 15
第９図　基本土層…… 17
第10図　縄文時代　遺物…… 19
第11図　弥生時代・古墳時代　遺構分布…… 20
第12図　１号集石　遺構（平面）…… 21
第13図　１号集石　遺物…… 21
第14図　１号焼土　遺構（平面、セクション）…… 22
第15図　１号灰　遺構（平面）…… 22
第16図　弥生時代・古墳時代　遺物…… 23
第17図　１号竪穴住居　遺構①（平面、掘り方平面、セクション）・遺物…… 24
第18図　１号竪穴住居　遺構②（カマドセクション）…… 25
第19図　２・３号竪穴住居　遺構①（平面、掘り方平面、セクション、カマドセクション）…… 26
第20図　２・３号竪穴住居　遺構②（掘り方平面、柱穴セクション）…… 27
第21図　２号竪穴住居　遺物、３号竪穴住居　遺物①…… 28
第22図　３号竪穴住居　遺物②…… 29
第23図　４号竪穴住居　遺構①（平面、炭化材分布、セクション）・遺物…… 30
第24図　４号竪穴住居　遺構②（掘り方平面、カマド平面、カマドセクション、柱穴セクション）…… 31
第25図　５号竪穴住居　遺構①（平面、炭化材分布、セクション）…… 32
第26図　５号竪穴住居　遺構②（掘り方平面、セクション）…… 33
第27図　５号竪穴住居　遺物①…… 34
第28図　５号竪穴住居　遺物②…… 35
第29図　６号竪穴住居　遺構①（平面、炭化材分布、セクション）…… 36
第30図　６号竪穴住居　遺構②（掘り方平面、カマド平面、カマドセクション）…… 37
第31図　６号竪穴住居　遺物①…… 38
第32図　６号竪穴住居　遺物②…… 39
第33図　浅間Ｂテフラ下遺構…… 41
第34図　１号土坑　遺構（平面、セクション）…… 43
第35図　１号石列　遺構（平面、エレベーション）…… 43
第36図　１～10号溝　遺構（平面、セクション）…… 45
第37図　吾妻町・中之条町地域の主要な古墳・古墳群分布（国土地理院：５万分の１「中之条」･「榛名山」･「草津」･「軽井沢」を編集、10万分の１に縮小）…… 65

表目次

第１表　榛名火山周辺地域の中部更新統の層序対比…… 11
第２表　周辺遺跡一覧…… 16
第３表　遺物観察表…… 46～50
第４表　『上毛古墳綜覧』吾妻郡一覧 …… 66～69

写真目次

1　遺跡遠景（北から；左に岩殿山、奥に大戸の手子丸城、右に丘陵部の塩ノ平を望む）
2　Ⅰ区東側トレンチ掘削状況（北から）
3　Ⅰ区東側トレンチセクション（西から）
4　Ⅰ区西側トレンチ掘削状況（北から）
5　Ⅰ区西側トレンチセクション（西から）
6　Ⅱ区南壁基本土層セクション（北から）
7　Ⅱ区東壁基本土層セクション（西から）
8　1号集石全景（南から）
9　1号集石・土器出土状況（南から）
10　1号焼土検出状況（東から）
11　1号焼土セクション（東から）
12　1号焼土全景（東から）
13　1号灰全景（南から）
14　Ⅱ区古墳時代全景（南東から）
15　1号竪穴住居検出状況（北東から）
16　1号竪穴住居セクション（北から）
17　1号竪穴住居全景（南東から）
18　1号竪穴住居カマドセクションBライン（南東から）
19　1号竪穴住居カマドセクションCライン（南西から）
20　1号竪穴住居カマド全景（南西から）
21　1号竪穴住居掘り方全景（南東から）
22　1号竪穴住居カマド掘り方セクションCライン（南西から）
23　1号竪穴住居カマド掘り方全景（南西から）
24　2号竪穴住居全景（南西から）
25　2号竪穴住居カマド検出状況（南西から）
26　2号竪穴住居カマドセクション（南東から）
27　2号竪穴住居カマド全景（南東から）
28　2号竪穴住居カマド掘り方セクション（南東から）
29　2号竪穴住居カマド掘り方全景（南から）
30　2・3号竪穴住居セクションAライン（西から）
31　3号竪穴住居遺物出土状況（南から）
32　3号竪穴住居全景（南から）
33　3号竪穴住居セクション（南から）
34　3号竪穴住居カマドセクションDライン（西から）
35　3号竪穴住居柱穴セクションEライン（南から）
36　3号竪穴住居柱穴セクションFライン（南から）
37　3号竪穴住居柱穴セクションGライン（南から）
38　3号竪穴住居掘り方セクションAライン（南から）
39　2・3号竪穴住居掘り方全景（南から）
40　3号竪穴住居刀子出土状況（西から）
41　4号竪穴住居セクションAライン（西から）
42　4号竪穴住居セクションBライン（南から）
43　4号竪穴住居壁断面セクション（南から）
44　4号竪穴住居遺物・炭化材出土状況（西から）
45　4号竪穴住居全景（西から）
46　4号竪穴住居カマドセクションDライン（南から）
47　4号竪穴住居カマドセクションFライン（西から）
48　4号竪穴住居カマド全景（西から）
49　4号竪穴住居掘り方全景（西から）
50　4号竪穴住居カマド掘り方全景（西から）
51　4号竪穴住居貯蔵穴セクション（東から）
52　5号竪穴住居セクション（南東から）
53　5号竪穴住居全景（南から）
54　5号竪穴住居石製模造品・勾玉出土状況（南から）
55　5号竪穴住居こも編み石出土状況（東から）
56　5号竪穴住居掘り方全景（西から）
57　6号竪穴住居セクション（西から）
58　6号竪穴住居全景（南西から）
59　6号竪穴住居カマド付近遺物出土状況（西から）
60　6号竪穴住居カマド全景（西から）
61　6号竪穴住居カマド調査状況（西から）
62　6号竪穴住居焼土セクション（西から）
63　6号竪穴住居掘り方全景（西から）
64　6号竪穴住居床下土坑全景（西から）
65　2号灰分布状況（西から）
66　Ⅰ区浅間Bテフラ下水田検出状況（南から）
67　Ⅰ区浅間Bテフラ下水田検出状況（南から）
68　Ⅰ区浅間Bテフラ下水田検出状況（北から）
69　Ⅰ区浅間Bテフラ下水田検出状況（北から）
70　Ⅱ区浅間Bテフラ下水田検出状況（南から）
71　Ⅱ区浅間Bテフラ下水田検出状況（東から）
72　Ⅱ区浅間Bテフラ下水田検出状況（北から）
73　1号石列検出状況（東から）
74　1号土坑石検出状況（北から）
75　1号土坑全景（北から）
76　Ⅰ区中・近世遺構検出状況（南から）
77　Ⅰ区中・近世遺構検出状況（北から）
78　1号溝セクション（西から）
79　1号溝全景（西から）
80　2号溝セクション（西から）
81　2号溝全景（西から）
82　3号溝セクション（西から）
83　3号溝全景（東から）
84　4号溝全景（東から）
85　5号溝全景（東から）
86　6号溝セクション（西から）
87　6号溝全景（西から）
88　7号溝セクション（西から）
89　7号溝全景（東から）
90　8号溝セクション（東から）
91　8号溝全景（東から）
92　9号溝セクション（西から）
93　9号溝全景（東から）
94　10号溝全景（西から）
95　伊勢屋教授土壌調査風景（東から）
96　Ⅰ区中・近世遺構検出作業風景（南から）
97　Ⅱ区浅間Bテフラ下水田検出作業風景（南から）
98　坂上小学校6年生遺跡見学風景（東から）
99　発掘調査地点道路完成状況（南東から）
100　Ⅰ区西壁自然科学分析試料採取地点（東から）
101　Ⅱ区西壁自然科学分析試料採取地点（東から）

縄文時代遺物（土器・石器）
弥生時代遺物（土器）
古墳時代遺物（土器・石器）
霜田遺跡住居出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

抄　　録

書名ふりがな	しもだ　いせき
書　　名	霜田遺跡
副　書　名	一般県道川原畑大戸線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	――
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	363
編著者名	麻生敏隆・飯田陽一
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	2006年2月17日
作成法人ID	21005
郵便番号	377－8555
電話番号	0279－52－2511
住　　所	群馬県勢多郡北橘村大字下箱田７８４-2
遺跡名ふりがな	しもだいせき
遺　跡　名	霜田遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんあがつままちおおあざおおどあざなかだ
遺跡所在地	群馬県吾妻郡吾妻町大字大戸字仲田
市町村コード	104230
遺跡番号	22
北緯(日本測地系)	36°30′37″
東経(日本測地系)	138°46′00″
北緯(世界測地系)	36°30′48″
東経(世界測地系)	138°45′48″
調査期間	20010401－20010630
調査面積	1,300㎡
調査原因	県道川原畑大戸線改築工事
種　　別	集落／その他
主な時代	縄文／弥生／古墳／平安／中・近世
遺跡概要	集　落－古墳－竪穴住居６－集石１／平安－水田数面－土坑１－石列１／その他－弥生－集石／中・近世－溝10－土坑１－石列１
特記事項	

第１章　調査の方法と経過

第１節　発掘調査に至る経緯

一般県道川原畑大戸線（377号線）は、吾妻郡長野原町の川原畑地区を基点とするものの、基点から同郡吾妻町大柏木地区までの区間が不通であり、現在の走行可能区間は大柏木字大場から大戸字霜田の国道406号線との分岐点までである。

長野原町の八ッ場ダム建設に伴い多量の掘削土砂が排出されるために、大柏木地区に大規模な土置き場が予定されるとともに、土砂の運搬用の工事専用道路トンネルが川原湯上湯原から掘削されることとなり、それに伴い大戸から大柏木の間の現県道が工事用道路として拡幅改修されることとなった。全体延長は4,800mで、大柏木トンネル側から１工区（1,400m）、２工区（950m）、３工区（1,050m）、４工区（1,400m）となっており、幅員は車道が６m（片側１車線３m）、歩道３m（下流側）となっている。

2000（平成12）年６月22日に中之条土木事務所と八ッ場ダム水源地域対策事務所は、「一般県道川原畑大戸線地方特定道路整備事業用地調査委託」を大柏木地区で開始した。

この計画を受けて、群馬県教育委員会文化財保護課では、計画路線対象地域の埋蔵文化財分布調査を実施し、第１期工区間内では吾妻町霜田遺跡の１遺跡が確認された。そこで、同年11月21日には、周知の遺跡である「霜田遺跡」での試掘調査が実施された。（詳細は第２節に記載）その後、2001（平成13）年３月６日にも、橋脚部分での試掘調査が追加実施された。（詳細は第２節に記載）

これらの試掘調査の結果を受けて、発掘調査は財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団によって、2001（平成13）年に実施されることになった。

その後も該当路線部分での試掘調査を大柏木地内で随時実施してきたが、遺跡は発見されなかった。

なお、発掘調査終了後の2002（平成14）年３月６日に群馬県知事と建設省関東地方建設局長が、「八ッ場ダム建設に伴う一般国道145号、一般県道林長野原線、一般県道林吾妻線及び一般県道川原畑大戸線改築工事に関する基本協定書」を締結し、改築工事が本格的に開始され、2005（平成17）年11月現在ではほぼ終了しており、一部の供用が開始されている。

旧一致橋の西に架設される新一致橋は、橋長92.0m、幅員10.5mの２径間連続鋼板桁橋であり、下部工は逆Ｔ式橋台で、橋脚は形柱張出し式である。上部工は床版工、高欄工、舗装工の３件に分離し、床版工はコンクリートで行い、高欄工は鉄又はダクタイルを使用する。舗装工はアスファルトで車道部8.0m、歩道部3.0mにし、道路改良工は橋の据え付け工事を行う。

大柏木トンネルはダム本体の掘削土砂運搬用の道路トンネルで、全長2,977m、車道部8.0m、歩道部1.25mで、ＮＡＴＭ（ナトム）工法を採用している。この工法は掘削と地圧による崩落を防止する支保から成り、掘った壁面にコンクリートを吹き付けてロックボルトで固定して筒状のトンネルを作り出す方法である。

また、2001（平成13）年１月から建設省関東地方建設局は国土交通省関東地方整備局に、2002（平成14）年４月から群馬県教育委員会文化財保護課は群馬県教育委員会文化課にそれぞれ改編・改称された。さらに、2005（平成17）年４月からは、中之条土木事務所が群馬県吾妻県民局に、八ッ場ダム水源地域対策事務所が群馬県県土整備局特定ダム対策課にそれぞれ組織機構が再編成された。

第１図　霜田遺跡詳細位置

第２節　試掘調査の成果

本遺跡の調査対象範囲の確定にあたって、県教育委員会文化財保護課（現在の文化課）の矢口裕之が担当し、2000（平成12）年11月21日に実施した。当事業団からは藤巻幸男が協力した。まず、事業予定地内において幅１～３ｍの試掘溝を設定し、重機を使用して掘削を行った。試掘調査では、遺構検出面の認定、遺構の有無の確認、遺物の出土の確認を行った。

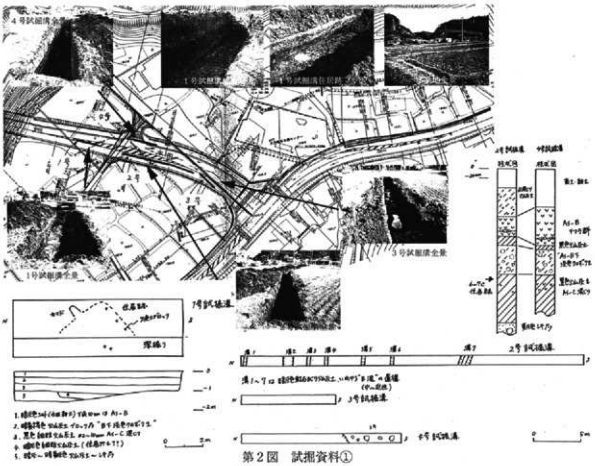
１号試掘溝　表土下で浅間Ｂテフラ混じり火山灰土層、浅間Ｂテフラ層、黒色細粒火山灰土層、暗褐色火山灰土ブロック層、浅間Ｃテフラ混じり黒色細粒火山灰土層などを確認し竈付きの竪穴住居を１軒検出した。黒色火山灰土からは６～７世紀の土師器の破片が多く出土し、古式土師の破片が１点出土している。

２号試掘溝　表土下で浅間Ｂテフラ混じり火山灰土層、浅間Ｂテフラ層、黒色細粒火山灰土層、暗褐色火山灰土ブロック層、浅間Ｃテフラ混じり黒色細粒火山灰土層などを確認し、浅間Ｂテフラ混じり火山灰土層を覆土とする溝を７条検出した。遺構からは遺物が出土しなかったが遺構の帰属時期は中～近世と考えられる。

３号試掘溝　表土下で浅間Ｂテフラ層を挟在する黒色細粒火山灰土、亜円礫を含むローム質シルト層などを確認したが、遺構・遺物は検出されなかった。

４号試掘溝　表土下で浅間Ｂテフラ層、黒色細粒火山灰土、暗褐色火山灰土ブロック層、浅間Ｃテフラ混じり黒色細粒火山灰層などを確認し、黒色火山灰土からは焼土ブロックや土師器の破片が出土している。

その結果、古墳時代の竪穴住居などの遺構が検出され、中世の溝が分布していることが明らかになった。今後本格的な発掘調査を行う必要がある。



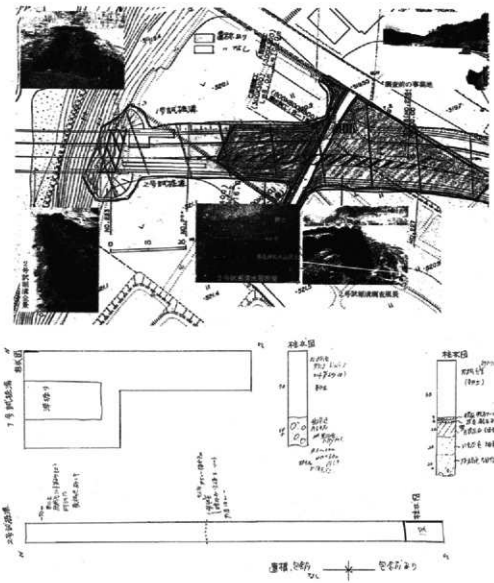
第２図　試掘資料①

また、道路部分の北側、温川に架かる橋の橋脚部分の工事に先行する形で遺跡の調査対象範囲の確定にあたって、県教育委員会文化財保護課（現在の文化課）の矢口が担当し、2001（平成13）年１月13日に実施した。当事業団からは藤巻が協力した。まず、事業予定地内において幅１～５ｍの試掘溝を設定し、重機を使用して掘削を行った。調査では、遺構検出面の認定、遺構の有無の確認、遺物の出土の確認を行った。

１号試掘溝　厚い耕作土からなる表土下で黄褐色円礫層を確認した。耕土中には遺物包含層と思われる黒色土がブロックで含まれており、耕作により遺跡が破壊されていることが確認された。

２号試掘溝　表土下で黄褐色円礫層を確認し黒色土がブロックで含まれており、事業地内は耕作により遺跡が破壊されていることが確認された。今回の事業地から前回の試掘溝にかけて用地内に試掘溝を延長したところ、表土下で浅間Ｂテフラ層、黒色細粒火山灰土、暗褐色火山灰土ブロック層、浅間Ｃテフラ混じり黒色細粒火山灰層などを確認し、遺物包含層が確認された。

今回、試掘調査を実施した事業地の範囲では、本格的な発掘調査を実施すべき遺跡の分布は確認されなかった。発掘調査の必要はないものと判断される。



第３図　試掘資料②

第３節　発掘調査の方法

道路予定区域の東西幅約250m・南北幅約20mの調査範囲では、昭和20年代にすでに圃場整備が実施されていたため、調査区域内に東西方向の農道が走っていた。便宜的にこの道を境として調査区域を２分割し、南からⅠ区、Ⅱ区と呼称した。（第４図参照）

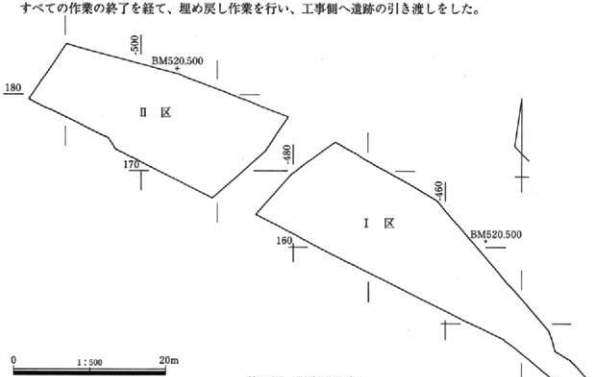
調査区の全域に、日本平面直角座標（国家座標）を基準として１m四方のグリッドを設定、遺構、遺物の測量・図化を行った。グリッドの名称は、日本平面直角座標のＸ・Ｙのそれぞれの座標値の下３桁を使用した。ただし、Ｙ座標には「－」を付ける。グリッド杭・水準点杭の測量・打設は測量会社に委託した。日本平面直角座標は2002年４月改正以前の日本測地系を用いている。

区単位で南のＩ区から発掘調査を進行していった。排土については、試掘調査により路線内で遺跡が無いと判断された場所や、あるいは土置き場として使用を許可された周辺地域、さらに発掘調査が終了した場所を置場にした。また、各区の調査は基本的に以下の調査方法で行われた。

１．掘削機(バックホー)による基本土層の１層の表土および２層の黒褐色土層の掘削を行う。
２．As－B層上面を精査し、人手による遺構確認作業を行い、土坑、溝等を検出、個々の調査を行う。
３．遺構調査終了後、再び掘削機(バックホー)による基本土層４層のAs－B層の掘削を行う。
４．As－B層下面を精査し、遺構確認作業を行う。水田、土坑等を検出、個々の調査を行う。
５．遺構調査終了後、再び掘削機(バックホー)による基本土層の５・６層の掘削を行う。
６．基本土層の７層を精査し、竪穴住居、集石等を検出、個々の調査を行う。
７．遺構調査終了後、再び掘削機(バックホー)による基本土層の８層の掘削を行う。

記録写真の撮影には中型と小型カメラを併用して、基本的に６×７と35㎜の白黒（モノクロ）フィルムと、35㎜のカラースライド（リバーサル）で行い、遺構全景の撮影にはモニタリングカメラ、ローリングタワーを場合によって併用し、最終段階での全体写真の撮影には高所作業車を用いて行った。

すべての作業の終了を経て、埋め戻し作業を行い、工事側へ遺跡の引き渡しをした。



第４図　調査区設定

第4節　発掘調査の経過

本遺跡の発掘調査は、2001（平成13）年4月から6月までの3ヶ月間で、合計1,300㎡を対象に実施した。発掘調査日誌から抽出された日程は以下の通りである。

発掘調査作業日誌抜粋

4月4日(水)～4月11日(水)　関係機関、周辺地区へのあいさつ。

4月12日(木)　調査区内南側区域（Ⅰ区）から重機による掘作士・As-B混じり黒色土を除去（深3 60cm）、試掘データと異なる。

4月13日(金)　Ⅰ区で浅岡B テフラ上の溝検出。中・近世の時期と考えられる。

4月16日(月)　調査区内北側地域（Ⅱ区）及び搬入路の表土掘削開始。

4月18日(水)　吾妻町教育長・生涯学習課長・埋蔵文化財担当高橋氏来訪。

4月19日(木)　Ⅰ区作業継続。堀改土がB混じり黒色土の溝9条検出、うち7号溝まで写真撮影。見学者1名、以前に大柏木の畑から土器が出たとのこと。

4月20日(金)　ベンチマーク及びグリッドの設置、遺構測量（平面図・断面図）。8・9・10号溝全景写真撮影。Ⅰ区遺構確認作業終了、Ⅱ区遺構確認作業開始。吾妻町文化財審議委員長丸山不治雄氏来訪。見学者2名。Ⅱ区B軽石除去作業開始。

4月23日(月)　遺構の存在の可能性があることから、今日からの重機を明日からに変更。Ⅱ区B軽石除去継続、多少の凹凸があり水田の可能性もある。石の列も検出。写真撮影。Ⅰ区の軽石除去開始。見学者2名。

4月24日(火)　Ⅰ区B軽石層（4層）下検出作業継続。Ⅱ区B軽石層下平面測量。重機Ⅰ区B軽石除去、北側B下黒褐色土層（5層）、茶褐色土層（6層）、黒色土層（7層）の各上面検出作業。6層上面の一部で灰の分布、7層上面で試掘ではっきりとした堅穴住居検出。見学者1名。雨のため一時中断・待機。

4月25日(水)　朝からの雨のため、重機・測量は明日に延期。土器洗いなどの室内作業。

4月26日(木)　小型重機による試掘トレンチ掘り、Ⅰ区県道西・東側各1本。西側は水田が3層でB軽石下は不明瞭。東は上から70cmが現代の投乱で壊されていて、砂利が敷かれていた。一部にB軽石が残っており、さらにその下に黒色粘質土の下に軽石が存在（As-C軽石か）。現国道付近に古い沢が存在か。溝セクション写真撮影。水路切り同し、これまで使われていたパイプ管やコンクリート管を再利用。Ⅰ区B軽石下測量、及びトレンチセクション測図。見学者1名。小型重機による作業終了、搬出。

4月27日(金)　Ⅰ区B軽石調査、B下水田検出作業継続、終了。B軽石・石混入穴写真撮影、灰かき穴か。セクションの様子から例本の可能性は低い。セクション測図・写真撮影。石列、B軽石下の測図追加。水源地域対策事務所霜田氏他2名来訪、連休中の安全対策の依頼、周囲の安全ロープの点検と看板設置。見学者1名。周囲の水田の耕作が始まり、畦作も開始されている。いよいよ水田に水が入る時期か。

5月1日(火)　3時過ぎから Ⅰ区の試掘開始、暗褐色粘質土と黒色粘質土の下に礫出土、南側に傾斜。坂上小学校6年女子3名見学。

5月2日(水)　課長より調査対象面積の確認、土地平面図での計算では本遺地域対策事務所の見込みの1,000㎡ではなく、約1,300㎡。Ⅰ区試掘継続、北西部分7層に土器散布。Ⅱ区搬入路剥ぎ取り、焼土検出、カマド か。クローラー作業終了、搬出。

5月7日(月)　Ⅰ区7層遺構確認調査、土器片出土するものの遺構無し。1号土坑完掘写真撮影、石を取り外し立ち上がりの確認から風倒木の可能性有り。Ⅱ区7層上面遺構確認。石列の南側セクション観察からB軽石堆積以後（B軽石混土であり中世から近世にかけてか）の地域と考えられる。

5月8日(火)　朝から小雨、重機は休止、一時室内作業（土器洗い・注記）。11時ごろから遺構確認作業開始、竪穴住居検出。午後は小雨のため若干室内作業。見学者1名、大戸の手小丸で石鏃などが約20年前に出土、今は坂上中学校にあるとのこと。

5月9日(木)　Ⅱ区7層での遺構確認、試掘時に確認していた竪穴住居検出（2号と命名）。午前11時、文化財保護課矢口氏来訪、試掘トレンチ内の住居について見解を聞く。軽石は浅岡C か。見学者1名（2度目）、及び工事関係者3名。焼土が二カ所、あるいは出土する古式土師の時期の住居の炉の跡か。

5月10日(木)　住居の調査開始、1号竪穴住居は東カマドで両袖に軸を持ち、須恵器から7世紀か。2号竪穴住居は東カマドと考えられるが、黒色土を掘り込む最上が黒色土のため風倒が確認しづらい。時期は土師器から6世紀前半か。1号焼土の周辺からは古式土師が出土。2号土坑は焼土と灰、それに炭化物が出土。5号トレンチ際からは炭が出た。

5月11日(金)　試掘トレンチ内の焼土が2号竪穴住居のカマド、その東のカマドが3号竪穴住居と判断、時期は5世紀か。堀設セクションの写真撮影及び測図。2号土坑が石組カマドと判明、4号竪穴住居とする（5号トレンチ際の炭はこの住居のもので焼失住居と判明）。その東に敷石状の遺構検出、土器から縄文か弥生ぐらいと考えられる。2号焼土としたものはカマドの可能性有り、セクション測図。1号竪穴住居は見事な石組カマドと判明、堀設セクションとカマドセクションの写真撮影及び測図。Ⅱ区南側壁の基本土層のセクション写真撮影及び測図。吾妻町教育委員会新井氏来訪、遺跡の概要説明。圃場整備に伴う霜田遺跡の発掘は平成3年で担当は水田稔氏とのこと。見学者3名。

5月14日(月)　1号竪穴住居測図、3号竪穴住居測図、1号集石測図・写真撮影。遺跡説明用の資料作成、午前11時過ぎに来訪の坂上小学校6年生の見学（P.L.13-98）。麻生と新井で2班に分けて説明、渡辺と石原が応援。1号竪穴住居のカマドセクション付け足し測図・写真撮影。3号竪穴住居のカマド上部遺物測図及び写真撮影。3号竪穴住居の西壁がやっと判明。

5月15日(火)　1号竪穴住居全景写真撮影。カマド掘り方セクション写真撮影・測図、3号竪穴住居カマドセクション・エレベーション測図、4号竪穴住居セクション写真撮影・測図、ベルト除去開始。分析データ採取、柏川テフラ・浅間D・六合軽石の存在の可能性。住居の存在の確認のためにトレンチ設定。見学者3名。長野原町教育委員会富田氏見学。

5月16日(水)　1号集石測図、1号竪穴住居カマド掘り方袖石エレベーション測図、4号竪穴住居ベルト除去、全体写真撮影。新規のトレンチで住居確認。5号竪穴住居として拡張。1号焼土の平面及びセクション写真撮影・測図。課長来訪、調整会議は25日に延期、今後の工程は再調整の必要。

5月17日(木)　Ⅱ区全体図作成。2・3号竪穴住居セクション写真撮影、測図、全体写真撮影。5号竪穴住居セクション写真撮影、測図、全体写真撮影。1号炉集中部平面写真撮影、測図。トレンチ追加、新たな住居検出か。Ⅱ区調査区全体写真撮影準備。

5月18日(金)　2号竪穴住居全景写真撮影。5号竪穴住居全景写真撮影（再）。高所作業車によるⅡ区全体写真撮影（Ⅰ区から北方向、温川左岸から南）。6号竪穴住居調査、カマド検出。重機によるⅡ区北部分9層上面検出作業。

5月21日(月)　石守氏焼失住居見学、柱や梁木などに注意、土壁よりもむしろ茅せ編の屋根下半分に土を貼るタイプが焼失したものか。4

号竪穴住居炭化材取り上げ開始。5号竪穴住居平面測図、遺物取り上げ開始。6号竪穴住居調査継続。重機によるⅡ区南部分9層上面検出作業、精査。重機によるⅠ区西・南壁部分埋め戻し（西側水田から の湧水防止対策）。見学者数名。

5月22日（火）　朝から小雨がぱらつく天候。4号竪穴住居炭化材取り上げ継続。5号竪穴住居の石など取り上げ。6号竪穴住居セクション写真撮影、測図。午後3時から雨のため室内作業。写真整理準備。

5月23日（水）　雨のため朝から室内作業（土器洗い、注記）。遺跡説明パンフレット作成。

5月24日（木）　雨のため朝から室内作業（土器洗い、注記）。写真・スライド整理開始。

5月25日（金）　2号竪穴住居カマドセクションと平面の写真撮影、測図（粗土サンプル）。3号竪穴住居遺物取り上げ開始。4号竪穴住居炭化物取り上げ継続。5号竪穴住居焼土（サンプル）除去開始。6号竪穴住居セクション除去、平面写真撮影、測図。1号焼土掘り上げ、写真撮影、平面測図。県職員狭川地区初任者研修見学（5名、小林氏含む）。

5月29日（火）　2・3号竪穴住居炭化材取り上げ。4号竪穴住居カマド調査開始。5号竪穴住居焼土掘り上げ、炭化材検出、スナップ写真撮影。6号竪穴住居遺物取り上げ、床面検出作業、カマド調査開始。見学者5名。

5月30日（水）　2号竪穴住居カマド掘り方セクション写真撮影、測図。2・3号竪穴住居掘り方調査。4号竪穴住居炭化材追加測図、カマド調査継続。5号竪穴住居遺物・炭化材追加写真撮影、測図。6号竪穴住居遺物追加測図、カマド調査継続。トレンチ設定で床面がさらに20cmほど下であることが判明、掘り直し始める。吾妻町町長見学。3時ごろ雨のため室内作業に切り替え。

5月31日（木）　朝から雨のため注記の室内作業。午後現場作業、5号竪穴住居炭化材取り上げ。

6月1日（金）　2・3号竪穴住居掘り方調査継続。2号竪穴住居カマド掘り方セクション追加作図。4号竪穴住居カマドセクション追加測図、平面写真撮影。5号竪穴住居炭化材・遺物取り上げ。6号竪穴住居調査継続、臼玉出土。

6月4日（月）　2号竪穴住居カマド掘り方写真撮影。2・3号竪穴住居清掃後、掘り方写真撮影。5号竪穴住居床検出作業後、写真撮影。6号竪穴住居セクション追加写真撮影、測図。床検出作業継続。見学者4名、その内のお一人の方が以前に月夜野町で拾った石器を明日見て欲しいとのこと。

6月5日（火）　3号竪穴住居セクション追加写真撮影、測図。4号竪穴住居掘り方調査開始。5号竪穴住居掘り方調査開始。6号竪穴住居セクション追加写真撮影、測図、遺物出土状態写真撮影。伊勢屋先生による洪水堆積の観察（Pl. 13-95）。砂のみが堆積物でその上層はそうではないとのこと。腐食土形成の未発達による土色の変化か。また、北の川寄りが高く浸食の度合いが特徴的とのこと。昨日見えた大柏木の加辺さん、月夜野町小竹表探の石鏃欠損品持参、鑑定後保管について は本人の意思を尊重（寄贈してもいいとのこと）。他に見学者1名。

6月6日（水）　朝から雨の一日、ついに関東地方も梅雨入り。作業員全員休み。

6月7日（木）　2・3号竪穴住居掘り方セクション追加測図。4号竪穴住居カマド石エレベーション測図、掘り方調査開始。5号竪穴住居掘り方調査。6号竪穴住居遺物出土状態測図、遺物取り上げ。午前11時半雨のため室内作業に切り替え、雨が降ったり止んだりのためその まま終了時まで継続。

6月8日（金）　3号竪穴住居柱跡検出作業。4号竪穴住居掘り方調査、カマドセクション写真撮影・測図、貯蔵穴調査。5号竪穴住居掘り方調査、写真撮影。6号竪穴住居遺物取り上げ、炎取り上げ、カマドセクション写真撮影・測図。

6月11日（月）　2・3号竪穴住居柱穴セクション写真撮影、測図。4号竪穴住居掘り方セクション測図、カマドセクション追加写真撮影、エレベーション測図。貯蔵穴セクション写真撮影、測図。焼土断ち割りセクション写真撮影、測図。5号竪穴住居遺物追加測図、取り上げ。6号竪穴住居床面及び壁精査写真撮影、遺物出土状態測図。

6月12日（火）　2・3号竪穴住居掘り方セクションベルト除去、掘り方全景写真撮影（西）、調査終了。4号竪穴住居掘り方精査、カマド周辺遺物測図、遺物取り上げ、カマド掘り方セクション・エレベーション測図。5号竪穴住居最終確認、調査終了。6号竪穴住居壁精査（淡色黒ボク土への掘り込みで確認、当初確認範囲よりも広がる。）、炎、石取り上げ、カマド使用面写真撮影、エレベーション測図。

6月13日（木）　基本土層頁・軍・区層の確認作業、4号竪穴住居掘り方平面写真撮影、カマド掘り方遺物取り上げ、写真撮影、測図。5号竪穴住居掘り方平面・セクション測図。6号竪穴住居掘り方精査、写真撮影、測図。カマド掘り方セクション写真撮影、測図。床下土坑エレベーション測図。機材整備・撤収準備。

6月15日（金）　引越・現場解散。

6月19日（火）　現場終了引き渡し。

本遺跡の発掘調査にあたり、例言でも記述したように遺跡の名称については若干の混乱が依然として現在も続いていると言わざるを得ない。その内容は下記の通りである。

まず、遺跡の発見は1970（昭和45）年の工場工事に伴い弥生時代中期の壺が出土したことによる。群馬県教育委員会が1971（昭和46）年に刊行した『群馬県遺跡台帳』では「3109　下田遺跡　弥生　包蔵地」、同年に吾妻町が刊行した『あがつま　坂上村誌』でも「大戸字下田　工場工事の際に発見　高さ55cm」、文化庁が1977（昭和52）年に刊行した『全国遺跡地図　群馬』でも「下田遺跡　散布地　地番150の1、2」と記載されている。それに対して、群馬県立歴史博物館が1981（昭和56）年に刊行した『群馬県立歴史博物館　常設展示図録』では「霜田遺跡　弥生時代中期前半」として地図に遺跡位置がドットで記載されている。吾妻町教育委員会が1992（平成4）年に刊行した『宿遺跡』の発掘調査報告書でも「霜田遺跡　1970（昭和45）年発見　弥生時代中期」と記載されている。このように1970年代から1980年代にかけて遺跡名が「下田遺跡」から「霜田遺跡」に変わってきている。だが、2002（平成14）年作成の群馬県文化財情報システム（WEB版）では、再び「下田遺跡　弥生　散布地」と記載されている。

第５節　整理の方法と経過

本遺跡の整理作業は、2005（平成17）年の７月から11月までの５ヶ月間が整理作業期間とされたが、その当初の７月の１ヶ月間について、本来の整理担当者が遺跡の発掘調査が１ヶ月延長となったために、担当する整理作業班の前整理作業の整理担当者がその１ヶ月間だけ代理を勤めることとなった。こうした整理期間中での整理担当者の交代という事態が生じたため、作業にあたってはその内容と工程について詳細な引継を行うという異例の事態となった。

まず、土器や石器・石製品などの遺物については、現場で既に洗浄・注記などの基礎整理を行っていたために、洗浄・注記の有無の確認、取り上げ番号などのチェックなどを行った。

次に、遺構別・層位別・地点別の分類・区分けの後に接合・復元作業を開始し、実測個体の選び出しと実測・トレース作業を行ったが、暗文の土師器や麦類についてはスリースペースと呼称する機械実測による素図作成を行い、版下図版を作成した。その際に、デジタルカメラの撮影による写真への補足書き込みをした。

さらに、図面類については原図全体の確認・台帳化と、使用原図の選び出しと鉛筆によるトレース素図とトレース図作成を実施した。また、出土した遺物の図面上での位置の確認などを行った。そして、仕上がりの確認とともに、レイアウトの作成、遺構や遺物、それに関連する資料の図版作成を行った。

写真関係では、現場で撮影した３５ミリと６×７の個々の白黒写真と35ミリスライドについては、出土状態など写真の種類などの確認、記録カード・台帳化を行った。特に、スライドは保存用と活用用の２種類への振り分け編集作業を実施し、報告書刊行後の利用に備える準備をした。

遺物は選び出し個体の写真撮影から行った。これらの作業がほぼ終了した時点で、レイアウトの作成、遺物・遺構・写真図版の作成を開始した。

同時に、報文原稿については整理担当者を中心に執筆したが、一部については発掘調査担当者らの助言・協力を得た。自然科学分析などについては、それぞれの専門の研究者による各分析結果の内容を第５章として巻末に収録した。

これらの作業をすべて行い、報告書作成の作業が終了し、印刷工程を経て刊行となった。

整理期間中にいくつかの問題が生じていたために、随時訂正を加えた。それらは下記の通りである。

まず、2001（平成13）年６月20日の公布、翌2002（平成14）年４月１日施行の「測量法及び水路業務法の一部を改正する法律」により、経緯度の測定がこれまでの日本測地系に代えて世界測地系に従って行うこととなった。本遺跡の発掘調査の時期が2001（平成13）年度であり、旧測量法の適用の期間内であったために、新たに世界測地系に変換する必要が生じた。そこで、国土地理院測地部測地第二課を中心に作成された「地域毎の座標変換パラメータ」を使用して座標を変換した。

次に、遺跡周辺の地質及び地形の作成にあたって、当初は故新井房夫氏を中心とした群馬県地質図作成委員会が1999（平成11）年に作成した『群馬県10万分の１地質図』を参考にしようとしたが、吾妻地区に関しては大まかな図面であることから、群馬県が製作を継続している５万分の１の『土地分類基本調査』を利用しようとした。だが、これも該当する「草津」・「中之条」・「軽井沢」・「榛名山」のそれぞれの地図毎に製作責任者が異なるため、実際に貼り合わせてみると地質の範囲や細分などの違いが生じているために使用しないこととした。そこで、この地域を大学時代の地質のフィールドとしていた矢口裕之に依頼して、地質図と地形図の作成とそれぞれの説明も含めた文章を第２章第２節に収録した。

第２章　遺跡の環境

第１節　地理

吾妻郡吾妻町は群馬県の西部、上毛三山のひとつである榛名山の北西麓に位置する。東は吾妻郡東村、南東は群馬郡榛名（はるな）町、南は高崎市、西は吾妻郡長野原町、北西は同郡六合（くに）村にそれぞれ接する。周囲は標高1,000m級の山々が連なり、南東部に榛名山系の掃部（かもん：標高1,449m）・鬢櫛（びんぐし：標高1,350m）・居鞍（いぐら：標高1,340.1m）、西部に浅間隠（あさまがくし：標高1,756.7m）・菅峰（かんぼう：標高1,473.5m）・高間（たかま：標高1,341.7m）・笹峰（ささとや：標高1,756.7m）、北部に吾嬬（かづま：標高1,181.5m）・薬師（やくし：標高974.4m）などがそびえる。河川は北部を吾妻川が東流し、東部の榛名山麓を泉沢川・大泉寺川・金井川・深沢川が小河谷を形成して北に流れ、南西部を温（ぬる）川が東に流れ、それぞれ吾妻川に合流する。

本遺跡の所在する坂上地区は、周囲を山々に囲まれた東西に細長い地形を呈し、浅間隠山の北東麓から流れ出す温川の左右両岸に段丘が形成されているものの、山間地特有の河川の蛇行により右岸側のみが幅が狭くなっており、一部では渓谷を作り出している。本遺跡が立地する段丘は最下位面で関東ロームがほとんど堆積していないことから、その形成時期は完新世の時期と考えられる。

この緩やかな傾斜の段丘やその上位の丘陵上に縄文時代から平安時代にかけての遺跡がいくつも存在しており、現在でも住宅地や水田、畑として利用されている。

温川は須賀尾（すがお）、本宿（もとじゅく）の東で大柏木（おおかしわぎ）方面からの南に流れる今（いま）川と合流し、大戸で萩生（はぎゅう）方面からの北に流れる見城（けんじょう）川と合流する。遺跡は今川との合流点の下流の右岸に位置し、現河床との比高は約20mである。

第５図　霜田遺跡位置（国土地理院20万分の１「長野」）

第2節　地形と地質

霜田遺跡周辺の地形や地質は、守屋（1966）、山口（1975）、竹本ほか（1987）、矢口（1989）、矢口ほか（1992）、矢口（1999）、竹本（1999）などで記載されている。本報告では、矢口ほか（1992）に従って（第1表）遺跡周辺の地形や地質の概要を述べる。

地形

遺跡の周辺は、温川の河岸段丘群と新第三系からなる山地及び榛名火山の山麓扇状地が会合する小規模な山間盆地の地形を呈する。温川沿いの河岸段丘は、大戸面（新称）、霜田面（新称）、本宿面（新称）に区分される（第6図）。これらの段丘面は、上部吾妻ローム層、下部ローム層、上部ローム層に被覆され、温川起源の河成堆積物で構成される。

温川流域の段丘群の大戸面は、上部吾妻ローム層の上部層が被覆し、中之条盆地の箕原面に対比される。霜田面は浅間中之条火山礫層を挟在する下部ローム層が被覆する中位段丘である。本宿面は、上部ローム層の最上部が被覆し、中之条盆地の伊勢町Ⅰ面に対比される。

榛名火山の山麓扇状地は、比較的平坦な緩斜面地形群から構成され、中部吾妻ローム層に被覆される長藤面と榛名長藤火砕流堆積物で構成され、上部吾妻ローム層に被覆される相原面からなる。

地質

遺跡周辺の山地を構成する新第三系上部中新統は、吾妻層（中村1986）で火砕岩類や貫入岩から構成される。山間盆地に見られる第四系中都更新統は、下位より大戸層、萩生層、相原層である（第7図）。

大戸層は、シルト～細粒砂互層などで構成される湖成堆積物で、最大層厚は100m＋である。最下部には不淘汰礫層や泥炭質シルト層などが見られ、大型植物遺体を産出する。湖成堆積物は谷を埋めるように分布し、一部の層準ではスランプ構造が著しい。本層下位には、草津白根長野原軽石6、7が挟在する。

萩生層は、凝灰質砂～砂礫層などで構成される扇状地堆積物で、スコリア質火山礫を含む火山性砕屑物を主とし、最大層厚は100mである。本層の最上部には手古丸軽石が挟在する。相原層は複輝石安山岩質の榛名相原火砕流堆積物からなり、層厚は30mである。山麓に見られる独立峰は、古賀食山火山岩類で複輝石安山岩質溶岩及び同質の火砕岩類から構成される。

温川流域の河岸段丘群は、温川を起源とする中部～上部更新統の段丘礫層からなり、安山岩や安山岩質火砕岩の砂礫などから構成される。

堆積物の地史及び年代

矢口（1999）は、群馬県北西部のテフラや火山灰土の年代を推定した。これに基づく遺跡周辺の堆積物の年代（ka＝1,000年）は以下のとおりである。

大戸層及び萩生層は、榛名火山山麓と基盤山地を流れる古温川が塞き止められて形成した堆積物である。塞き止め作用をもたらした原因は、榛名火山起源の火山噴出物や崩壊堆積物が想定されるが、その実態は不明である。

大戸層～萩生層の堆積時期は、榛名火山の主成層火山の山体形成期の後半に相当し、成層火山の成長と火山麓扇状地の形成に関わる堆積物である。大戸層は草津白根長野原軽石5と6の間から堆積しはじめ、手古丸軽石を挟在する萩生層まで整合的に堆積している。この間の年代は、525～440kaである。榛名火山北西麓の扇状地面の原型が形成されたのはこの時期であり、手古丸軽石から箕原オレンジ火山灰（阿蘇1）までの440ka～275kaまでは、断続的に火砕流堆積物が西麓を流下し、標高800m前後では溶岩も見られる。これら

は相原火砕流や長藤火砕流で、現在の榛名山頂西側外輪山の溶岩ドームの形成期に相当する火山噴出物である。

温川流域の河成堆積物が段丘化するのは大戸面形成期で、礫層は酸素同位体ステージ（δ18O）の９～８に相当し、離水時期はおおよそ300ka前後である。中位段丘を構成する霜田面は、中之条火山礫層を挟在する下部ローム層に覆われることから、その離水期は55kaである。

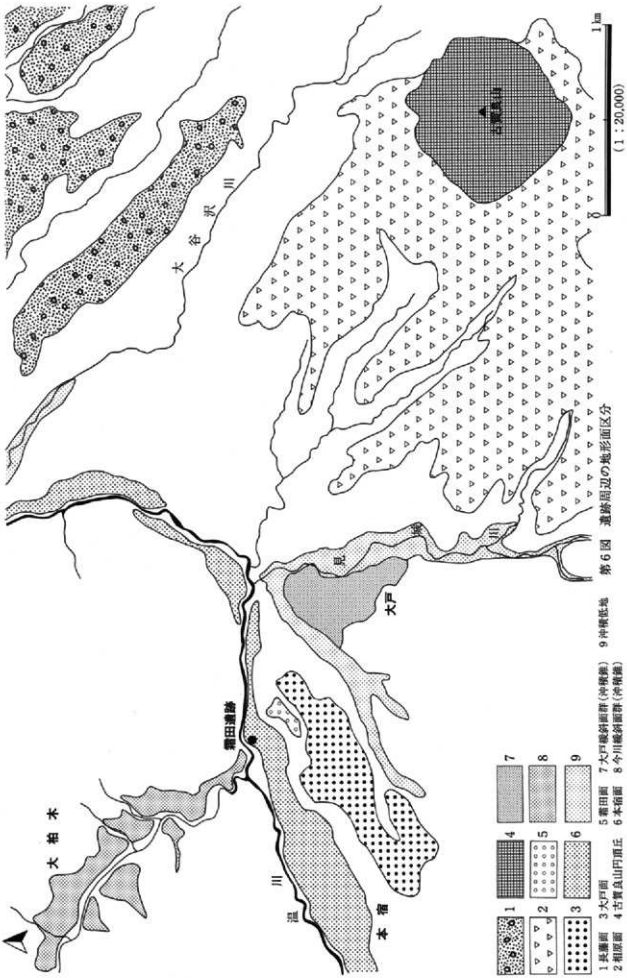
遺跡が立地する本宿面は、開析された谷が見られるため上部ローム層が削剥された場所も見られるが、その離水時期は20～10ka前後であると思われる。遺跡の発掘調査地では、本宿段丘礫層の上位に黒色火山灰土層が見られ、浅間Ｃテフラ、浅間Ｂテフラ及び浅間粕川テフラが確認された。

文献
守屋以智雄(1966)　吾妻川流域の地形発達．地理学評論39，51−62．
山口一俊(1975)　中之条盆地とその周辺の地形．駒澤大学大学院地理学研究報告５，28−39．
中村庄八(1986)　群馬県北西部の吾妻川中流域に分布する新第三系．地球科学，40，４，238−254．
竹本弘幸・米澤　宏・由井将雄(1987)　中之条盆地の層序とフィッション・トラック年代．駒沢地理，23，93−105．
矢口裕之(1989)　榛名火山北西麓の中部更新統(演旨)．日本地理学会第96年学術大学講演要旨，277．
矢口裕之・榛名団体研究グループ・高崎地学愛好会(1992)　群馬県榛名火山周辺の中部更新統．第四紀，25，57−62．
矢口裕之(1999)　群馬県北西部のテフラとローム層．財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要，16，61−90．
竹本弘幸(1999)　北関東北西部地域における第四紀古環境変遷と火山活動．茨城大学大学院理工学研究科宇宙地球システム科学専攻博士学位論文，１−130．

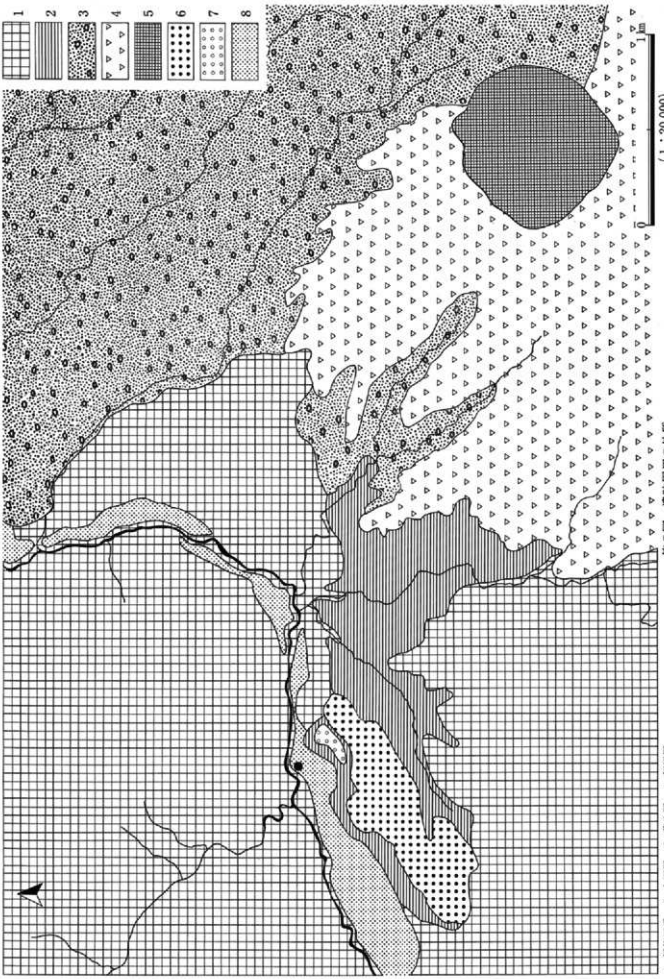
第１表　榛名火山周辺地域の中部更新統の層序対比

時代		地層名：岩野谷丘陵地域	地層名：榛名火山西麓地域	地層名：榛名火山北麓地域	地層名：中之条盆地地域	主な鍵層
第四紀更新世	後期	上部更新統	上部更新統	上部更新統	上部更新統	立山-D軽石 成田原軽石 [illegible]
	中期				成田原 段丘堆積物	蓑原軽石・火山灰
					蓑原 段丘堆積物	
		野殿層上部層	分去層	東層	上部	NC$_3$ NC$_4$ [illegible]
		野殿層中部層	相原層		中之条湖成層	クレンザー（NC$_2$）
			荻生層	千沢層		
		野殿層下部層	大戸層	奥田層	平層	長野原軽石
		野殿層最下部層	押平層		尻高層	
					火之口層	
					大塚層	
					篭林層	NC$_1$
					名久田川層	
	前期			小野上層	小野上層	
鮮新世			長井層 （菅峰火山噴出物）			
中新世		秋間層 板鼻層	秋間層	谷後層	切ケ久保層 栃窪層	

矢口裕之・榛名団体研究グループ・高崎地学愛好会(1992)より



第6図　遺跡周辺の地形面区分



第7図　道路周辺の地質

1 新第三系　2 大戸層　3 長生層　4 相模層
5 古賀良山火山岩類　6 大戸段丘礫層　7 霞田段丘礫層　8 本宿段丘礫層

第3節　歴史

坂上地区を中心に記述するが、各時代の主要な遺跡については周辺地区をも含めて説明することとする。

旧石器時代　この地域では、未だ発見されていない。

縄文時代　この時代の遺跡は河川や河岸段丘を見下ろせる台地や高い丘陵の上に存在することが多い。須賀尾の矢久遺跡・宮ノ下遺跡、本宿の上宿遺跡・上ノ原遺跡・蜂谷戸遺跡、大戸の上大戸遺跡・堀之内遺跡・後所谷戸遺跡、大柏木の殿原遺跡・猿谷戸遺跡・下新井遺跡・下中遺跡、萩生の貫井遺跡・堀井戸遺跡・大石遺跡・大久保遺跡などで中期後半の加曽利E式や後期、晩期の土器片や石器が採集されており、温川が吾妻川と合流する周辺にも、ハート型土偶が有名な郷原遺跡で中期から後期、三島の唐堀遺跡で後期が発掘調査されている。

弥生時代　水田耕作のため河川沿いに遺跡があり、須賀尾の飯前場遺跡や本宿の蜂谷戸遺跡・下宿遺跡・上ノ原遺跡、大戸の堀之内遺跡、萩生の貫井遺跡・堀井戸遺跡などで土器片が散布している。本遺跡も1970（昭和45）年の工事の際に弥生時代中期の壺が出土したことから大戸の下田（霜田）遺跡として確認されており、今回の発掘調査でも土器が出土した。温川が吾妻川と合流する三島の対岸の郷原には、再葬墓で著名な岩櫃山鷹の巣岩陰遺跡が、岩下には前畑遺跡が存在する。

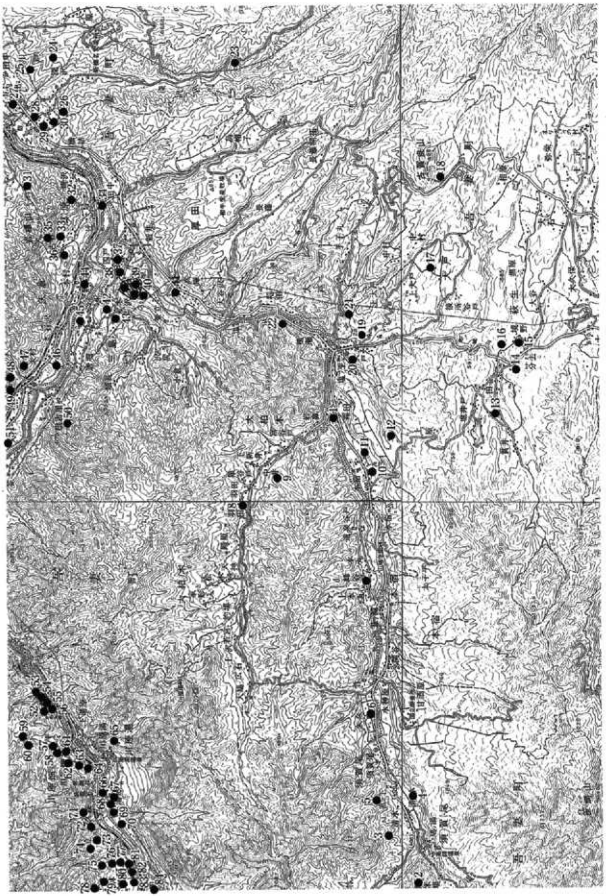
古墳時代　昭和13年に編纂された『上毛古墳綜覧』によれば、坂上地区には12基の古墳が存在するとされているが、現在までに発掘調査によって確認されたものはひとつも無い。（一覧表を第4章第2節に収録）それ以外には、本宿の宿遺跡・上宿遺跡・下宿遺跡、大戸の古賀良遺跡・大戸平遺跡、萩生の大沢遺跡などで須恵器や土師器の破片が採集されており、本遺跡から西に1.5km離れた宿遺跡の発掘調査で前期の竪穴住居1軒が検出されている。古墳では温川の下流域で生原古墳群や四戸古墳群が発掘調査されており、いずれも6世紀後半から7世紀前半にかけての時期とされている。

奈良・平安時代　10世紀ごろに編集された『和名類聚抄（わみょうるいじゅうしょう）』によれば、古代律令制での吾妻（阿加豆末：あがつま）郡は、大田郷（於保太：おおた、吾妻町太田地区から吾妻川上流の三島までの右岸一帯）、伊参郷（伊佐萬：いさま、中之条町から原町にかけての吾妻川左岸一帯）、長田郷（奈加太：ながた、中之条町北東部から高山村にかけての名久田川流域）の三つの郷に区分され、その郡衙（役所）は原町の大宮厳鼓神社周辺と考えられているが、近年の発掘調査からは疑問視されてきている。本遺跡では浅間Bテフラの下から水田が検出されているが、吾妻町西部から長野原町にかけての西吾妻地区の北傾では、この浅間Bテフラの堆積すら見つかっていない。逆に浅間軽石テフラがあちらこちらで確認されつつある。

鎌倉・室町時代（中世）　古くから湯治場として著名な草津温泉への通り道として利用されており、1509（永正6）年の連歌師の柴屋軒宋長（さいおくけんそうちょう）の旅の紀行文『東路の津登（あづまじのつと）』に浦野氏支配下の大戸を訪れた記載がある。また、中世山城として須賀尾の鷹繋（たかつなぎ：別称「須賀尾」）城・丸山城、大戸の大戸城、大柏木の羽田城、萩生の萩生城などが築かれていた。

江戸時代（近世）　五街道のひとつである中山道から分岐した脇街道の信州街道が萩生から大戸を通り、本宿から須賀尾、さらに万騎峠を越えて狩宿へと抜けている。須賀尾で「くさつ（草津）道」が分岐し須賀尾峠を越えて長野原に至る。途中の交通の要所である大戸には関所が置かれ、通行人の管理を行っていた。

明治・大正・昭和（近・現代）　明治22年に大柏木・大戸・須賀尾・萩生・本宿の5ケ村が合併し坂上村となる。その後、1955（昭和30）年に岩島村・太田村・原町と合併し吾妻町となる。圃場整備の記録では、1929～1937年の本宿耕地整理『38町1反2畝4歩』が実施されている。



第8図　周辺の遺跡分布（国土地理院：5万分の1「中之条」・「榛名山」・「高津」・「軽井沢」を編集、6.25万分の1に縮小）

第２表　周辺遺跡一覧

番号	時代 遺跡名	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	備　考
1	横田	○	○	○	○	○	本書
2	廣繁城					○	
3	丸山城					○	
4	駒繁尾古城					○	
5	宮ノ下	○		○			
6	矢丸	○					
7	柳谷口	○					
8	猿谷戸		○				
9	下中	○					
10	宿			○			
11	下宿			○			
12	猿岩戸	○					
13	上ノ瀬	○					
14	満行城古墳			○			
15	猪狩古墳			○			
16	長谷城					○	
17	後所谷戸	○					
18	古賀良			○			
19	上大戸	○					
20	大戸平城					○	
21	手子丸城					○	
22	仙人窟陣城					○	
23	山の神陣城					○	
24	水上	○		○			
25	城崎城					○	
26	渡沢	○		○			
27	内出城					○	
28	川戸古墳群			○			
29	上ノ宮			○			
30	玉谷	○	○				
31	岩櫃城					○	
32	横尾城					○	
33	勝龍院					○	
34	横尾	○			○		
35	鷹の巣洞窟	○					
36	古谷		○				
37	四戸古墳群			○			
38	峰			○			
39	生原古墳群			○			
40	生原			○			
41	平			○			
42	万木沢			○			

番号	時代 遺跡名	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	備　考
43	上反	○					
44	岩鳥４号墳			○			
45	唐堀	○					
46	熊畑		○	○	○		
47	岩下城					○	
48	机古墳			○			
49	北城	○					
50	横古館					○	
51	弁天淵	○					
52	二柱平岩陰						
53	石畑Ⅱ岩陰						
54	石畑Ⅰ岩陰	○					
55	石畑	○					
56	二柱平	○			○		
57	三平Ⅰ	○			○		
58	三平Ⅱ	○			○		
59	温井Ⅱ	○					
60	温井Ⅰ	○			○		
61	上ノ平Ⅱ						
62	上ノ平Ⅰ				○		
63	西宮岩陰						
64	西宮	○					
65	金花山砦					○	
66	石川原	○					
67	川原畑中原Ⅱ				○		
68	川原畑中原Ⅰ	○			○		
69	北入	○					
70	川原畑藤垂沢	○			○		
71	久森沢Ⅰ岩陰						
72	久森沢Ⅱ岩陰						
73	立馬Ⅱ	○	○		○		
74	立馬Ⅰ	○	○		○	○	
75	花畑	○			○		
76	東原Ⅰ	○			○		
77	東原Ⅱ	○					
78	上原Ⅲ				○		
79	上原Ⅱ						
80	上原Ⅳ	○					
81	中原Ⅱ				○		
82	東原Ⅲ				○		
83	中原Ⅰ	○			○		
84	下田	○					

参考文献

（概説書・図録類）
尾崎喜左雄監修　1987　『日本歴史地名大系10　群馬県の地名』　平凡社
日本地名大辞典編纂委員会編　1988　『日本地名大辞典』10　群馬県　角川書店
中之条町歴史民俗資料館　2003　『常設展示解説図録』
吾妻町教育委員会　2004　『「祖霊の山岩櫃」－鷹の巣遺跡と弥生の高制－展示図録』
諸田康弘　1998　『吾妻郡』［群馬県内の横穴式石室Ⅰ（西毛編）］　群馬県古墳時代研究会資料集第３集　群馬県古墳時代研究会
（県町村史誌）
群馬県　1938　『上毛古墳総覧』　群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第５号
太田村誌編纂委員会編　1965　『あがつま　太田村誌』
原町誌編纂委員会編　1970　『原町町誌』
坂上村誌編纂委員会編　1971　『あがつま　坂上村誌』
岩島村誌編集委員会編　1971　『岩島村誌』
中之条町誌編纂委員会編　1976　『中之条町誌』第１巻
長野原町誌編纂委員会編　1976　『長野原町誌』上
群馬県史編さん委員会編　1990　『群馬県史』　通史編　1
群馬県史編さん委員会編　1981　『群馬県史』　資料編　3
（発掘調査報告書）
吾妻町教育委員会　1995　上領頭遺跡
吾妻町教育委員会　1996　宿遺跡
吾妻町教育委員会　1996　善導寺前遺跡
吾妻町教育委員会　1998　前畑遺跡
吾妻町教育委員会　1998　生原遺跡
吾妻町教育委員会　2003　町内遺跡１　小泉宮戸遺跡
吾妻町教育委員会　2003　測詰前遺跡１
吾妻町教育委員会　2004　町内遺跡Ⅱ　小泉天神遺跡
群馬県教育委員会編　1988　群馬県の中世城館跡
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002　長野原一本松遺跡
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002　八ッ場ダム発掘調査集成
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003　久々戸遺跡・中畑Ⅱ遺跡・下原遺跡・横畑中村遺跡
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　2004　久々戸遺跡・中畑Ⅱ遺跡（２）・西ノ上遺跡・上郡八遺跡
長野原町教育委員会　2004　林宮原Ⅱ遺跡

第4節　基本土層

本遺跡の立地する温川右岸の河岸段丘は、段丘礫層を基盤とし、その上位に砂礫層や浅間山を給源とする数多くの火山噴出物（その詳細については第5章第1節を参照）を含む土層が堆積している。現在はやや東に緩やかに傾斜しているものの、見た目はほぼ平坦な地形である。ここでは基本的な模式地層を記載することとする。

1層　暗褐色土　表土であり、現代の水田耕作土である。おそらくは昭和前半の圃場整備による客土であり、底部は鉄分付着による床土が形成されている。

2層　暗灰褐色土　近代の圃場整備前の水田耕作土であり、やはり底部に床土が形成されている。

3層　軽石混じり黒褐色土　水田耕作による土壌と、底部の床土が確認できる。下位に1128（大治3）年に浅間山から噴出した浅間粕川テフラ（As−Kk）が部分的に層状で検出される。この火山灰は色調が青灰色で、分布範囲が浅間山からやや北東軸である。堆積時期は中世から古代末にかけての土層である。

4層　浅間Bテフラ（As−B）　浅間山から噴出した大粒の軽石を主体とし、底面に火山灰が存在する。年代は1108（天仁元）年である。この軽石層に覆われた面が、平安時代末期の生活面である。

5層　黒色粘質土　やや粘性である。

6層　暗褐色土

7層　黒褐色土　粘性があり、古墳時代の竪穴住居の検出面である。下半部からは古式土師が出土している。

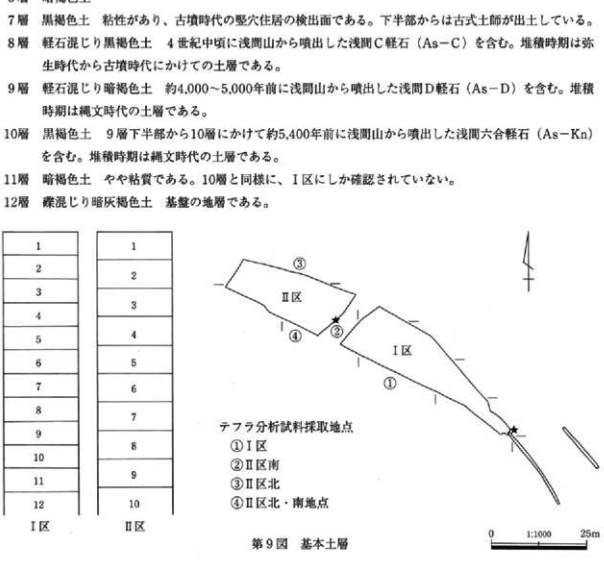
8層　軽石混じり黒褐色土　4世紀中頃に浅間山から噴出した浅間C軽石（As−C）を含む。堆積時期は弥生時代から古墳時代にかけての土層である。

9層　軽石混じり暗褐色土　約4,000～5,000年前に浅間山から噴出した浅間D軽石（As−D）を含む。堆積時期は縄文時代の土層である。

10層　黒褐色土　9層下半部から10層にかけて約5,400年前に浅間山から噴出した浅間六合軽石（As−Kn）を含む。堆積時期は縄文時代の土層である。

11層　暗褐色土　やや粘質である。10層と同様に、Ⅰ区にしか確認されていない。

12層　礫混じり暗灰褐色土　基盤の地層である。



第9図　基本土層

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

本遺跡の発掘調査の対象地全域は河岸段丘上である。ここには下位に礫層が、上位には関東ローム層堆積以後の土壌が堆積しており、その中には年代の鍵層となる火山灰層も堆積している。そのおかげでその下面が遺構確認面、たいていの場合はそのまま文化面として捉えることが可能である。

今回の発掘調査による調査面は２面（一部では３面）である。確認できた遺構は弥生時代、古墳時代、平安時代及び中・近世に属するものである。居住機能としての竪穴住居跡、水田や溝などの農業生産跡が含まれている。遺物は縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代及び中・近世のものである。調査面積は単面で1,300㎡であり、複数の文化面に対応して数値が増すこととなる。

本章では時期の古い順にそれぞれ遺構の種類別に項目を設定し、個々の遺構について説明を加えた。そのため、遺構に付けられた番号順になっていない場合もある。

次に、各時代毎の遺構・遺物にその特徴をみていくこととする。

まず、縄文時代では遺構そのものは確認されなかったが、遺物としては早期の楕円の押型文、前期前半の黒浜式、中期の加曽利Ｅ式などの土器や、打製石鏃、打製石斧などの石器が出土している。

弥生時代では、遺構としては１号集石があり、一緒に出土した壺から前期末から中期前半にかけてと考えられる。本遺跡の発見の経緯が、前期から中期前半にかけてとほぼ同じ時期の壺の出土であることから、遺跡の範囲は大きく広がっていると考えられる。それ以外に後期の樽式土器が少量出土しているが、遺構は確認されなかった。

古墳時代では、前期の４世紀初頭の古式土師と呼ばれる土器の破片が多数、１号焼土部分の一ヶ所に集中して出土しており、その集中の様子からあるいは住居が存在した可能性がある。

中期の５世紀後半から７世紀にかけての竪穴住居が６軒検出されているが、そのうちの１軒だけが７世紀である。他の５軒は５世紀後半から６世紀前半に限られており、そのことから比較的短期に営まれ、廃絶された居住区域であることが分かる。そのうちの２軒が調査範囲外に延びているために、完全に掘り上げた住居は４軒だけであるが、５軒について住居の壁に煮炊き用のカマドを設けており、その位置も北側の壁が２軒、東側の壁が３軒である。遺物は土師器や須恵器、それに鉄器や石製模造品などが出土している。また、そのうちの３軒は多数の炭化材が検出された焼失住居であり、建築部材である炭化材の分布から家屋の構造の復元が可能である。さらに、集落としては微高地部分の中央に分布していて、温川の縁辺部にあたる北側には住居は１軒も作られていない。

平安時代では、残りが悪いものの、浅間Ｂテフラと呼ばれる天仁元（1108）年の軽石や火山灰の下から埋もれた水田が検出されている。吾妻地域では初めてのこの時代の水田遺構の検出であり、一区画毎の規模は前橋や高崎などの平野部に比べて小型であり、それは傾斜のある狭い地形に規制されたものと考えられる。

また、同一の面で石が入れられた穴と石の列などが検出されている。さらに、浅間一軽石と呼ばれる大治３（1128）年に降り積もった火山灰の下にも水田が存在した可能性がある。

中世以降から近世にかけては、前記した軽石を掘り込んだ溝が10条検出され、堆積した土層の観察から周囲に水田が継続して作られたことが分かる。また、土地の区画と考えられる区割り畦も検出されている。さらに、土坑１基を検出した。出土遺物は擂鉢や碗などの陶磁器の破片が僅かであるが出土しており、18世紀以降のものが大半である。

第２節　縄文時代の遺構と遺物

（１）遺構

残念ながら遺構は確認されなかった。

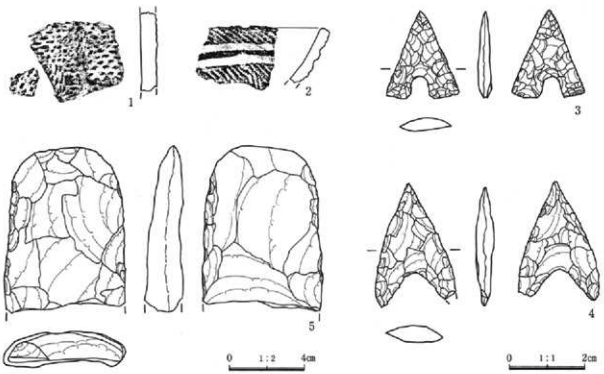
（２）遺構外出土の遺物（第10図、ＰＬ.14、観察表46頁）

遺構確認段階でのグリッド区画による一括取り上げ遺物や、縄文時代以後の遺構に混じり込んだ状態での出土遺物は、総数で土器の破片12点、石器４点と僅かである。そのうち掲載する必要があると判断した遺物は土器の破片２点、石器３点のみである。ここでは掲載した遺物について観察内容を記述すると共に、他の遺物についても概要を述べることとする。

土器は楕円押型文の破片が２点出土している。施文の楕円の形状からほぼ同一個体と考えられるが、残念ながら接合はしなかった。この他に、前期前半の関山式や中期後半の加曾利Ｅ式の土器の破片が数点出土しているが、いずれも細かな破片のために資料としては不十分なため実測はしなかった。

石器は大部分が剥片であり、そのうちで図化したのは打製石鏃２点、打製石斧１点である。打製石鏃は１点が石材はチャートで抉りが深い凹基のいわゆる「鉞形鏃」であり、縄文時代早期に属すると考えられる。もう１点は石材が黒色安山岩で、凹基である。打製石斧は刃部側が欠損したために頭部側だけの残存であるが、本来の形状は撥形と考えられる。石材は粗粒輝石安山岩である。

この他に、実測はしなかったが写真による記録資料として、古墳時代中期の４号竪穴住居から、表面が白濁していることから被熱により水和層が失われたと考えられる黒曜石の剥片が１点出土している。おそらくは、焼失住居の埋没土内に混じり込んで低い温度での被熱を受けたと考えられる。



第10図　縄文時代遺物

第３節　弥生時代の遺構と遺物

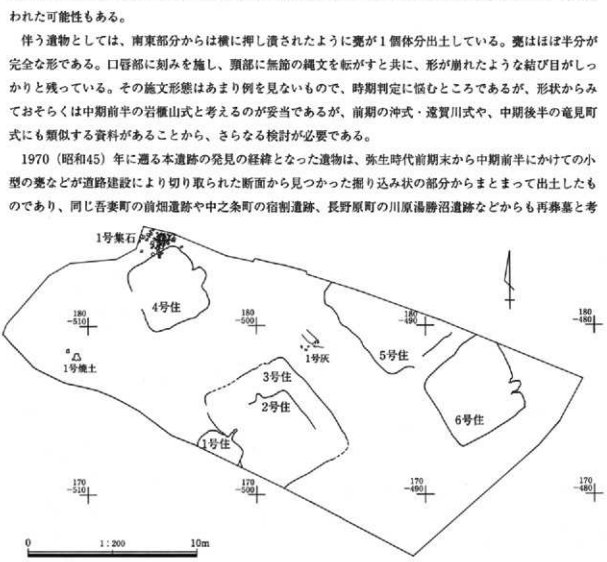
（１）遺構（第11図）

遺構は集石遺構が１ヶ所検出されており、出土した遺物から弥生時代と考え１号集石と呼称した。この他に、焼土と灰の分布がそれぞれ検出され、各々１号と呼称したが、確認されたのが基本土層の７層下部であることからおそらくは弥生時代から古墳時代初頭と考えられる。

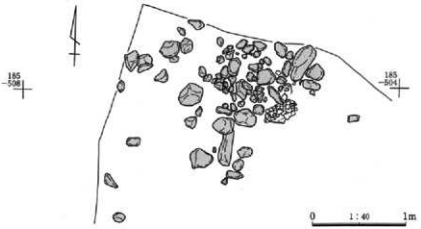
１号集石（第12・13図、ＰＬ.２－８・９、観察表46頁）　長径約1.8m、短径約1.8mのほぼ正方形の範囲で、長さ10cmから40cm以下までの大小様々な大きさの80余個の石が集まった形で検出された。この石の出土状態については、人為的に集めたとしか考えられないものの、それにしては石の大きさや上面を揃えたような感じがあまりせず、掘り込みの痕跡も無いことから、敷石的な遺構とも考えられない。ただ、何となく四角に揃えている様にも感じられる。また、個々の石についても、それぞれが熱を受けたり、叩いたりした痕跡も認められないことから、単なる石の廃棄の場とも考えられず、そうしたことをかみ合わせてみて遺構としての性格は不明である。また、４号竪穴住居の北壁際に位置することから、南東に散在する石の一部が失われた可能性もある。

伴う遺物としては、南東部分からは横に押し潰されたように甕が１個体分出土している。甕はほぼ半分が完全な形である。口唇部に刻みを施し、頸部に無節の縄文を転がすと共に、形が崩れたような結び目がしっかりと残っている。その施文形態はあまり例を見ないもので、時期判定に悩むところであるが、形状からみておそらくは中期前半の岩櫃山式と考えるのが妥当であるが、前期の沖式・遠賀川式や、中期後半の竜見町式にも類似する資料があることから、さらなる検討が必要である。

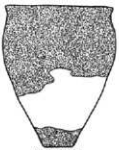
1970（昭和45）年に遡る本遺跡の発見の経緯となった遺物は、弥生時代前期末から中期前半にかけての小型の甕などが道路建設により切り取られた断面から見つかった掘り込み状の部分からまとまって出土したものであり、同じ吾妻町の前畑遺跡や中之条町の宿割遺跡、長野原町の川原湯勝沼遺跡などからも再葬墓と考



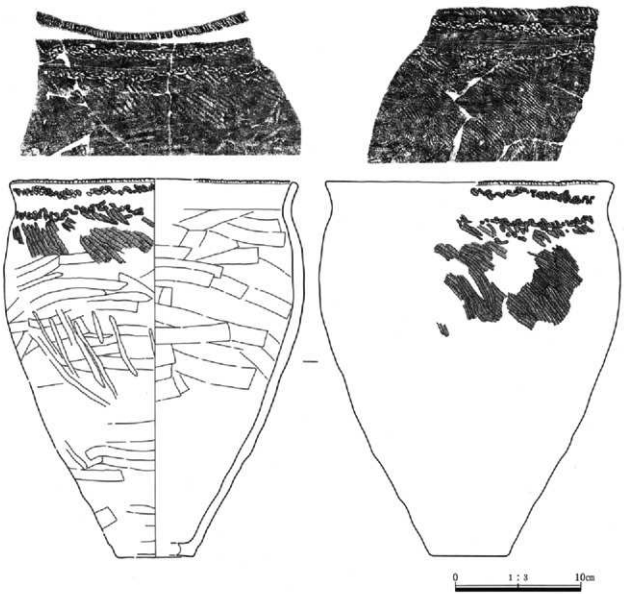
第11図　弥生時代・古墳時代遺構分布



第12図　1号集石遺構



煤付着範囲



第13図　1号集石遺物

えられる土坑が検出されており、それらに類似すると考えられる。さらに、北に位置する吾妻川に面した地域に聳える岩櫃山の南斜面の岩場に所在する岩櫃山鷹の巣岩除遺跡や、さらに北側の上沢渡川流域に位置する中之条町の有笠山１号・２号洞窟遺跡との関連も考えられる。

だが、今回検出された本遺跡の事例には明確な掘り込みも無く、甕が横倒しの状態であったことから再葬墓とは考えにくい。復元した土器についても、外面には火を受けたことにより赤化した部分と、黒く薄い煤が上半部に付着した状態で、内面は熱による剥がれのような痕跡が下半部を中心に点在している。

集石の様子も敷石のように見えにくいことから住居とも考えづらく、前述したように遺構の性格は不明であり、今後の課題でもある。

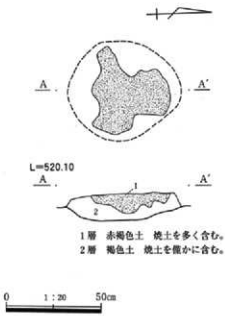
１号焼土（第14図、ＰＬ.２－10～12）　その規模は長径約50㎝、短径約40㎝の楕円形である。深さの浅い擂鉢状の掘り込みである。焼土は薄いうえに広がりも小さいことから、竪穴住居などに伴う炉とするには規模が小さすぎるようであるが、後世の攪拌により上部が失われたとするならば、あるいは可能性があるかも知れない。

発掘調査中に周囲から弥生土器や古式土師の破片が出土しており、前述したように確認面の土層が基本土層の７層下面であることからも、弥生時代～古墳時代初頭の時期の遺構と考えられる。

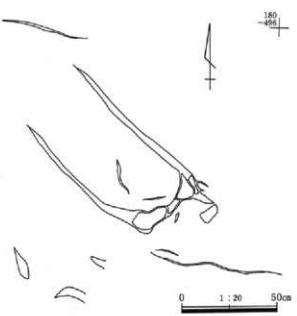
第５章第２節のプラント・オパール分析、および第５章第３節の炭化種実の分析結果からイネの存在が指摘されていることから、この時期には既に稲作がこの地域で行われていたことが判明した。

１号灰（第15図、ＰＬ.２－13）　その規模は長径1.5m、短径１mである。灰の厚さは薄く、それぞれが細長い蜘蛛の巣状の横広がりに灰が検出された。

遺物はまったく検出されなかった。そのため時期は明確ではないが、前述したように確認面が基本土層の７層下面であることから、弥生時代～古墳時代にかけてと考えられる。



第14図　１号焼土遺構



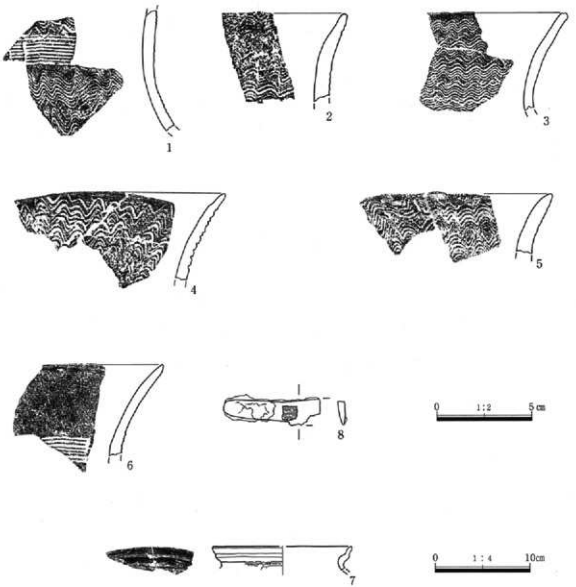
第15図　１号灰分布

（２）遺構外出土の遺物（第16図、ＰＬ.14、観察表46頁）

中期後半の竜見町式から後期の樽式土器の破片が39点出土しており、そのうちの６点を図化した。大部分が口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部には７～９条の櫛描波状文が施され、頸部に横位の簾状文が施文されている。出土位置は大部分が１～３号竪穴住居の埋没土であることから、そこから西側の調査区域外にまで及ぶものと考えられる。遺構は確認されなかったが、おそらくは西側に遺物の中心があったと考えられ、住居などが存在した可能性もある。

さらに、弥生時代から古墳時代に移行する時期の古式土師の破片が187点出土しているが、大部分が薄く細かな破片であり、そのうち実測が可能な大きな破片は１点だけであり、台付甕の一部である有段口縁（いわゆる「Ｓ字状」口縁）の部分や薄い駒部、それに台の部分の破片が１点だけ出土している。

鉄製品の破片が１点出土しており、断面や平面の形状などからおそらくは、３号竪穴住居から出土した資料と同様の刀子の一部分と考えられる。時期は同様に古墳時代と想定される。

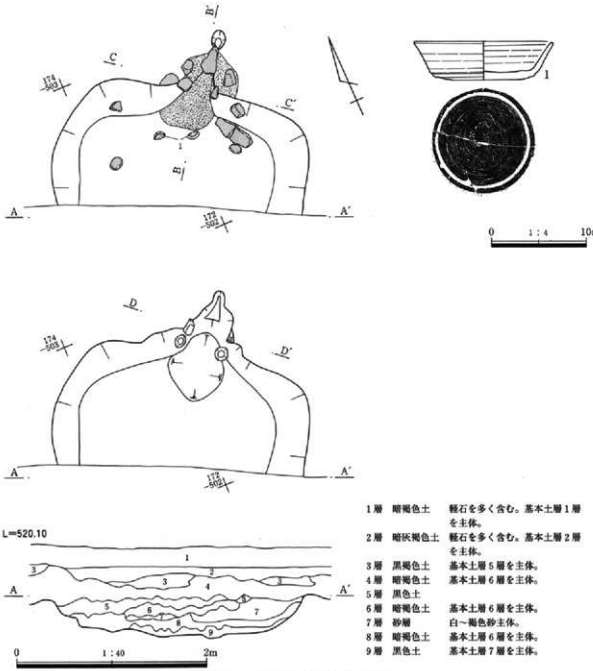


第16図　弥生時代・古墳時代遺物

第４節　古墳時代の遺構と遺物

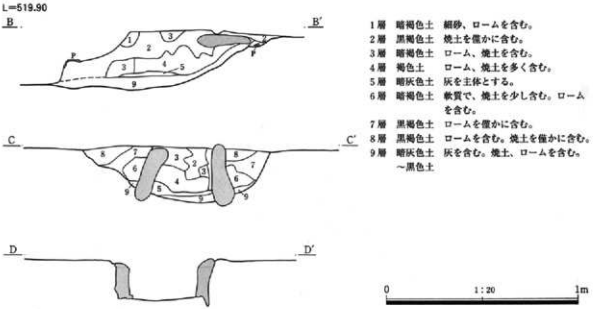
（１）遺構（第11図）

古墳時代の竪穴住居は、Ⅱ区の台地の中央を中心に６軒を調査した。全体的には集中した分布状況である。住居はいずれもカマドを付設するものと考えられるが、調査区域外に延びる５号竪穴住居以外の５軒では、北壁に付設された２号・３号、東壁に付設された１号・４号・６号の各竪穴住居に区分けできる。炭化材が出土した竪穴住居は、３号・４号・５号・６号の各竪穴住居である。出土する遺物は大部分が土師器であり、須恵器は僅かな点数しかない。



1層	暗褐色土	軽石を多く含む。基本土層１層を主体。
2層	暗灰褐色土	軽石を多く含む。基本土層２層を主体。
3層	黒褐色土	基本土層５層を主体。
4層	暗褐色土	基本土層６層を主体。
5層	黒色土	
6層	暗褐色土	基本土層６層を主体。
7層	砂層	白～褐色砂主体。
8層	暗褐色土	基本土層６層を主体。
9層	黒色土	基本土層７層を主体。

第17図　１号竪穴住居遺構①・遺物



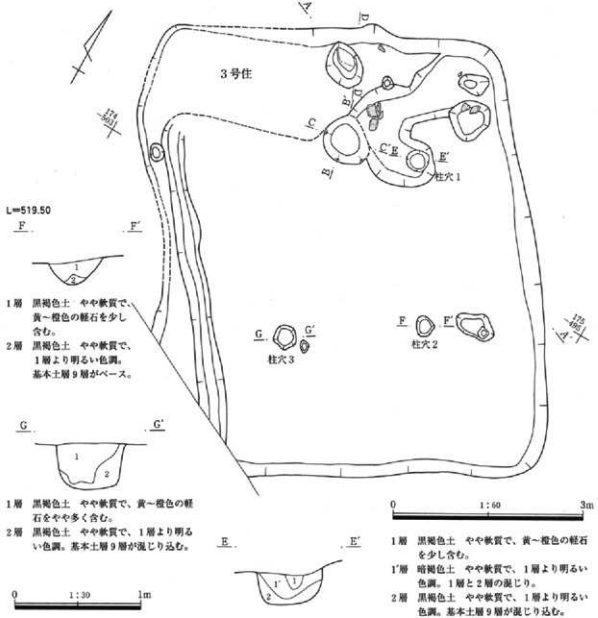
第18図　１号竪穴住居遺構②

１号竪穴住居（第17・18図、ＰＬ.３・４－15～23、遺物観察表46頁）　170～174－500～504グリッドにまたがり、Ⅱ区の南側に位置する。東壁にカマドを付設する住居で、住居のほぼ西側半分が調査範囲外に延びている。壁面の残存は良好で、緩やかに立ち上がる。周溝と柱穴は確認出来なかった。重複関係では、２号竪穴住居、３号竪穴住居と重複し、本竪穴住居が最も新しい。形状は、ほぼ西側半分が調査範囲外に延びているために不明だが、おそらくは正方形に近い四角形と考えられるが、北壁がやや斜辺となる。規模は、東西方向がやや北側寄りで2.71m、南北方向が1.35m以上である。壁面は南東隅で37cm、他も42cm程度と深い。床面には、硬化面がほとんど認められなかった。埋没土は、上層に黒褐色土を主体とした暗褐色土、中層に暗褐色土、下層に暗茶褐色土が堆積していた。掘り方は、床面下５cm以下の深さで、貼り床は認められなかった。埋没土は、基本土層６層を中心に混入物をほとんど含んでいなかった。面積は3.34㎡以上である。方位は、Ｎ－40°－Ｅである。カマドは、東壁面の中央からやや南側寄りに構築されている。燃焼部は住居内の床面上に造られ、最奥の立ち上がりが一部壁面を掘り込んで造られている。燃焼部の奥行は45cm、幅60cmである。煙道部は、かなり削平されていたが、住居外に延びている。燃焼部は深さ３～５cmの浅い掘り方の上に構築されている。袖材は軽石混じりの暗茶褐色土からなっており、掘り方で袖石の痕跡も確認された。煙道部の両壁に石を立て補強しており、煙出し部分の天井に扁平な石を架けている。焼土の堆積は少量であった。なお、カマドの右手前にある石は鳥居状の天井石の可能性がある。遺物は、カマド周辺と各壁際から検出された。(1)は、床面から５cm離れての出土である。なお、遺物の出土量は僅かで、土器の破片の合計は僅かに10片、その内訳は須恵器杯の破片１片・土師器杯の破片１片・土師器甕の破片８片である。時期は、須恵器の高台付杯(1)から７世紀末から８世紀初頭の住居と推定したい。(この時期を「飛鳥時代」とも呼称する。)

２号竪穴住居（第19～21図、ＰＬ.４・５－24～29、遺物観察表46頁）　172～177－496～501グリッドにまたがり、Ⅱ区の南側に位置する。北壁にカマドを付設する住居であるが、遺構確認時のミスにより、３号竪穴住居と一緒に掘削してしまい、途中で存在に気づいたものの、壁や床面はほとんど確認出来なかった。重複関係では、１号竪穴住居、３号竪穴住居と重複し、３号竪穴住居が最も古く、１号竪穴住居が最も新し

第19図　２・３号竪穴住居遺構①

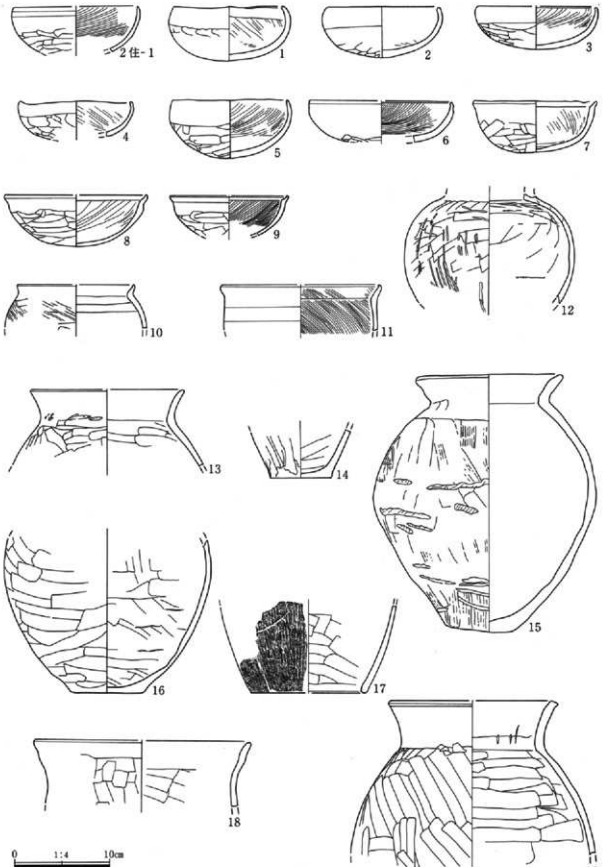
い。本竪穴住居はその中間にあたる。形状は、南北方向が若干長い長方形と考えられるが、西壁と南壁が明確でないことから、形状や規模は不明である。残りの規模は、南北方向が3.2m以上、東西方向が4.5mで、壁の高さはほとんど分からない。そのため、面積も不明だが、カマドの掘り方が僅かながら確認出来たために、方位はN－71°－Wである。カマドは北壁に構築されていたが、詳細はほとんど不明である。掘り方の調査を通じても、柱穴は１本も検出されなかった。本竪穴住居はほぼ３号竪穴住居内に含まれているために、重複すると思われる部分からの遺物は２号竪穴住居・３号竪穴住居と併記して取り上げており、本竪穴住居単独出土の遺物はほとんど記録されていない。そのことは、２号竪穴住居と３号竪穴住居との遺物が混じり合っ



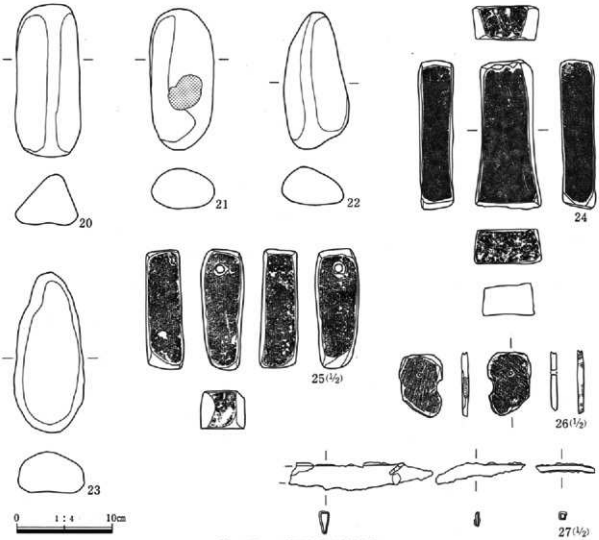
第20図　２・３号竪穴住居遺構②

ている可能性が高い。そのため、２号竪穴住居の遺物として掲載した(１)の杯についても、あるいは３号竪穴住居のものがあるかも知れない。遺物の出土量は、土器の破片の合計は162片、その内訳は土師器杯の破片91片・土師器甕の破片71片である。時期については、３号竪穴住居との前後関係から５世紀後半から６世紀前半にかけての住居と考えられる。

３号竪穴住居（第19～22図、ＰＬ.５・６－30～40、遺物観察表46・47頁）　位置は、170～179－494～504グリッドにまたがる。Ⅱ区の南側に位置する。南西隅を含む一部が調査範囲外に延びている。北壁にカマドを有し、今回調査した竪穴住居中最大の規模を有していた。重複関係では、１号竪穴住居、２号竪穴住居と重複し、本竪穴住居が最も古く、次に２号竪穴住居で、１号竪穴住居が最も新しい。形状は、南北に長い長方形である。規模は、南北方向の長さが7.06m、東西方向の長さが6.17mである。東壁と南壁はほぼ直線で

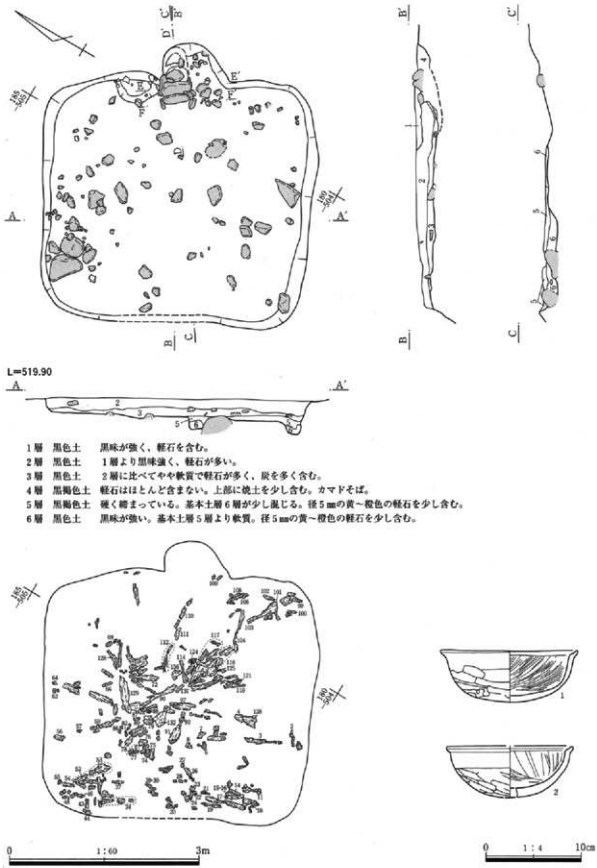


第21図　2号竪穴住居遺物、3号竪穴住居遺物①

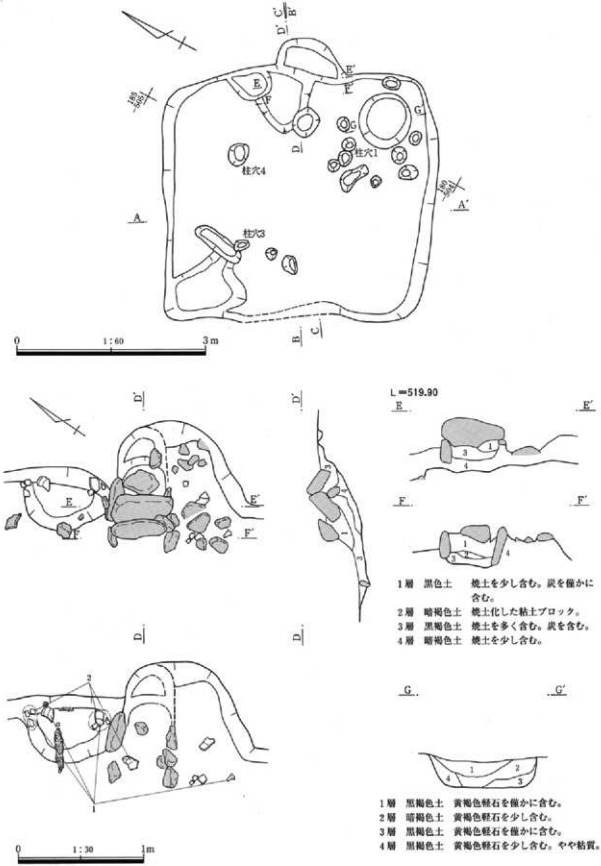


第22図　３号竪穴住居遺物②

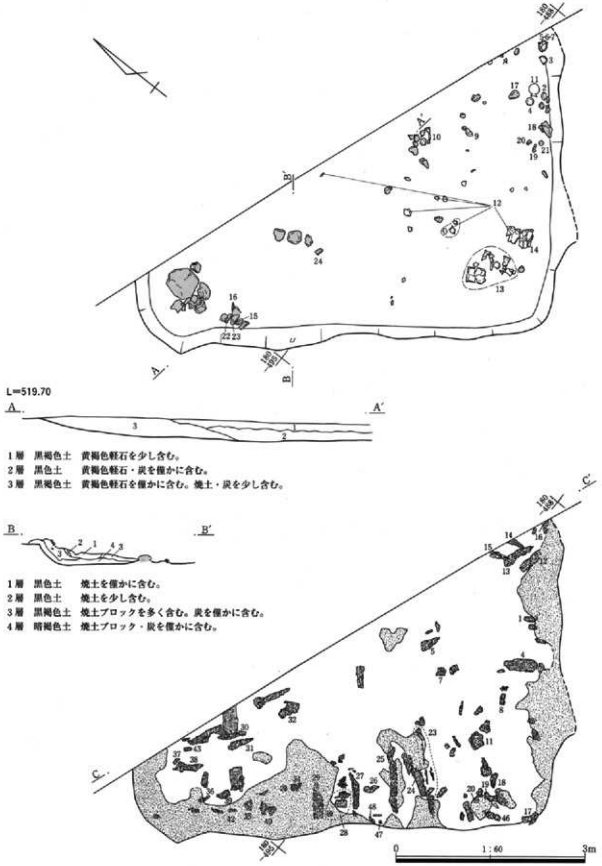
ある。壁面の立ち上がりは上方に向かって緩やかに外傾するものの残存状態は良好で、北東隅から東壁中央で深さ18～23cmである。埋没土は上半部に暗褐色土が、北壁面寄りの下半部に褐色土が堆積していた。南東隅付近に数本の炭化材を検出したが、他の焼失住居と比べると極端に少ない。床面はほぼ平坦な面である。面積は41㎡以上で、方位は、N－65°－Wである。カマドは調査の当初、位置の確認を間違えて実際のカマドよりやや東寄りに設定してしまい、調査の途中で気付いた時には、カマドの部分の調査が不十分となってしまった。焚口部から燃焼部、さらには煙道部も明確ではないが、煙出し口は住居外には延びない。柱穴は３本、床下土坑と考えられる掘り込みも１ケ所確認されたが、いずれも浅い。周溝は、西壁際部分のみ検出した。幅は26～42cm、深さは３～６cmである。掘り方は、10～15cmの厚さでみられ、基本土層６・７層を多く含む。柱穴はほぼ円形で、個々の規模は、柱穴１が直径36×35cm、深さ23cm。柱穴２が直径33×27cm、深さ15cm。柱穴３が直径38×35cm、深さ30cmである。遺物は、カマド周辺から北東隅にかけて多く検出されたが、床面直上からの出土は少量であった。本竪穴住居の西側半分はほぼ２号竪穴住居と重複するために、重複すると思われる部分からの遺物は僅かだが、２号竪穴住居・３号竪穴住居と併記して取り上げており、２号竪穴住居と本竪穴住居との遺物が交じり合っている可能性がある。そのため、本竪穴住居に伴う明確な遺物は東側部分からの出土に限られる。土器の破片の合計は238片で、その内訳は土師器杯の破片123片、土師器甕の破片115片である。時期は出土遺物から５世紀後半から６世紀初頭の住居と考えられる。



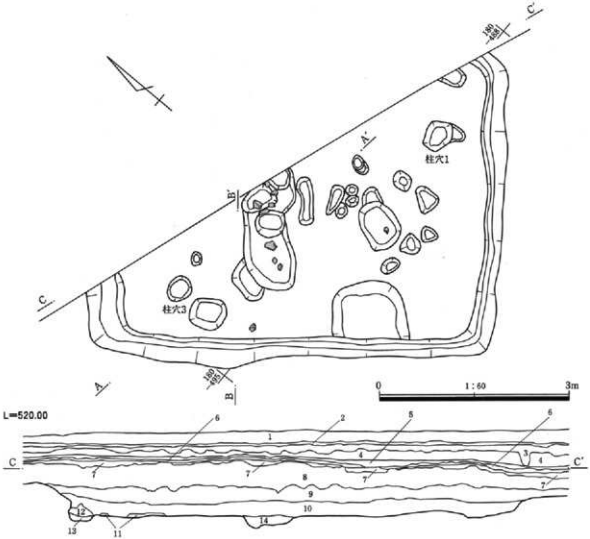
第23図　４号竪穴住居遺構①・遺物



第24図　4号竪穴住居遺構②



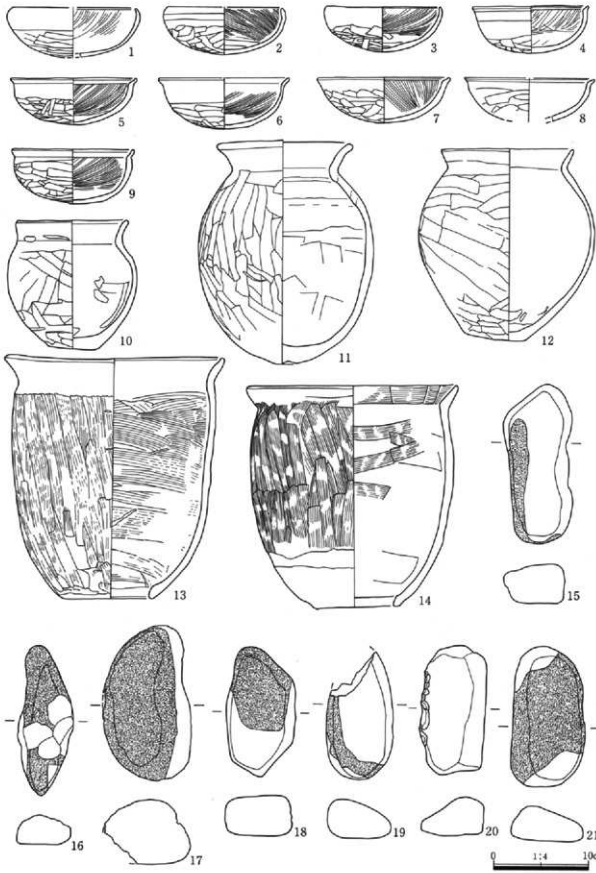
第25図　５号竪穴住居遺構①



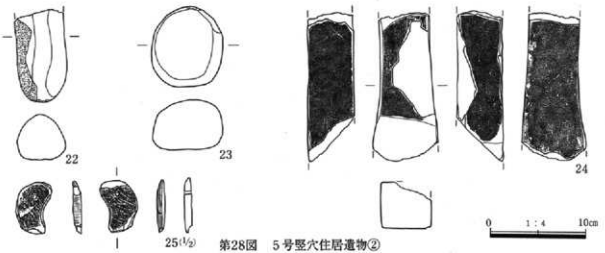
1層	暗褐色土	軽石を多く含む。基本土層１層を主体。	
2層	暗灰褐色土	軽石を多く含む。基本土層1層を主体。	
3層	黒褐色土	基本土層２層を主体。	
4層	暗褐色土	基本土層３層を主体。	
5層	黒色土		
6層	暗褐色土	基本土層３層を主体。	
7層	砂層	白～褐色砂主体	
8層	暗褐色土	基本土層４層を主体。	
9層	黒色土	基本土層５層を主体。	
10層	黒褐色土	黄褐色軽石を少し含む。	
11層	黒色土	黄褐色軽石・炭を僅かに含む。	
12層	黒褐色土	黄褐色軽石を僅かに含む。焼土・炭を少し含む。	
13層	黒褐色土	黄褐色軽石を含む。周溝埋没土。	
14層	黒褐色土	床下土坑埋没土。	

第26図　５号竪穴住居遺構②

４号竪穴住居（第23・24図、ＰＬ．６・７－41～51、遺物観察表48頁）　位置は、179～184－502～507グリッドにまたがる。Ⅱ区の北西寄りに位置する。東壁にカマドが付設され、その右側に貯蔵穴がある。柱穴は３本検出された。周溝は確認出来なかった。重複は無いが、弥生時代の１号集石の一部を壊している可能性がある。形状は、ほぼ正方形に近い四角形であり、四壁ともほぼ直線を成す。規模は、南北4.37m、東西3.92mである。壁面は、垂直に近い立ち上がりで、残存の良好な東南隅で深さ21cmである。他は20～26cmの残存である。床面は、多少の凸凹を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。堆積土は、上・中層に茶褐色土、下層に黒褐色土が堆積しており、直径３cm前後の礫石を多く含んでいた。多数の炭化材が床面直上に残存し、壁に沿った方向に残る資料と、竪穴住居の中心に向かうような方向の資料とに大きく分かれる。大部分は垂木と考えられる。掘り方は、南西隅付近で10～20cmの深さを有し、貼り床は確認出来なかった。



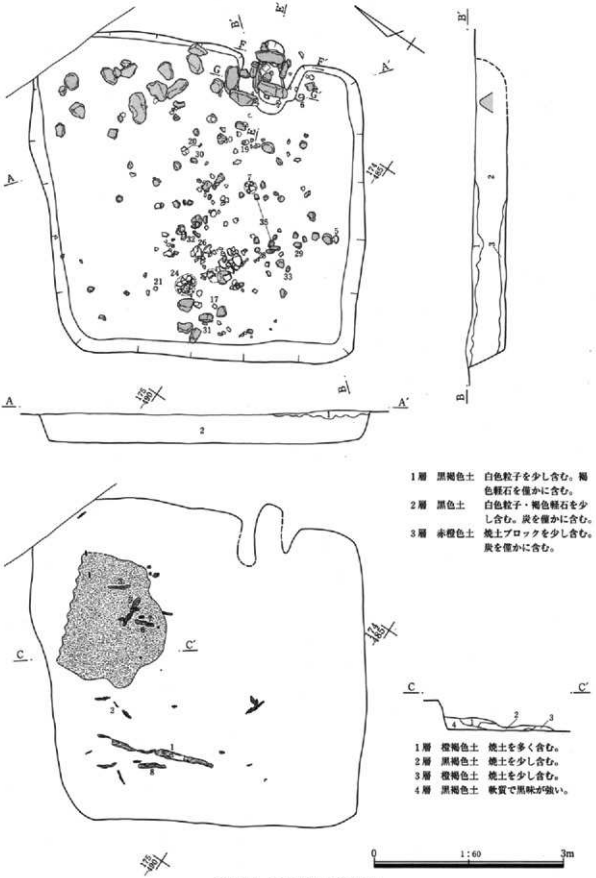
第27図　5号竪穴住居遺物①



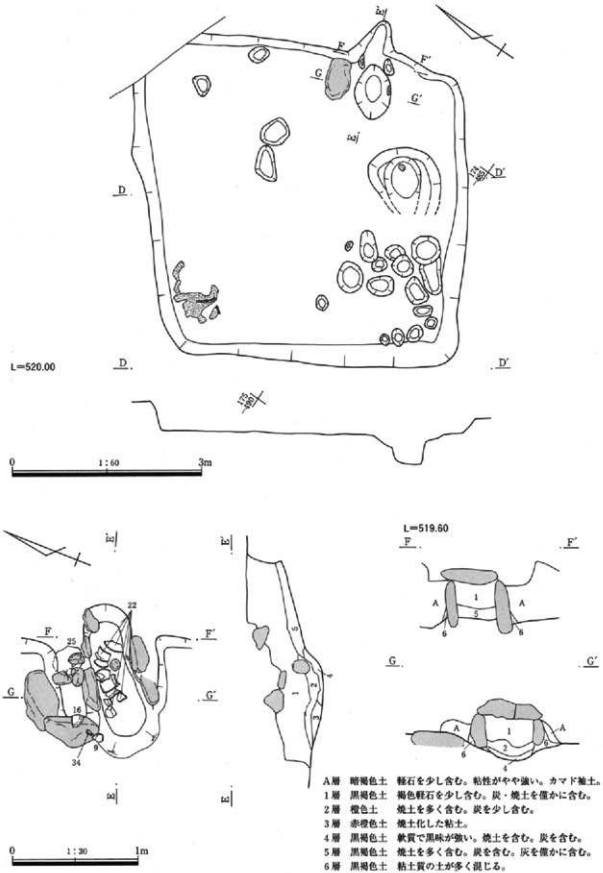
第28図　５号竪穴住居遺物②

面積は16.24㎡で、方位はＮ－50°－Ｅである。カマドは、東壁面のほぼ中央に構築されている。燃焼部は住居内の床面上に造られている。燃焼部の奥行は75㎝、幅110㎝である。煙道部は、緩やかな階段状で住居外に延びている。袖材は、基本土層６層混じりの暗茶褐色土からなっており、燃焼部と煙道部にかけての両壁に扁平な石を立て補強しており、煙道部の天井に扁平な石を３個架けて鳥居状にしている。焼土の堆積は少量であった。燃焼部は、僅かに掘り方を有している。掘り方調査で南東隅付近を中心に小ピット多数を検出し、その中から柱穴と考えられる３本を検出したが、南西部分では柱穴の存在を確認できなかった。個々の規模は、柱穴１が直径23㎝、深さ８㎝。柱穴３が直径27×15㎝、深さ11㎝。柱穴４が直径38×33㎝、深さ８㎝である。南東隅に位置する円形の床下土坑の規模は直径86㎝、深さ24㎝である。遺物はカマドの左側の浅い土坑から、(１)と(２)の杯が出土したが、遺物の大部分は細かな破片であり、土器の破片の合計は159片、その内訳は土師器杯の破片95片・土師器甕の破片64片である。他の竪穴住居と比較して遺物が極端に少ないことから、焼失する以前に持ち出された可能性が高い。時期は出土遺物から５世紀後半の住居と考えられる。

５号竪穴住居（第25～28図、ＰＬ.７・８－52～56、遺物観察表48・49頁）　位置は177～183－488～496グリッドにまたがる。東壁半分が調査外に延びるために、正確な住居形態、及び面積などの規模は不明だが、把握出来た形状や位置の関係から、３号竪穴住居とほぼ同等の規模と考えられ、南北に長い長方形で、おそらくは北壁にカマドが付設される住居と推定される。重複関係は、調査範囲内では無い。規模は、南北方向が6.58mであるが、東西方向は4.77m以上である。各壁とも下半部はほぼ垂直に立ち上がるが、上半部は外傾する。壁面の残存は、北壁が良好で北東あるいは北東隅で14㎝を測り、他においても10～34㎝を測った。多数の炭化材が床面よりやや上位に残存し、大部分が竪穴住居の中心に向かうような方向の板状の資料である。丸太状や角材がほとんど無く、大部分は垂木の可能性がある。４号竪穴住居と同様に、炭化材の上に焼土が存在することから土屋根と考えられる。床面はほぼ平坦面で、ほとんど掘り方は無い。埋没土は、暗褐色土で、混入物により細分が可能であった。面積は19.61㎡以上で、主軸方位はカマドが未検出のため不明である。周溝は全周し、規模は、幅24～63㎝、深さ２～６㎝であった。柱穴は、掘り方調査で南東隅と北西隅で２本検出出来た。個々の規模は、柱穴１が直径54×43㎝、深さ22㎝。柱穴３が直径43×37㎝、深さ７㎝。遺物は西隅から南東隅にかけての南壁寄りで多く出土した。こも編み石は北西隅付近（15・16・22・23）と南東隅付近（17～21）に集中している。砥石（24）は埋没土中からの出土である。遺物の出土量は、土器の破片の合計は469片で、その内訳は土師器杯の破片206片・土師器甕の破片263片である。時期は出土遺物から５世紀後半の住居と考えられる。

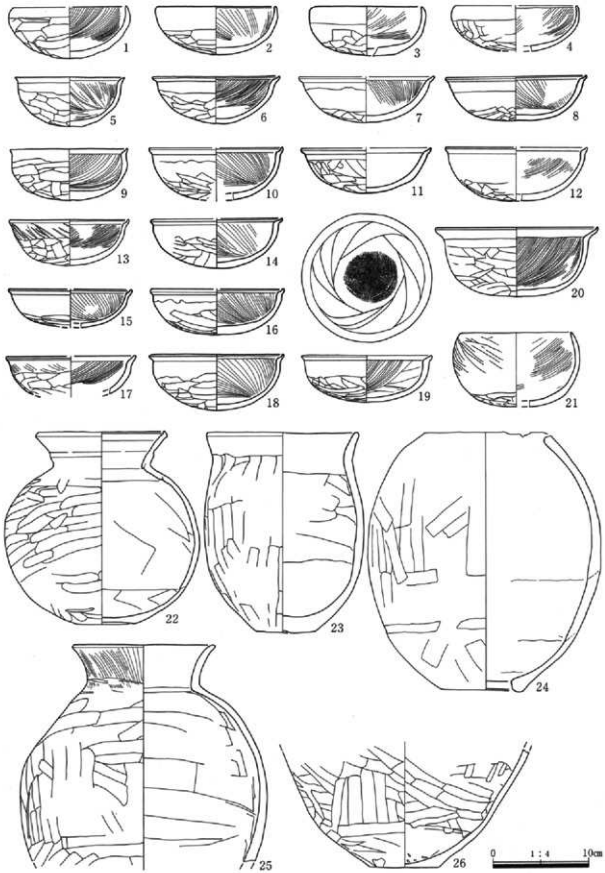


第29図　６号竪穴住居遺構①

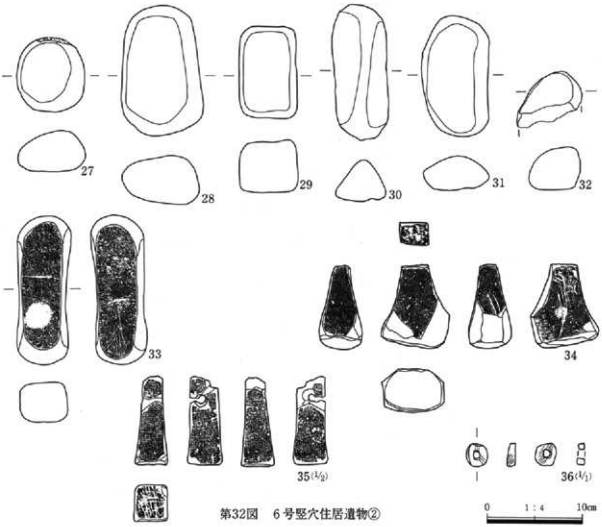


A層　暗褐色土　軽石を少し含む。粘性がやや強い。カマド袖土。
1層　黒褐色土　褐色軽石を少し含む。炭・焼土を僅かに含む。
2層　橙色土　焼土を多く含む。炭を少し含む。
3層　赤橙色土　焼土化した粘土。
4層　黒褐色土　軟質で黒味が強い。焼土を含む。炭を含む。
5層　黒褐色土　焼土を多く含む。炭を含む。灰を僅かに含む。
6層　黒褐色土　粘土質の土が多く混じる。

第30図　６号竪穴住居遺構②



第31図　6号竪穴住居遺物①



第32図　６号竪穴住居遺物②

６号竪穴住居（第29～32図、ＰＬ.８・９－57～64、遺物観察表49・50頁）　位置は172～180－484～490グリッドにまたがる。東壁にカマドを付設する。重複は無し。形状は西壁と南壁がほぼ直角な同規模の四角形であるが、北東隅部分が調査範囲外に延びており、北壁と東壁の角度は鋭角をなす。規模は南北方向が5.35m、東西方向が5.02mである。壁はやや外傾する立ち上がりで、深さは39～55cmである。炭化材と焼土が北側半分に少し分布する。床面は多少の凸凹はあるもののほぼ平坦であった。埋没土は上層から黒褐色土、暗褐色土、茶褐色土の順に堆積していた。また埋没土全体に礫が混ざり込んでおり、特に北東隅に大型の礫が多い。面積は24.52㎡で、方位はＮ－60°－Ｅである。カマドは、東壁の中央から南西隅寄りに位置する。規模は、燃焼部の奥行90cm、幅30cm、焚口部は幅55cmである。住居内に燃焼部を置く。燃焼部の最奥部は住居の壁面とほぼ同じラインで立ち上がり、煙道部はほとんど無く、煙出し口が緩やかに立ち上がり、僅かに住居外に延びる。左袖の外側と燃焼部の両側に石を並べ、焚口部から燃焼部の境、それに燃焼部と煙出し口の境に鳥居状に石を架けている。燃焼部のほぼ中央に石を立てて支脚としている。カマド埋没土内には焼土の堆積は少なく、焚口部に炭化物、薄い灰層が確認された。柱穴と推定される穴は２ヶ所ある。柱痕は確認できなかった。柱穴２は直径43×33cm、深さ４cm。柱穴４は直径33×27cm、深さ３cm。住居の南壁のほぼ中央に床下土坑があり、規模は約130×110cm、深さは最大60cmである。埋没土は基本土層６層混じりの暗褐色土で、締まりがなかった。遺物は、住居の中央部から西壁にかけて多数出土した。カマド燃焼部内からは22の甕が出土した。作りは精巧で、カマドにかけられた状態での検出と考えられる。遺物の出土量は土器の破片1705片で、その内訳は、土師器杯の破片936片・土師器甕の破片769片である。時期は出土遺物から５世紀後半の住居と考えられる。

(2) 遺構外の遺物　土師器杯の破片606片・土師器甕の破片710片が出土したが、実測可能な資料は無かった。

第５節　平安時代の遺構と遺物

（１）遺構

平安時代の遺構としては、基本土層の４層の浅間Ｂテフラ(As－Ｂ,1108年)と呼ばれる天仁元(1108)年の軽石や火山灰を除去し、精査作業によって確認された水田の跡が中心であり、基本土層の５層上位部分の約５cm程度が耕作土と考えられる。さらに、基本土層の３層下位に、浅間－粕川軽石と呼ばれる大治３(1128)年に降り積もった火山灰が部分的に堆積しており、その下にも水田が存在した可能性があるが､畦などの明確な遺構は確認出来なかった。

水田（第33図、ＰＬ.９・10－66～72）　平安時代は残りが悪いものの、浅間Ｂテフラと呼ばれる天仁元(1108）年の軽石や火山灰の下から埋もれた水田が検出されているが、痕跡が僅かに判断できる程度の残存状態であり、調査範囲全面ではなく一部のみの検出である。

畦は明確ではないが、それぞれの区画と考えられる面の高低などから僅かな高まりの続く部分を推定したものの、大部分では確認出来なかった。一区画年の規模は前橋や高崎などの平野部に比べて小型であり、それは傾斜のある狭い地形に規制されたものと考えられる。一区画の面積については、畦の残りが悪く個々の区画の面を個別に明確に判断出来るものは無いことから、確実な枚数は把握出来ないが、少なくとも３枚以上は存在する。だが、それぞれの区画の形状がはっきりとしていないために、この当時の条里に基づいた区画であるかどうかは不明である。水口は明確ではないが、高低差を利用して水を引き入れて循環させることを考えれば、地形の傾斜から考えて、おそらくは北西側に位置するものと推定される。

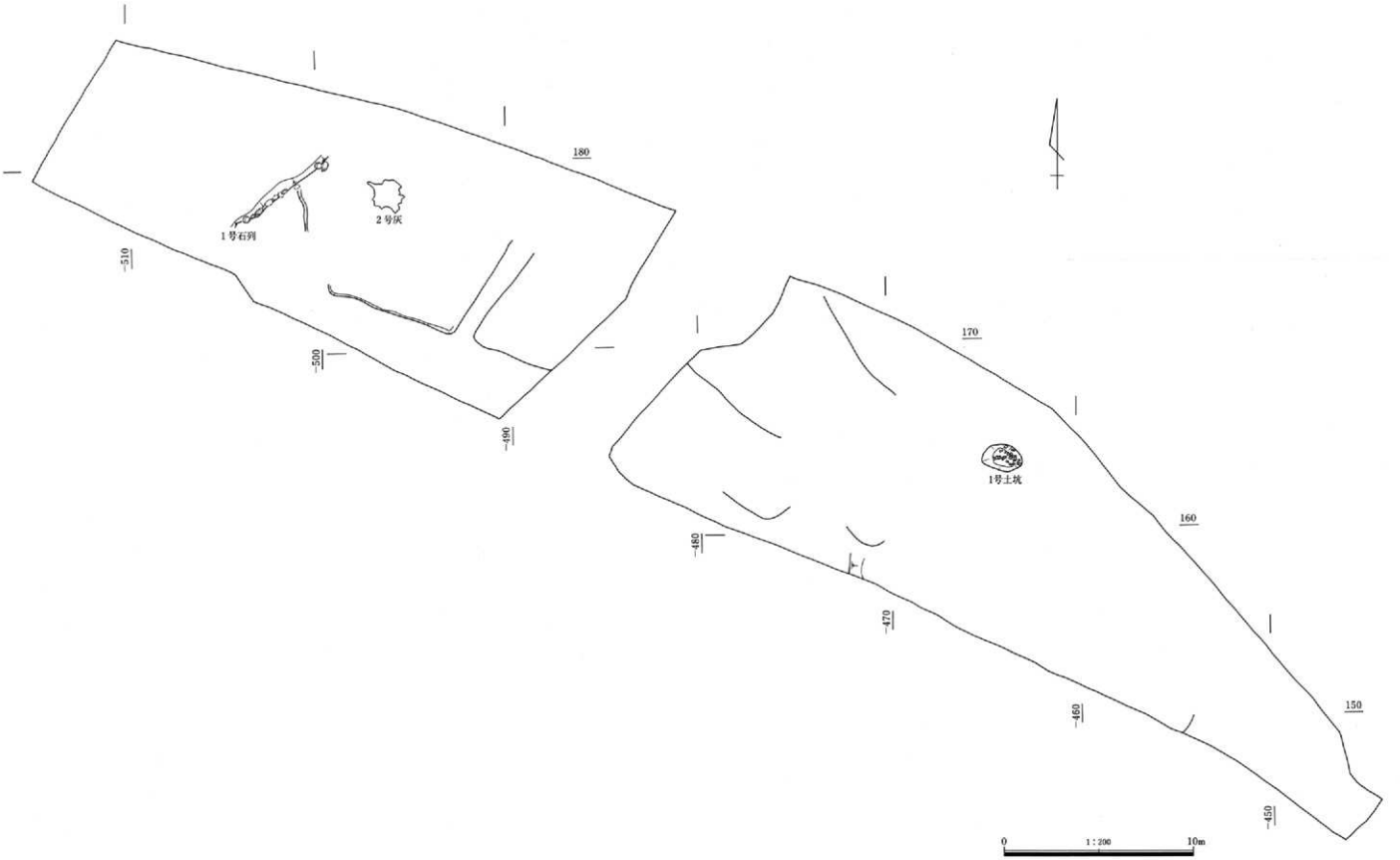
従来、近年の都市開発の頻度の高さから前橋・高崎地区を中心に遺跡が検出されていたが、最近では、吾妻地区や利根地区でも徐々に検出されつつある。平安時代の水田としては、吾妻郡では本遺跡以外では中之条町の天神遺跡、利根地区では沼田市の下川田平井遺跡で検出されている。

古墳時代の水田は、吾妻地区では中之条町の天神遺跡や七日市遺跡、利根地区では前記した下川田平井遺跡で検出されており、いずれも榛名伊香保軽石（Hr－Ⅰ）により埋没しており、年代も６世紀中頃とはっきりしている。水田の規模は大部分が小区画であるが、七日市遺跡では大区画も確認されている。

さらに、下川田平井遺跡では、榛名と浅間との間にも水田が洪水層に覆われる形で埋没しており、古墳時代中期の６世紀から平安時代末期の12世紀まで、合計３枚もの水田がはっきりと確認された訳である。

本遺跡でも、水田遺構としてはっきり検出された浅間Ｂテフラ直下の基本土層の５層上面以外にも、基本土層の６層や基本土層の３層下部でも、水田の床土と考えられる土層の様子や、プラント・オパール分析の結果からは、水田遺構が検出された浅間Ｂテフラ直下の５層からはイネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、６層および浅間Ｃ軽石（As－Ｃ，４世紀中葉）の上層でもイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。さらに、浅間粕川テフラ（As－Kk,1128年）直下層でも、稲作が行われていた可能性が認められた。

本遺跡については、既に平成13年度の年報にその概要が記載されており、また分析を依頼した古環境研究所の早田勉氏により紹介（2004「火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史―とくに平安時代の噴火について－」『1108　浅間山大噴火、中世への胎動』　かみつけの里博物館）されているが、遺跡の位置が地図上に点で示されているだけで、遺跡名や詳細はまったく記載されていないことから、本遺跡の報告が正式な紹介となる。



第33図　浅間Ｂテフラ下遺構

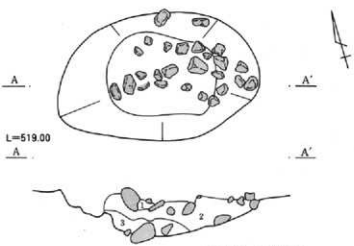
１号土坑（第34図、ＰＬ.10－74・75）　同一の面で長さ約10㎝から30㎝以下の大きさのいくつも石が混ざり込んだ穴が検出された。調査当初は風倒木の可能性も考えたが、基本土層の逆転などが確認出来ないことから、土坑と判断した。次に、検出面から軽石などの片付けのためのいわゆる「灰かき穴」とも想定したが、実際には軽石や火山灰などは入っていなかった。そこで、水田耕作などで浮き上がってきた石を埋めて処理する穴と思われる。規模は約220×140㎝の楕円形、深さ最大50㎝である。遺物は無い。

１号石列（第35図、ＰＬ.10－73）　長さ約30㎝から50㎝程度の大きさの６個の石と石が抜けたと考えられる穴が４ヶ所確認された。ほぼ直線的に列を為す状態で検出されていることから、石列とした。石列を境に北側に地形が傾斜することから、区画の境として、段差と共に設置されたものと考えられる。遺物は無い。

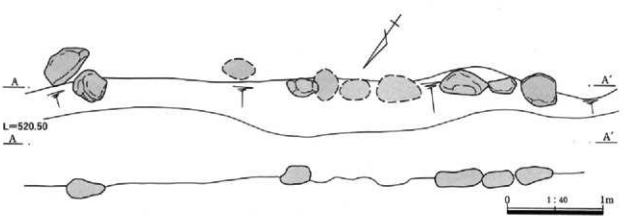
２号灰（第33図、ＰＬ.９－65）　基本土層の６層の上面から、灰が斑状に分布しているのが検出された。焼土や炭化物は確認されなかった。時期的には、古墳時代後半以降から平安時代後半までの間である。

（２）遺構外の遺物

残念ながら遺物は出土しなかった。



第34図　１号土坑



第35図　１号石列

第6節　中・近世の遺構と遺物

（1）遺構

中世以降から近世にかけては、前記した軽石を掘り込んだ溝がⅠ区のみに10条検出され、堆積した土層の観察から周囲に水田が継続して作られたことが分かる。これらの溝の一部は、傾斜に沿って西から東に向けておそらくは農耕用の水路として、周囲に広がる水田への水の供給の目的で設置されたものと考えられる。特に、3号溝と7号溝は大きな区画を、1・2・4・5・6号溝は検出した西端がほぼ揃うような感じであり、区画内の畝状の痕跡とも考えられる。

1号溝（第36図、PL.11－78・79）　走向方向は東北東で、2～7号溝ともほぼ同じで、重複は無い。形状は幅が狭く浅い擂鉢状である。確認された長さは約3mである。遺構の掘り込み面から中世から近世にかけてである。

2号溝（第36図、PL.11－80・81）　走向方向は東北東で、1・3～7号溝ともほぼ同じで、重複は無い。形状は幅が狭く浅い擂鉢状である。確認された長さは約5mである。遺構の掘り込み面から中世から近世にかけてと考えられる。

3号溝（第36図、PL.11－82・83）　走向方向は東北東で、1・2・4～7号溝ともほぼ同じで、重複は無い。形状は幅広で、中央部が一段深くなる。確認された長さは約8mである。遺構の掘り込み面から中世から近世にかけてと考えられる。

4号溝（第36図、PL.11－84）　走向方向は東北東で、1～3・5～7号溝ともほぼ同じであるが、やや蛇行気味で重複は無い。形状は幅が狭く浅い擂鉢状である。確認された長さは約5mである。遺構の掘り込み面から中世から近世にかけてと考えられる。

5号溝（第36図、PL.11－85）　走向方向は東北東で、1～4・6・7号溝ともほぼ同じで、重複は無い。形状は幅が狭く浅い擂鉢状である。確認された長さは約5mである。遺構の掘り込み面から中世から近世にかけてと考えられる。

6号溝（第36図、PL.12－86・87）　走向方向は東北東で、1～5・7号溝ともほぼ同じで、重複は無い。形状は幅が狭く浅い擂鉢状である。確認された長さは約3mである。遺構の掘り込み面から近世以降の所産である。

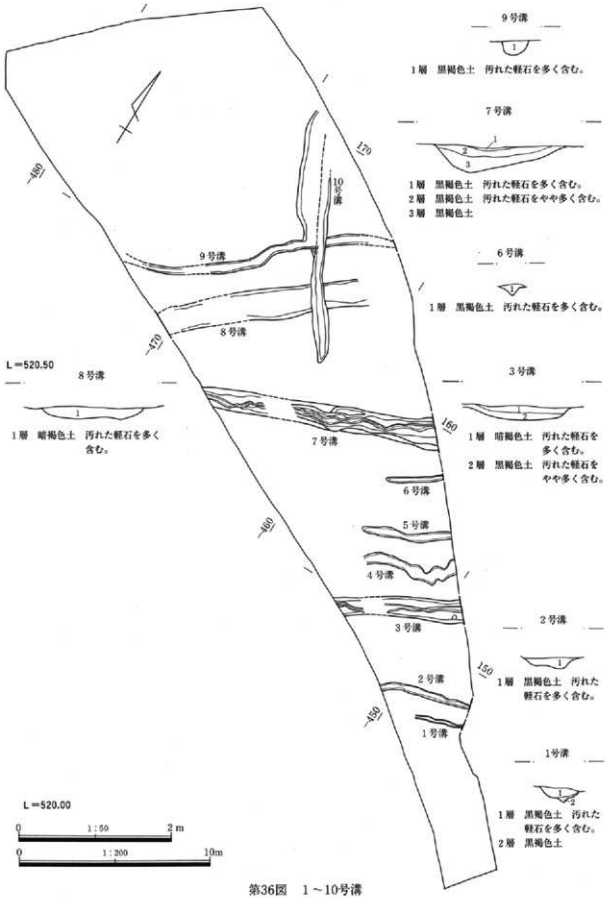
7号溝（第36図、PL.12－88・89）　走向方向は東北東で、1～6号溝ともほぼ同じで、重複は無い。形状は幅広で、一部が蛇行しながら一段深くなり、3号溝に類似する。確認された長さは約13mである。遺構の掘り込み面から中世から近世にかけてと考えられる。

8号溝（第36図、PL.12－90・91）　9号溝と同様に走向方向が北東で、10号溝と重複し本遺構の方が古いが、9号溝との新旧関係は不明である。形状は幅広で浅い。確認された長さは約11mである。遺構の掘り込み面から中世から近世にかけてと考えられる。

9号溝（第36図、PL.12－92・93）　8号溝と同様に走向方向が北東で、10号溝と重複し本遺構の方が古いが、8号溝との新旧関係は不明である。形状は擂鉢状である。確認された長さは約15mである。遺構の掘り込み面から中世から近世にかけてと考えられる。

10号溝（第36図、PL.13－94）　この溝だけが走向方向が北西－南東方向で、8号溝と9号溝と交差する形で重複し、本遺構の方が最も新しい。形状は幅広で浅く、東側が一段深い。確認された長さは約15mである。遺構の掘り込み面から中世から近世にかけてと考えられる。

（2）**遺構外の遺物**　残念ながら明確な遺物は出土しなかった。


9号溝
1層　黒褐色土　汚れた軽石を多く含む。
7号溝
1層　黒褐色土　汚れた軽石を多く含む。
2層　黒褐色土　汚れた軽石をやや多く含む。
3層　黒褐色土
6号溝
1層　黒褐色土　汚れた軽石を多く含む。
3号溝
1層　暗褐色土　汚れた軽石を多く含む。
2層　黒褐色土　汚れた軽石をやや多く含む。
2号溝
1層　黒褐色土　汚れた軽石を多く含む。
1号溝
1層　黒褐色土　汚れた軽石を多く含む。
2層　黒褐色土
8号溝
1層　暗褐色土　汚れた軽石を多く含む。
10号溝
9号溝
8号溝
7号溝
6号溝
5号溝
4号溝
3号溝
2号溝
1号溝
L＝520.50
L＝520.00
0　1:50　2m
0　1:200　10m

第36図　1～10号溝

第3表遺物観察表

1　縄文時代　出土遺物観察表（第10図、ＰＬ.14）

№　器種	計測値（cm）	出土位置・状態	器形・製作技法の特徴	①胎土・材質　②焼成・素材　③色調　④備考
1 縄文土器 押型文		表土 胴部破片	横位の細身の楕円の上に縦位の楕円が一部かぶる施文。	①白色粒子・黒色粒子を含む。②酸化焔普通　③橙　④
2 縄文土器 無唐科E式		4号竪穴住居埋没土 口縁部破片	縄文による施文後に幅広で深い沈線。内面は粗い横位の磨き。口唇部は凸凹有り。	①石英やチャートなどの砂粒多い。②酸化焔普通　③にぶい黄橙　④
3 石器 打製石鏃	長さ　2.3 幅　1.9 厚さ　0.35	Ⅱ区7号トレンチ7層 完形	無茎四基。凹基。定形で抉りがU字状。両方の脚の先端が平。いかゆる「鎬形鏃」。	①チャート　②剥片素材　③　④　0.96ｇ
4 石器 打製石鏃	長さ　3.2 幅　(2.2) 厚さ　1.0	Ⅱ区 片脚先端欠損	無茎四基。抉りが三角で、先端部がやや先細り。片側の脚の先端が欠損。	①黒色安山岩　②剥片素材　③　④　[1.96]ｇ
5 石器 打製石斧	長さ　(8.7) 幅　6.4 厚さ　(2.0)	2号竪穴住居埋没土 刃部欠損、頭部残存。	撥形で刃部幅を欠損しており、頭部側残存。片面の一部に磨り痕あり。	①細粒輝石安山岩　②分割礫素材　③ ④　[124]ｇ

2　弥生時代・古墳時代出土遺物観察表（第１６図、ＰＬ.14）

№　器種	計測値（cm）	出土位置・状態	器形・製作技法の特徴	①胎土・材質　②焼成・素材　③色調　④備考
1 弥生土器 甕		1号竪穴住居＋3号竪穴住居埋没土 胴部破片	外面は口縁部と胴部の９本一単位の山形の櫛描波状文と頸部の横位櫛描簾状文、内面はヘラ撫で後に研磨。	①　②酸化焔普通　③浅黄　④
2 弥生土器 甕		2号竪穴住居埋没土 口縁部破片	外面の一部が剥離するが、７～９本一単位の山形の櫛描波状文、内面はヘラ撫で後に研磨。	①　②酸化焔普通　③にぶい橙　④
3 弥生土器 甕		2号竪穴住居埋没土＋3号竪穴住居埋没土 口縁部破片	外面は８本一単位の山形の櫛描波状文、内面はヘラ撫で後に棒状の工具による横位の丁寧な磨き。	①　②酸化焔普通　③にぶい黄橙　④
4 弥生土器 甕		2・3号竪穴住居埋没土 口縁部破片	外面は６本一単位の山形の櫛描波状文、内面はヘラ撫で後に棒状の工具による横位の丁寧な磨き。	①　②酸化焔普通　③橙　④
5 弥生土器 甕		3号竪穴住居埋没土 口縁部破片	外面は７本一単位の山形の櫛描波状文、内面は棒状の工具による横位の磨き。	①　②酸化焔普通　③にぶい黄橙　④
6 弥生土器 甕		3号竪穴住居埋没土 口縁部破片	外面は頸部に９本一単位の山形の櫛描簾状文、内面はヘラ撫で後に研磨。口唇部に工具による押さえ痕。	①　②酸化焔普通　③にぶい黄橙　④
7 古式土師 台付小型甕		5号竪穴住居埋没土２片 口縁部破片	口縁部は直立し斜めに反る。外面は横撫で、頸部は右下がりの刷毛目。内面は横撫で。	①　②酸化焔普通　③にぶい褐　④
8 鉄器 刀子	長さ　(5.1) 幅　1.2 厚さ　0.5	破片	刃部と茎の一部を欠損。	①　②　③　④重量（8）ｇ

3　集石遺構　出土遺物観察表

1号集石（第13図、ＰＬ.14）

№　器種	計測値（cm）	出土位置・状態	器形・製作技法の特徴	①胎土・材質　②焼成・素材　③色調　④備考
1 弥生土器 甕	口径（23.0） 底径　6.4 高さ（29.6）	破片多数 口縁3/4、底部完存。	外面は口縁部から頸部にかけては無節の縄と結節による縄文を施す。胴部は横位のヘラ撫で、内面は横位のヘラ撫で。	①　②酸化焔普通　③橙　④一部で被熱痕。外面に剥落あり。

4　竪穴住居　出土遺物観察表

1号竪穴住居（第17図、ＰＬ.14）

№　器種	計測値（cm）	出土位置・状態	器形・製作技法の特徴	①胎土・材質　②焼成・素材　③色調　④備考
1 須恵器 高台付杯	口径　14.8 底径　11.0 高さ　4.1	口縁3/4、底部完存。	石回転ロクロ。外底は左回転のヘラ削りと高台削り出し。内底のロクロ痕は同心円状。	①　②還元焔普通　③灰　④一部で被熱痕。外面に剥落あり。

2号竪穴住居（第21図、ＰＬ.14）

№　器種	計測値（cm）	出土位置・状態	器形・製作技法の特徴	①胎土・材質　②焼成・素材　③色調　④備考
1 土師器 杯a	口径（13.0） 高さ（4.7）	図示部の1/5	やや薄手。外面の削りは細かく強い。口縁直下に削り残し部分あり。ヘラ磨きはやや左下がりで横位に近い。幅太で是長い I′種。	①A′　②普通　③明赤褐　外底付近はやや彩度低い。④

3号竪穴住居（第21・22図、ＰＬ.14・15）

№　器種	計測値（cm）	出土位置・状態	器形・製作技法の特徴	①胎土・材質　②焼成・素材　③色調　④備考
1 土師器 椀	口径　11.8 高さ　5.8	カマド内 ほぼ完形	外底にやや粗いヘラ削り。内面右下がり斜位の暗文状ヘラ磨きは幅太。	①C　②普通　③にぶい赤褐　断面中央は黒色。外底に黒斑にいる。④口縁上端部に歪曲、口縁外面やや底縁部に渡てハザ状の剥落あり。
2 土師器 杯a	口径　12.0 高さ　5.3	ほぼ完形	器面の剥落ですみ、整形痕の大部分は観察できないが、内面右下がり斜位の暗文状ヘラ磨き。	①C　やや大粒の岩片が混じる。②普通　③明赤褐　断面中央は部分的に黒色味をおびる。④内面を中心に渡てハザ状の剥落ですむ。

No. 器種	計測値（cm）	出土位置・状態	器形・製作技法の特徴	①粘土・材質 ②地成・素材 ③色調 ④備考
3 土師器 杯a	口径（12.5） 高さ（4.5）	1/3個体	口縁内端は小さく肥厚する。外面のヘラ削りは細かく雑だが、削り残しはない。内面ヘラ磨きも雑で、左下がりのI'種。	①C に近い。黒色鉱物粒の混入やや多い。②普通 ③赤褐 断面はやや黄色味をおびる。④
4 土師器 杯a	口径 11.6 高さ（4.0）	口縁2/3、底部若干。	薄手。器面やや凹凸。整形痕不明瞭。外面の削りは細かく弱い。内面のヘラ磨きは右下がり斜位で、やや丁寧。	①赤褐色鉱物等、雑多で粒径も一様でない 混入物やや多い。②やや硬質 ③橙 断面まではほぼ一様。④
5 土師器 杯a	口径 12.2 高さ 6.2	3/4個体	底部厚い。外面の削りは弱く雑で、器面にヒビ割れ状の跡が残る。口縁にナデの痕い痕残る。内面は平滑で、やや強い右下がり斜位のヘラ磨き。	①A 混入物少ない。②普通 ③明赤褐 一様。外面に黒斑広い。④
6 土師器 杯a	口径（15.0） 高さ（4.3）	粗没土・カマド粗没土 ⇔2住埋没土2片 図示部の1/4	口縁端部までやや厚手。外面ヘラ削りは底部中央のみで、無調整部分広い。内面左下がり斜位ヘラ磨きは輻太で、隙間のないほど丁寧に施す。	①Aに近い。石英等大粒混入物を散見。②普通 ③にぶい赤褐 淡い黒斑状のムラあり。④
7 土師器 杯b	口径 13.0 高さ 5.4	口縁3/4、底部ほぼ完存	外面のヘラ削りは粗く、口縁下半は無調整。内斜部の稜はやや弱い。右下がり斜位の内面の磨きが確認できるが不明瞭。	① ②普通 ③にぶい赤褐 不規則な黒斑あり。④内面やや剥落すする。破損後に二次被熱の可能性。
8 土師器 杯b	口径（15.0） 高さ（5.5）	1/3個体	薄手。内斜部の稜はやや鋭い。外面の削りは乱雑状態で行い、強度は鋭い。内面は平滑だが中央付近に凹凸顕著。左下がり斜位のヘラ磨き。	①A' 赤褐色鉱物目立つ。②普通 ③にぶい赤褐 内外面に帯状の黒斑あり。④口縁内面のみ剥落すする。
9 土師器 杯b	口径（12.6） 高さ（4.2）	埋没土の4片 図示部の1/3	薄手。内斜部の稜はやや強い。外底の削りは細かく強い。ヘラ磨きは左下がり斜位のI'種。	①A ②普通 ③明赤褐 断面まで一様。④
10 土師器 小形壺	口径（12.4） 高さ（4.5）	図示部の2/5	外面は丁寧なナデの上に斜位のヘラ磨きか。内面も丁寧なナデで平滑に仕上げる。	①2mm大の赤褐色鉱物やや多い。②普通 ③赤褐 黒色味の強いムラあり一様でない。④二次被熱。外面やや剥落すする。
11 土師器 鉢	口径（17.0） 高さ（4.9）	口縁1/3	内斜部の稜はやや鋭い。外面は口縁にのみ強いナデで、胴部上半は無調整。内面は平滑で、右下がり斜位のヘラ磨きを口縁まで施す。	①混入物少なく、Aに近い。②普通 ③明赤褐 赤色味・黒色味をおびるムラあり一様でない。④破損後に二次被熱か。
12 土師器 壺	口径 （9.8） 高さ（11.5）	細片21片が接合 胴部完存、胴部1/4.	三段成形。外面のナデは一部で顕毛目状。内面のナデは弱く、胴部内面に接合痕明瞭。	①B 砂粒はやや粗い。②やや軟質 ③明赤褐 内外面一様、断面は黒色味強い。④
13 土師器 甕	口径 16.3 高さ（8.0）	口縁ほぼ完存、胴部1/2.	器面やや凹凸し整形痕不明瞭。外面弱く雑で細かな削り。内面のナデは急長い。	①やや砂質。大粒の白色岩片含む。②普通 ③明赤褐 黒色味・灰色味おびるムラあり一様でない。④
14 弥生か 甕か	口径（4.8） 底径（6.4）	底部1/2、胴部下端1/6.	やや薄手。外面鋭位、内面横位のヘラ磨き。	① ②普通 ③にぶい黄褐 黒色味をおびるムラあり。④弥生後期の甕か。破損後に二次被熱。
15 土師器 甕	口径 15.6 高さ 27.1 底径 7.0	ほぼ完形	厚手。器面凹凸し整形痕不明。底形時の凹凸あり。外面は顕毛目の残る弱い割りか。	①細砂多くしまりに欠く。②やや軟質 ③明赤褐 ④
16 土師器 甕	高さ（16.2） 底径 7.7	胴部下半1/6、底部中心欠く。	外面斜位一横位のやや強い割り。内面のナデも強く、底部付近では顕毛目状の擦痕残る。	①砂粒やや多く、やや粗い。②やや軟質 ③褐 内面赤色味をおびる。④破損後に二次被熱。
17 土師器 甕	高さ （9.7） 底径（12.0）	⇔6号竪穴住居複没土 図示部1/8	薄手。粘土や顕毛目の特徴などから、18と同一個体と思われる。	① ②普通 ③明褐 ④
18 土師器 甕	口径（23.0） 高さ（6.7）	埋没土⇔2号竪穴住居複没土 図示部1/8	器面に細かな凹凸多い。口縁に粗いナデ。外面に顕毛目状の擦い擦痕。内面にも横位に近い粗い擦痕。	① ②普通 ③橙 外面に黒斑あり。④破損後に二次被熱の可能性。
19 土師器 甕	口径 17.2 高さ（14.2）	カマド 口縁1/4	やや厚手。口縁端部は外方に小さく突き出し、上端は弱く窪む。外面は斜位の丁寧な割りで、一部に顕毛目状の擦痕が残る。内面の横位の撫でも丁寧。	① ②普通 ③にぶい赤褐 ④
20 石製品 こも編み石	長さ 16.1 厚さ 5.3 幅 7.0	完形	断面三角形で、棒状の重角礫。	①堆粒輝石安山岩 ② ③ ④重量 915g
21 石製品 こも編み石	長さ 14.2 厚さ 4.2 幅 6.8	完形	やや扁平な棒状の重円礫で、部分的に煤が付着。	①堆粒輝石安山岩 ② ③ ④重量 650g
22 石製品 こも編み石	長さ 14.5 厚さ 4.0 幅 6.9	完形	断面がやや三角形な、棒状の重角礫。	①堆粒輝石安山岩 ② ③ ④重量 550g
23 石製品 こも編み石	長さ 16.8 厚さ 4.2 幅 7.1	完形	一端が尖り気味の棒状の重円礫。	①堆粒輝石安山岩 ② ③ ④重量 790g
24 石製品 砥石	長さ 15.6 厚さ 3.6 幅 7.0	完形	勝面の切り出し痕。両側面の使い込みが顕著。	①砥沢石 ② ③ ④重量 580g

No　器種	計測値（cm）	出土位置・状態	整形・製作技法の特徴	①粘土・材質　②焼成・素材　③色調　④備考
25 石製品 砥石	長さ　6.3 厚さ　2.0 幅　2.3	定形	表裏両面から穿孔。	①砥沢石　②　③　④重量　45ｇ
26 石製模造品 勾玉	長さ　3.3 厚さ　0.35 幅　2.3	埋没土 定形	表裏両面から穿孔。挟りにより勾玉状に成形。	①蛇紋岩　②板状素材　③　④重量　5ｇ
27 鉄製品 刀子	長さ［16.1］ 厚さ　0.4 幅　1.5	埋没土 定形	先端部（刃先）を除き、3片で接合しない。	①　②　③　④重量　11ｇ

4号竪穴住居（第23図、P.L.15）

No　器種	計測値（cm）	出土位置・状態	整形・製作技法の特徴	①粘土・材質　②焼成・素材　③色調　④備考
1 土師器 杯b	口径　14.5 高さ　5.4	口縁3/4、底部完存。	内耳部の後は潰い。内面は平坦。外底の削りは鋭い。内面は右下がり斜位Ⅱ種のヘラ磨き。	①B　②普通　③明赤褐　黒色味をおびる破片あり一緒ではない。④破損後に二次被熱。
2 土師器 杯b	口径（13.2） 高さ（5.4）	1/3側体	内耳部の後はやや鋭い。口縁部のナデは接合痕を消しきれない。外面の削りは深いが鋭痕が不明瞭。内面は平滑。右下がり斜位のヘラ磨きはまばら。	①A　②やや硬調　③明赤褐　断面はやや黄色味をおびる。④

5号竪穴住居（第27・28図、P.L.15・16）

No　器種	計測値（cm）	出土位置・状態	整形・製作技法の特徴	①粘土・材質　②焼成・素材　③色調　④備考
1 土師器 杯a	口径（13.0） 高さ［5.2］	1/6側体	口縁端部は内側に尖る。外面は細かく強い削り。内面は平滑で、ヘラ磨きはⅡ種で弱く粗い。	①A'　②普通　③明赤褐　断面まで一様。④
2 土師器 杯a	口径（12.0） 高さ［4.9］	1/3側体	内面は平滑で、口縁部に右下がり斜位の暗文状ヘラ磨き。	①　②やや硬調　③明赤褐　内外面に淡い黒斑あり。④一部で被熱痕。外面に剥落あり。
3 土師器 杯a	口径（12.2） 高さ［4.7］	1/2側体	やや厚手。外面の削りはやや粗いが、他は丁寧な作り。内面平滑。左下がりⅡ種のヘラ磨きは底部と口縁の端を几帳面に分けている。	①A　②軟質　③普通　④明赤褐　内外面とも円弧状の黒斑あり。④
4 土師器 杯b	口径　12.2 高さ　4.9	定形	内耳部の後は鋭い。外底の削りは粗く雑で、口縁直下は無調整。ヘラ磨きは左下がり斜位Ⅱ種だが、一部でⅠ種になっている。	①　②硬調　③にぶい橙　ほぼ一様。内外面とも底部付近に広い黒斑。④煤状の付着物あり。
5 土師器 杯b	口径　13.4 高さ　4.9	定形	外底は細かなヘラ削りを口縁直下まで行う。ヘラ磨きは左下がり斜位のⅡ種だが、丁寧で美しい仕上がり。	①　②普通　③明赤褐　口縁部内外面に弧状の黒色味の強いムラあり。④
6 土師器 杯b	口径（13.8） 高さ　5.4	口縁1/4、底部ほぼ完存。	内耳部の後は甘れている。外面の削りは丁寧だが、口縁直下に無調整部分あり。内底はやや平滑さ欠く。ヘラ磨きは左下がり斜位Ⅱ種でやや雑。	①A　②普通　③橙　内外面とも円弧状の黒斑広い。④
7 土師器 杯b	口径　14.0 高さ　4.8	口縁3/4、底部完存。	やや厚手。外面の削りは強く雑。内面は比較的平滑でヘラ磨きは右下がりⅡ種。	①B　②普通　③にぶい橙　④二次被熱の影響で、外面の器面やや荒れる。
8 土師器 杯b	口径（13.8） 高さ［4.4］	口縁1/4	内耳部の後はやや鋭さを欠く。内面の調落すすみ、ヘラ磨きは不明瞭。左下がり斜位か。	①　②普通　③にぶい橙　断面まではほぼ一様。④内面に凹てハゲ状の剥落多い。
9 土師器 杯b	口径　13.0 高さ　5.8	ほぼ定形	内耳部の後は鋭さを欠く。外面は細かく丁寧な削り。内面は左下がりⅡ種の強いヘラ磨きで器面は平滑。	①C　②普通　③にぶい橙　内面は黒色部分広く、黒色処理の可能性。④
10 土師器 小型甕	口径　11.7 高さ　13.5 底径　5.0	胴部以上2/3、底部完存。	器面磨滅し整形痕不明瞭。外底は中央がくぼみ絞り目状。内面はヘラによる強いナデの痕跡があり、比較的平滑。	①砂粒や微細な岩片やや多い。小型品としてはやや粗悪。②やや軟調　③明赤褐　黒斑あり。断面は黒色味強い。④
11 土師器 甕	口径　14.2 高さ　23.5	定形	外面上半部はやや強い鋭位、下半部は斜位のヘラ削り。内面上半部は横位、下半部は鋭位のナデ。	①砂粒混じりでやや粗い。②普通　③にぶい橙　片側に黒斑あり。④
12 土師器 甕	口径　14.1 高さ　20.2 底径　6.4	胴部以上3/4、底部完存。	外面は幅広で強い斜位のヘラ削り。内面のナデはヘラ状の工具痕残るが雑めて雑。	①砂粒混じりでやや粗い。②普通　③にぶい明赤褐　黒色味おびるムラあり。④二次被熱の影響少ない。
13 土師器 甑	口径　23.2 高さ　25.5 底径　9.3	ほぼ定形	厚手で重量。丸底で外面中央は水きくくぼん。外面鋭位の細かな削りで、一部に刷毛目状の擦痕あり。内面は整形痕不明瞭。	①ボソボソしたやや粗い素地。混入物は少ない。②厚手の重さとしては焼き締まる。③にぶい明赤褐　黒色味おびるムラあり。内面黒斑色。④
14 土師器 甑	口径　22.4 高さ　23.3 底径　8.8	ほぼ定形	口縁上端は一部で突出している。外面鋭位の急長いヘラ削りで、刷毛目状の鋭い擦痕が残る。胴毛目のないヘラ削り。内面にも刷毛目状の擦痕が強い鋭位のナデ。	①Aに近い。大部品としては緻密。②やや硬調　③にぶい橙　黒色味をおびるムラあり一様でない。④破損後に二次被熱か。
15 石製品 こも編み石	長さ　16.8 厚さ　4.1 幅　7.3	定形	棒状の重角錐で断面四角形。片側に傾き付着。	①粗粒輝石安山岩　②　③　④重量　750ｇ
16 石製品 こも編み石	長さ　15.6 厚さ　4.1 幅　5.9	定形	やや扁平で両端が尖り気味の棒状の礫だが、熱により表面の一部が剥がれている。	①粗粒輝石安山岩　②　③　④重量　360ｇ

No	器種	計測値（cm）	出土位置・状態	器形・製作技法の特徴	①胎土・材質 ②焼成・素材 ③色調 ④備考
17	石製品 こも編み石	長さ 16.3 厚さ 6.8 幅 (9.3)	一部欠損	厚みのある幅広な平円礫で、一辺をやや欠損。片面に煤が付着。	①粗粒輝石安山岩 ② ③ ④重量 [1320] g
18	石製品 こも編み石	長さ 13.7 厚さ 4.3 幅 7.4	完形	断面四角形の亜角礫で、片錆平分に煤が付着。	①粗粒輝石安山岩 ② ③ ④重量 720 g
19	石製品 こも編み石	長さ [13.5] 厚さ 4.2 幅 7.0	一端欠損	断面がやや三角形の棒状の亜角礫だが、一端を欠損。片側に煤が付着。	①粗粒輝石安山岩 ② ③ ④重量 [500] g
20	石製品 こも編み石	長さ 13.7 厚さ 4.2 幅 6.9	完形	断面がやや三角の棒状の亜角礫。	①粗粒輝石安山岩 ② ③ ④重量 560 g
21	石製品 こも編み石	長さ 14.8 厚さ 3.6 幅 7.2	完形	断面がやや三角形のほぼ長方体の亜角礫。両端を除いてほぼ全面に煤が付着。	①粗粒輝石安山岩 ② ③ ④重量 640 g
22	石製品 こも編み石	長さ [9.8] 厚さ 4.8 幅 5.5	一端欠損	断面が丸みをおびた棒状の礫の一端を欠損。片側に煤が付着。	①粗粒輝石安山岩 ② ③ ④重量 [350] g
23	石製品 敲き石	長さ 8.5 厚さ 5.3 幅 7.6	完形	厚めのやや四角形の扁平で、楕円形。	①粗粒輝石安山岩 ② ③ ④重量 470 g
24	石製品 砥石	長さ [15.7] 厚さ 4.9 幅 6.8	両端欠損	四面共に使用しており、やや消耗。	①砥沢石 ② ③ ④重量 [695] g
25	石製模造品 勾玉	長さ 2.8 厚さ 0.5 幅 1.8	完形	表裏両面からの穿孔。抉りを入れて勾玉状に、全面加工。	①蛇紋岩 ②板状素材 ③ ④重量 2 g

6号竪穴住居（第31・32図、P.L.16・17）

No	器種	計測値（cm）	出土位置・状態	器形・製作技法の特徴	①胎土・材質 ②焼成・素材 ③色調 ④備考
1 土師器 杯a	口径 (12.0) 高さ [5.4]	口縁1/4、底部1/2。	やや厚手。外面は口縁直下まで意の長いヘラ削り。内面は左下がり斜位のやや粗い暗文状ヘラ磨き。	①A やや大粒の岩片の混入多い。②普通 ③明赤褐 断面まで一様。④
2 土師器 杯a	口径 12.7 高さ 5.1	底部1/3欠く。	薄手でやや軽量。口縁内端は小さく肥厚。内外面は口縁直下まで細かく弱いヘラ削り。内面は右下がり斜位の細い暗文状ヘラ磨き。	①A′ 黄白色の微細な岩片やや多い。②やや軟質 ③橙 断面まではほぼ一様。④口縁部中心に滑ていぜ状の器面の荒れ。
3 土師器 杯a	口径 11.6 高さ [5.1]	口縁1/4、底部3/4。	底部のみやや厚手。内面は左下がり斜位のやや粗い暗文状ヘラ磨き。	①A 赤褐色の細かな岩片やや多い。②普通 ③明赤褐 断面まで一様。④
4 土師器 杯a	口径 (13.0) 高さ [4.7]	埋設土 1/3側体	やや薄手。口縁内端わずかに肥厚。外面は口縁部下まで丁寧なヘラ削り。内面は左下がり斜位のやや粗な暗文状ヘラ磨き。	①A′ 細かな岩片やや多い。②普通 ③橙 内外面ともほぼ一様。④
5 土師器 杯b	口径 11.6 高さ 5.2	口縁3/4、底部完存。	強くて脆状の器形。内斜部の稜はやや鋭い。外面は口縁直下まで手乱き状態での細かな削り。内面は細いが粗な右下がり斜位の暗文状ヘラ磨き。	①A 赤褐色岩片や石英粒やや多い。②普通 ③明赤褐 断面やや黄色味をおびる。④
6 土師器 杯b	口径 13.4 高さ 4.9	3/4側体。	やや薄手。内斜部の稜はやや鋭い。外面の削りは丁寧。内面左下がりの暗文状ヘラ磨きも丁寧。	①A′ ②普通 ③橙 外面に彩度の低いムラ広い。④
7 土師器 杯b	口径 (14.4) 高さ [4.8]	口縁1/3、底部2/3。	内斜部の稜はやや鋭い。外面は底部のみ弱いヘラ削りで無調整部分広い。内面斜部すすみ調整痕不明瞭。右下がり丁種の暗なヘラ磨き。	①A′ やや粗い混入物多い。②普通 ③明赤褐 内外面ほぼ一様。④
8 土師器 杯b	口径 (15.0) 高さ [4.6]	口縁1/8、底部1/3。	内斜口縁で、口縁内端の稜はやや鋭い。外底のみヘラ削り。内面右下がり斜位の暗文状ヘラ磨きは丁寧。	①A ②やや硬調。③明赤褐 内外面・断面とも一様。④
9 土師器 杯b	口径 (12.5) 高さ 5.4	口縁一部欠く、底部完存。	内面比較的平滑。内斜部の稜はやや強い。外面は削り残しが少ない。内面左下がりI′種のヘラ磨き。	①A ②やや硬調 ③明赤褐 外面に小黒斑あり。④
10 土師器 杯b	口径 (14.2) 高さ [5.5]	口縁1/3、底部1/6。	内斜部の稜は鋭く、端部の上方へのつまみあげも丁寧。外底の削りは丁寧だが、体部の無調整部分広い。内面は平滑で右下がりI′種のヘラ磨き。	① A やや粗い混入物多い。②普通 ③明赤褐 内外面一様。④
11 土師器 杯b	口径 13.8 高さ 4.7	口縁端部若干、底部はは定存。	内面の剥落著しく、稜部の観察にも支障。外面はやや丁寧なヘラ削り。内面観察できず。	①C 赤褐色紙物の混入顕著。②普通 ③にぶい赤褐 外面は黄色味をおびる。④
12 土師器 杯b	口径 15.0 高さ [5.6]	図示部の1/3	内斜部の稜はやや弱い。外面の削りは弱く、上半に削り残しが広いが器面は比較的平滑。内面は磨滅荒れて整形痕は不明。	①B 細砂の混入やや多い。②やや軟調 ③明赤褐 ④口縁内面のみ板物のような器面の荒れ顕著。
13 土師器 杯b	口径 12.5 高さ 4.8	はは完形	底部やや厚い。内斜部の稜は弱い。外面のヘラ削りは丁寧。内面に左下がり斜位の丁寧な暗文状ヘラ磨きで、外面にも細な右下がりの磨きを施す。	①A′ ②普通 ③橙 断面は彩度低い。外底に狭い黒斑あり。④

No　器種	計測値 (cm)	出土位置・状態	器形・製作技法の特徴	①粘土・材質　②焼成・素材　③色調　④備考
14 土師器 杯b	口径 (14.0) 高さ　5.2	口縁1/4、底部3/4。	やや厚手。外面の削りはやや粗い。内斜部の稜はやや鋭い。内面石下がりの暗文状ヘラ磨きはやや鋭い。	①A　赤褐色の細かな岩片やや多いが、他の混入物は少ない。②普通　③赤褐　断面まで一様。④
15 土師器 杯b	口径 (12.9) 高さ (4.0)	1/3個体	薄手。外面の削りはやや丁寧。内斜部の稜はやや鋭い。内面石下がり斜位の暗文状ヘラ磨きは弱い。	①B　②普通　③明赤褐　断面まで一様。④
16 土師器 杯b	口径 (14.0) 高さ (4.8)	1/3個体	内斜部の稜は鋭く、端部の上方へのつまみあげも丁寧。外面は底の長い丁寧なヘラ削りで、無調整部が狭い。内面は石下がりⅠ種のやや粗いヘラ磨き。	①Cに近い。②やや硬質　④明赤褐　内面は口縁部以外黒色味をおびる。④
17 土師器 杯b	口径 (13.7) 高さ (4.0)	1/3個体	内斜部の稜はやや弱い。外面は丁寧なヘラ削りで器面平滑。内面は弱いが丁寧な左下がりⅡ種ヘラ磨き。	①B　②普通　③にぶい橙　口縁端部は内外面とも黒色味をおびる。④
18 土師器 杯b	口径　14.2 高さ　5.9	3/4個体	やや厚手。内斜部の稜は鋭い。外面の削りは丁寧で口縁直下まで施す。右下がり斜位の暗文状ヘラ磨きは丁寧。	①A　やや大粒の岩片を散見する。②普通　③にぶい赤褐　断面まで一様。④
19 土師器 杯b	口径　13.7 高さ　5.0	完形	内斜部の稜は鋭く、外面の削りは雑。左下がり斜位の暗文状ヘラ磨きは丁寧だが、一部で省略。内底一部に有目圧痕が残る。	①A　バミス等の混入物はやや大粒。②酸化鉱普通　③橙　下半に黒斑状のムラあり。断面は黒色味をおびる。④
20 土師器 杯b	口径 (17.0) 高さ (7.3)	口縁1/4、底部完存。	やや厚手。内斜部の稜はやや鋭い。外面は雑かく雑な削り。内面の磨きは左下がりⅠ種だが雑。	①C　微細な岩片を散見する。②普通　③明赤褐　外底に黒斑状いる。④
21 土師器 杯b	口径　11.8 高さ　7.9	口縁一部を欠きほぼ完形。	内底は平坦。内斜部の稜はやや鋭い。外面は底部の削りのほか体部下半にも削りを加える。内面は右下がりⅡ種の雑なヘラ磨き。	①A　②やや硬質　③明赤褐　内外面はほぼ一様。④
22 土師器 壺	口径 (13.3) 高さ　20.2	口縁1/2、胴部以下はほぼ完存。	口縁部に弱い撫。外端は平面でやや低い撫痕が残る。胴部は外面平滑。丁寧な磨きの下に刷毛目状の撫痕が一部に残る。内面も比較的平滑。	①A　緻密　②やや硬質　③赤褐　黒色味をおびるムラあり。④破損後に被熱か。
23 土師器 甕	口径　16.0 高さ　20.8	上半1/2、下半はほぼ完存。	外面磨滅ですみ整形痕不明瞭。胴部付近にヘラ削りドの縦位の調毛目が残る。内面下半は刷毛目状撫痕が残る強い横位ナデ。	①砂粒多く、やや粗い。②普通　③にぶい褐　赤色味・灰色味おびるムラあり一様でない。内面黒色味強い。④二次被熱
24 土師器 甑	胴径　13.3 高さ (27.0) 底径　8.5	口縁欠く、胴部はほぼ完存。	器面磨滅し、整形痕不明。器面の平滑さ欠く。	①粗砂、赤褐色粒多く粗い。③軟質　③橙　黒斑や赤色味をおびるムラあり一様でない。③二次被熱
25 土師器 甕	口径　14.8 高さ (22.7)	口縁～胴部完存、胴部上半1/3。	やや厚手。口縁上端は平坦。外面は平滑に仕上げてあるが整形痕不明瞭。内面ナデは輪広の工具痕残る。	①粗砂の多いザックリした質地。②普通　③にぶい橙　外面に淡い黒斑あり。④二次被熱
26 土師器 甕	底径　7.5 高さ (12.4)	底部1/2、胴部下端1/6。	丸胴甕。内面胴部下端に接合痕顕著。外面に方向不定のやや斜く細かなヘラ削り。	①24に類似。片岩混じりの岩片やや多い。②普通　③褐　内外面とも黒色味をおびるムラあり。
27 石製品 敲き石	長さ　7.9 厚さ　4.4 幅　7.2	完形	楕整ではほぼ円形な礫。上辺に敲打痕が認められる。	①粗粒輝石安山岩　②　③　④重量　280 g
28 石製品 こも編み石	長さ　13.8 厚さ　7.7 幅　8.7	完形	厚みのある幅広な楕円礫。	①粗粒輝石安山岩　②　③　④重量　1020 g
29 石製品 こも編み石	長さ　9.7 厚さ　5.7 幅　6.2	完形	断面がほぼ四角形で、外形もほぼ長方形。	①粗粒輝石安山岩　②　③　④重量　710 g
30 石製品 こも編み石	長さ　14.2 厚さ　4.4 幅　4.9	完形	断面三角形で、棒状の亜角礫。	①粗粒輝石安山岩　②　③　④重量　670 g
31 石製品 こも編み石	長さ　12.7 厚さ　3.7 幅　7.0	完形	断面がやや扁平で、棒状の亜角礫。	①粗粒輝石安山岩　②　③　④重量　500 g
32 石製品 こも編み石	長さ　(5.9) 厚さ　4.4 幅　7.7	一端のみ残存	断面がやや扁平で、棒状の亜角礫か。	①粗粒輝石安山岩　②　③　④重量　195 g
33 石製品 砥石	長さ　15.7 厚さ　4.3 幅　5.8	完形	断面四角形の棒状の亜角礫で、相対する二面を使用している。	①粗粒輝石安山岩　②　③　④重量　755 g
34 石製品 砥石	長さ　8.8 厚さ　4.5 幅　7.0	完形	断面が四角形で、一端側の四面すべてをかなり使い込んでいる。	①砥沢石　②　③　④重量　285 g
35 石製品 砥石	長さ　4.6 厚さ　1.7 幅　1.9	ほぼ完形	一端に紐を通すための穴を両側から穿孔。小型で四面とも使用。	①砥沢石　②　③　④重量　18 g
36 石製模造品 臼玉	長さ　0.6 厚さ　0.2 幅　0.6	完形	表裏両面から穿孔している。全面に加工が施されている。	①蛇紋岩　②普通　③緑　④重量　0.11 g

第4章　まとめ

第1節　土器

本遺跡からは、各時代の土器が出土しているが、それぞれについて特色をまとめてみる。

まず、縄文時代の早期の押型文土器については、本遺跡では楕円が出土しているが、吾妻町内では今のところ草創期から早期にかけての遺物は発見されていない。

そこで吾妻地区全体でみてみると、ほぼ中央部を西から東に流れ下る吾妻川では下流域の小野上村の八木沢清水遺跡から1軒の竪穴住居と共に稲荷原式の撚糸文土器と樋沢式の山形の押型文土器、それにこの時期に特徴的な「鍬形」をはじめとする打製石鏃やスタンプ形石器、三角錐状石器などの石器群が出土している。中之条町では、支流の四万川沿いの上須郷遺跡からは撚糸文土器が、清水遺跡からも押型文土器が、細尾岩陰遺跡からは早期の尖底土器が出土している。

支流の名久田川沿いでは、大塚遺跡群の五十嵐遺跡からは土坑1基と共に井草Ⅱ式や夏島式の撚糸文土器や石器が、下平遺跡からは楕円と山形の両方の押型文土器が出土している。さらに支流の蟻川上流域の岩本遺跡からは押型文土器が出土しているが楕円と山形のどちらかは確認できない。天台遺跡からは稲荷台式の撚糸文土器と茅山式土器が出土している。

その名久田川の上流域の高山村の尻高北之谷遺跡からは、撚糸文土器と楕円と山形の押型文土器が、この時期に特徴的な「鍬形鏃」をはじめとする打製石鏃やスタンプ形石器、三角錐状石器などの石器群と共に出土している。（地元の登坂福司氏の採集資料で、現在は中之条町歴史民俗資料館に収蔵されている。）

吾妻川上流域の長野原町では、以前から著名な石畑Ⅰ岩陰遺跡から表裏縄文土器や押型文土器が出土しており、近年になって未報告ながら、楡木Ⅱ遺跡から夏島式から東山式までの撚糸文土器が一部に石囲い炉を持つ竪穴住居30軒と共に出土している。立馬Ⅰ遺跡からも撚糸文期の竪穴住居が1軒検出されている。

このように、吾妻川自体が東西に細長い河岸段丘を何段も作り出すと共に、北と南にそびえる山々から大小の幾筋もの河川が合流し、それぞれが小規模な段丘や扇状地形を作り出しており、このような地形を利用して遺跡が形成されたと考えられる。そして、まず縄文時代の古い段階には河川や沢に沿った山岳地帯の岩陰や洞穴が生活の拠点として選ばれ、その後に丘陵部に移行する場所に集落が営まれるようになっていく訳で、そこに定住化の問題を解明する上でのヒントが隠されているものと考えられる。

次に、弥生時代の土器についてみてみよう。本遺跡からは中期前半の岩櫃山式土器1個体と、後期の樽式土器の破片が数点出土している。

前者については、前述したように霜田遺跡の発見の経緯である中期の壺型土器の存在が関連する。ほぼ完全な形であるとともに複数個体での落ち込みからの出土状態であることから、弥生時代の古い段階から東日本を中心に広がった墓制の一つである再葬墓の可能性も否定出来ない。もちろん、単純に竪穴住居からの一括資料とも考えられなくも無い。これについて、本遺跡の発見の経緯と土器の様相を平野進一氏がまとめている。それによれば、1970（昭和45）年に発見者の横爪務氏が現在の国道406号線の工事現場で偶然に発見したものであり、工事によって削り取られた道路脇の断面に黒い落ち込みがあって、その中から複数の土器がまとまって出土したとのことである。その報告文からは竪穴住居か土坑と考えられる掘り込みの存在と、

その中に数個体の土器が埋納されていた事実が読み取れる。竪穴住居の可能性も考えられなくはないが、前期末から中期前半に特徴的な再葬墓と考えても良いのではないだろうか。

遺物の年代も当初は中期前半と考えられており、県立歴史博物館の常設展示解説の図録にも中期前半の遺跡として、分布図にプロットされている。だが、平野氏らの観察により、むしろ遠賀川式と呼ばれる前期末から中期初頭にかけての壺形土器の系譜を引くもので、特に鋭描き直線文を重ねる特徴が近畿地方の前期第一様式の新段階に対比され、その地方化した資料と考えられている。いずれにしても、他の遺物についても同様に詳細な検討が必要となるであろう。

本遺跡の弥生土器については、器形及び紋様ともに類似する例はほとんど無い。

器形あるいは紋様が類似する事例としては、宮城県の中期中葉の十三塚遺跡７号土坑墓と後期の常盤広町遺跡、秋田県の前期の地蔵田Ｂ遺跡、山形県の中期前半の地蔵池遺跡などがあげられる。器形だけの類似では、茨城県の前期の殿内遺跡４号竪穴と、中之条町の前期の宿割遺跡の甕が、紋様だけならば、茨城県の前期の殿内遺跡３号竪穴、福島県の中期中葉の土取場遺跡と中期後半の天神原遺跡、宮城県の中期中葉の南小泉遺跡があげられる。特に、集石遺構出土の事例としては、藤岡市の前期の沖Ⅱ遺跡の土坑があげられる。こうした点を踏まえて、器形と紋様及び粗い削状の整形から前期末から中期前半の可能性も考えたいが、後半まで下るとの意見もある。

吾妻地区のこの時代の様子をみてみると、吾妻町には学史に名高い岩櫃山鷹の巣岩除遺跡がある。この遺跡は再葬という形態での墓であり、生活領域からかけ離れた山の斜面途中の岩の除に土器に人骨を入れて土器ごと埋葬する形で、その時期も限定される。出土した19個体の土器も大きく分けて、縄文時代の伝統を引き継ぐ東日本的な変形工字文の甕形土器と、東海地方などの影響を受けた条痕文をもつ壺形土器の二つの系統である。この遺跡出土の土器を示標とした岩櫃山式が編年として設定されている。

吾妻町内では一方で、集落空間として利用可能な地形からも再葬と考えられる遺構が検出される事例もある。前畑遺跡からは弥生時代中期前半の土坑９基が検出され、岩櫃山式土器の壺型土器を中心に多数の遺物が出土している。後期には遺跡数が増加し、善導寺前遺跡、小泉宮戸遺跡、昆布沓戸遺跡などがあげられる。

中之条町では、前期末葉の壺形土器と甕形土器が宿割遺跡から出土しており、再葬墓と考えられている。有笠山１号洞窟遺跡と２号洞窟遺跡からは中期初頭の土器と共に、多量の焼けた人骨や穿孔された人の指の骨などが出土しており、やはり再葬墓と考えられる。後期になると吾妻町と同様に遺跡数が増加し、天神遺跡や伊勢町川端遺跡などがあげられる。

長野原町では、立馬Ⅰ遺跡で前期の竪穴住居が１軒、中期後半の土器棺墓を含む土坑が数基、長野原一本松遺跡で中期前半の土坑１基、横壁中村遺跡では埋甕１基、がそれぞれ検出されている。一方で、前述した吾妻町や中之条町の事例とは異なり、後期の出土事例は少なく、石畑遺跡で１基の土坑、下原遺跡や立馬Ⅰ遺跡、それに二社平遺跡、居家以岩除群、寺久保遺跡、新田原Ⅰ遺跡で採集されているだけである。

倉渕村では、上の久保遺跡で岩櫃山式の壺型土器と甕型土器、それに深鉢が出土しており、後期では水沼遺跡や東小学校遺跡から樽式が出土している。

このように、前期末から中期前半にかけてよりも後半に、さらに後期に徐々に遺跡数が増加する傾向が強い。だが、再葬墓はむしろその以前の段階の中期前半から中葉にかけて隆盛し、中期後半からは方形や円形の周溝墓が隆盛する。藤岡市沖Ⅱ遺跡では、前期末から中期初頭の土器埋設土坑27基と集石土坑１基が検出されている。ここでは他の遺跡と比べて、甕形土器の割合が高いのが特徴である。また、集石土坑は底面に

礫を敷き詰めたようにして、その上から土器が横倒しの状態で出土している。この様子は本遺跡の1号集石遺構との類似性があるようにも思えるが、今後の課題としたい。

後者については前述したように、この地域では後期の遺構や遺物が多くなる地域であり、本遺跡周辺でも当時の集落が存在した可能性が高いと言える。その場合、温川との比高が顕著な右岸の縁に当たるⅡ区の部分よりもむしろ、Ⅰ区から現在の国道付近にかけての崖寄りの部分から西に細長く延びる、南側の塩田平の丘陵寄りの段丘面が選ばれたであろう。そして、本遺跡周辺は水田などの耕作地として利用されたものと考えられる。その根拠のひとつとしては、南に深く傾斜するⅠ区の地層の様子からその時期の土層の堆積状況や、国道を挟んで調査区域の南側に位置するガソリンスタンドで豊富な地下水を現在も汲み上げていることなどから、現在の国道付近から南側の塩田平の丘陵寄りに湧水地点が存在し、そこからの流れがこの地域を潤していたものと推定されるからである。この旧水流も現在では丘陵からの崩落土などで埋没してしまっており、地下の水脈としてその痕跡を残している。

この時期は、県内各地で中期後半から引き続いて遺跡数が増加するのは既に述べたところである。赤城山の南麓の粕川流域の荒砥地区、あるいは赤城山の西麓で利根川の左岸に位置する赤城村の樽遺跡、利根川の上流域の沼田盆地周辺、榛名山の西麓で烏川の右岸に位置する倉渕村の水沼遺跡、さらには榛名山の東麓の渋川市の中村遺跡や有馬遺跡、有馬条里遺跡、榛名山南西麓の高崎市の日高遺跡や新保遺跡、碓氷川右岸の松井田町から安中市にかけての地域、鏑川流域の富岡市から藤岡市にかけての地域、早川や渡良瀬川にかけての東毛地域など、遺跡が集中する地域がいくつも認められる。

また、この時期の特徴として人形土器の出土が顕著になる。本来は顔面をかたどった壺は中期後半の時期に再葬墓と伴って東日本の各地の遺跡で出土する。だが、群馬県では後期に顔だけではなく人の形を呈した土器が、中之条町の川端遺跡、渋川市の有馬遺跡や有馬条里遺跡、高崎市の小八木志志貝戸遺跡で出土している。これらは、その全体の形や口縁部の形から再葬墓としての利用は考えにくいものの、日常の生活にも当然使用しにくいことから、何らかの非日常的な用途、特殊な儀式などに対応した可能性が高い。吾妻地域にもこうした痕跡が認められること自体が、はっきりとはしないがこの地域の特徴を垣間見るようである。

古墳時代の土器については、多数の土師器が竪穴住居を中心に出土しているが、須恵器は破片が僅か1片だけの出土であり、この地が少なくとも当時の上毛野地域（「上毛野国」の記載が文献に現れるのは7世紀後半の木簡、「上野国」は律令制度が整う8世紀からの名称）の中心部から見て僻地の立地であったにしても、須恵器が1点も出土しないのは集落遺跡であることにも起因するのであろう。

時期的には7世紀の1号竪穴住居の遺物を除いて、前者が5世紀から6世紀にかけてである。また、1号焼土遺構の周辺を中心に4世紀初頭のいわゆる古式土師の段階である多数の土器の破片が出土している。

遺物の組成としては、土師器の杯・高杯・鉢・甑・甕・壺であり、特に杯と甕が大部分を占める。共に、5世紀後半から6世紀前半の時期の特徴をよく表している遺物である。分類にあたっては、ほぼ同時期の箕郷町下芝天神遺跡の事例を参考としたが、この時期の編年については、坂口一氏（1987、1999）、中沢悟氏が多野郡吉井町の矢田遺跡での編年（1996）について詳細な細分を行っており、坂口編年ではⅡ段階からⅢ段階（1999では3期から4期）、中沢編年では5段階から6段階に相当する。

土師器の分類では、まずは杯が1類と2類とに大きく分けられる。1類は口縁部が内側に湾曲する形状であるのに対して、2類は口縁部が外に反り返る形状である。共に底部は篦削りによる成形で、口縁部は横撫

でにより整えている。高杯については、杯部だけでは杯と見分けがつかないが、台との接合部分や台そのものが出土していれば判断がつく。甕については、器面の成形や厚みなどで杯との違いは一目瞭然であるが、底部に穴があいているだけの甑や転用の甑との区別は難しい。

本遺跡出土の土器は、その胎土や整形の様子から大部分がここ吾妻地区で製作されたものではなく、別の地域、特に西毛地区で製作された可能性が高い。特に、6号竪穴住居の壺は、器面の磨きの精密さや胎土の精製度から、西毛地区の前記した下芝天神遺跡や群馬町三ッ寺Ⅰ遺跡などの出土遺物に類似するものが存在する。外面の器面に削りの後に磨きをかける手法はまったく同じである。

本遺跡から出土した遺物の数量をここにデータ化してみる。まず、すべての遺物をチェックして土器類を選び出し、それらを器種毎に分類してそれぞれの点数と重量を遺構毎にそれぞれ計測する。次に、その数に対して、本遺跡出土の完形品や他の遺跡の同時期の遺物を用いて器種毎の推定重量の平均値を求めた。その結果、杯が約200ｇ、甕が約2,000ｇの重さであることが分かったために、その数値から割り込むことで、遺跡からの出土全体や遺構毎の推定個数を導き出すこととした。さらに、実測個数は推定される全体の大きさの約半分を有する個体を実測対象としており、両者の間に多少の誤差が生じると考えられる。

まず、個人での複数所有が考えられる銘々皿としての杯についてみてみる。

出土場所	点数	重量(g)	個数	実測	
竪穴住居	1452	6541	32.7	43	
内訳					
（1号）	1	5	－	(1)	実測個体ははほぼ完全な形であるが、須恵器である。
（2号）	91	377	1.9	1	
（3号）	123	700	3.5	9	推定個数より実測個数が多い。
（2・3号）					
（4号）	95	424	2.1	2	推定個数と実測個数がほぼ均等。
（5号）	206	898	4.5	9	残りが良い資料が多く、実測個数も多い。
（6号）	936	4137	20.7	21	推定個数と実測個数がほぼ均等。
Ⅰ区	117	505	2.5		
Ⅱ区	409	1639	8.2		
表採	80	199	1		
合計	2058	8884	44.4	43	

竪穴住居から出土分の総重量が、遺跡全体の約72.4％を占める。また、竪穴住居だけでみても、6号竪穴住居が圧倒的に多い。また、全体の半分しか調査出来なかった5号竪穴住居に関しても、全体の推定形状がほぼ同じ規模と考えられる3号竪穴住居と、杯については推定個数と実測個数がほぼ同等の数であることから、未発掘部分がカマド側であることを考えれば倍増する可能性は高い。さらに、重量からの推定個数と実測個数がほぼ同数ということは、個々の竪穴住居での杯の数については10個から20個ぐらいと推定され、その家屋に居住した人数に比例すると考えられる。それに対して、4号竪穴住居が推定個数と実測個数共に極端に少ないということである。これは家屋が焼ける時点で持ち出していた可能性が考えられよう。

次に、甕・甑についてみてみる。

出土地	点数	重量(g)	個数	実測	
竪穴住居	1291	10885	5.48		
内訳					
（1号）	8	45	−		
（2号）	71	959	0.48		
（3号）	115	1228	0.6	9	うち、甑が3点。ただし、完形は少ない。
（2・3号）	1	27			
（4号）	64	1101	0.6		
（5号）	263	1738	0.9	5	うち、甑が2点。
（6号）	769	5787	2.9	5	うち、甑が1点。ただし、完形は少ない。
Ⅰ区	314	1350	0.7		
Ⅱ区	381	3115	1.6		
表採	15	190	0.1		
合計	2001	15540	7.88	19	

個々の竪穴住居が杯の数に比べて、甕や甑の数が少ないのは居住人員共有の調理器具としての意味合いが強いことが起因する。ここでも6号竪穴住居が推定個数と実測個数共に圧倒的に多いが、3号竪穴住居も破片の重量からの推定個数よりも実測個数が多い。あるいは、2号竪穴住居の分も混ざり込んでいる可能性も考えられる。また、5号竪穴住居は推定個数が3号竪穴住居とほぼ同数であるのに対して、実測個数は約半数である。さらに、ここでも4号竪穴住居が推定個数と実測個数共に少ないことが指摘出来る。

その他の資料は、遺構としては1号焼土で1片2ｇ、1号集石で9片42ｇである。

遺物としては縄文土器が12片145ｇ、弥生土器が39片221ｇ、古式土師が187片698ｇ、須恵器が1片3ｇ、陶磁器が2片9ｇである。

前述したように、古墳時代の須恵器と中・近世から現代にかけての陶磁器の出土が極端に少ない。おそらくは集落が形成された6世紀以後は、主としてこの一帯が水田などの生産遺構として利用され、居住空間がかなり離れているために、生活の痕跡を示す遺物の出土が少ないものと考えられる。

また、縄文土器や弥生土器も少なく、遺物図に収録した資料も大部分が破片であり、周辺遺跡の様子と合わせるとあくまで推定であるが、本遺跡には縄文時代から弥生時代までは明確な居住の痕跡は存在しないと考えられる。さらに、弥生時代から古墳時代への移行期に関連しては、住居などの居住空間が存在した可能性は考えられるが、その規模は小さいものだったと思われる。

参考文献

群馬県立歴史博物館編　1981　『常設展示解説』
平野進一　1990　「収蔵資料紹介　吾妻郡吾妻町箱田遺跡出土の前期弥生土器」『県立歴史博物館だより』38　群馬県立歴史博物館
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団編　2004　『群馬の遺跡　3　弥生時代』
坂口　一　1987　「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要』4　財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
坂口　一　1999　「群馬県における古墳時代中期の土器の様相」『東国土器研究』第5号　東国土器研究会
中沢　悟　1996　「矢田遺跡における古墳時代の土器について」『矢田　Ⅵ　古墳時代住居跡編（3）』 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

第2節　石製模造品・玉類

本遺跡からは、3号竪穴住居と5号竪穴住居から勾玉形石製模造品、6号竪穴住居から臼玉が出土している。その数は各1点と数がきわめて少ないものの、いずれも石材は滑石である。

通常、石製模造品や玉類の出土する地点は、副葬品として古墳の石室内から、あるいは祭祀遺構のモニュメント周囲から出土することが多く、竪穴住居内から出土する事例は決して多くない。その竪穴住居も製作跡や住居内のカマド祭祀と考えられるような出土状態を示していることが多い。

県内での出土事例については、以前に西毛地区を田口一郎氏、中毛地区を加部二生氏、東毛地区を杉山秀宏氏らが、最近も深澤敦仁氏が記述している。製作遺構については、女屋和志雄氏が以前まとめている。

特に、これまでの報告では吾妻地域で石製模造品が竪穴住居から出土する事例は数少なく、報告はほとんどなされていないのが現状である。だが、本遺跡を含めて、いくつかの遺跡で報告がされつつある。

後者については、群馬の石製模造品の石材には滑石、蛇紋岩、頁岩などが使用されているが、特に西毛地区で滑石の出土事例が多い傾向がある。これは滑石の産出地が鏑川と神流川に挟まれた御荷鉾山系の三波川帯であり、そこから鏑川流域、さらには利根川流域まで広く流通している現状がある。これに関連して、前原豊氏は利根川を挟んで、西では滑石、東は頁岩などと石材が大きく異なることに注目している。

いずれにしてもそれらの産出地から、利根や吾妻は遠隔地ではあるが、本遺跡の石材が滑石であることは、土器と同様に西毛の影響が強いことを示していると言える。おそらくは、土器と同様に榛名山東麓を回り込んで、吾妻川伝いの経路を辿ったものか、あるいは榛名山西麓の烏川沿いを北上する経路を辿ったかのどちらかであろうが、その先は現状では説明不可能である。もしかすると、大きく西から迂回して信濃国との国境の浅間山東麓を経路に選んだ可能性もまったく無いとは言えないかも知れない。このように、単純に生産地と本遺跡の距離だけではなく、その流通経路には当時の社会情勢も大きく影響したものと考えられる。

では、実際の出土事例をみてみよう。吾妻町内では、東上野遺跡で詳細は不明だが緑色凝灰岩の管玉や滑石の臼玉の未製品が多数出土しているとのことである。長野原町では共に未報告だが、下原遺跡では5～6世紀の土師器が集中する部分から臼玉が数点出土しており、川原湯勝沼遺跡からは5～6世紀の土師器と剣形模造品が出土している。町教育委員会の富田孝彦氏は、両遺跡とも吾妻川に直面した段丘面の自然流路あるいはその周辺で出土していることから水に関連した祭祀遺構と指摘している。

吾妻川と利根川が合流する榛名山北東麓から子持山南東麓では、子持村の黒井峯遺跡と渋川市の中筋遺跡が著名である。黒井峯遺跡では祭祀遺構の種類について、①建物側、②台状の盛り土上（樹木があった可能性があり、③と同一か）、③樹木、④道（分岐点など）、の四つに大きく分類している。中筋遺跡でも、第2次の報告で祭祀遺構が大きいものと小さいものの二つに分類されている。

次に、古墳から出土している事例は、吾妻町では四戸古墳群や生原古墳群、中之条町では平古墳群などがある。『上毛古墳綜覧』では当時で計31ヶ所（274基の11.3%）から出土していると記載されているが、現在では大部分の遺物が四散している状況で、本来の実態を把握することは出来ないが、いずれにしても、総数445基の利根郡での32ヶ所（7.2%）に比べても、その数は少なくはない。

では、県内での集落遺跡での出土状況をみてみると、坂井隆氏が伊勢崎市の八寸大道上遺跡の報告書で、神流川から鏑川にかけての産出地と、東は太田から西は富岡、北は沼田地区に広がるその消費地についての分布図を作成しており、原産地を背景とした製作集団とその消費地への流通の様子を図化している。だが、報告書刊行時の1989年時点での作成であり、その後の報告資料の増加により当時の中心地である西毛地区や東毛地区がさらに多くなるのは勿論、北毛地区や吾妻地区での出土事例も少しずつ増えており、書き改める必要がある。すでに報告されているそれ以外には実際には詳細が未報告なだけで、中之条町の川端遺跡や横

尾遺跡群から臼玉と勾玉、滑石模造品が出土している。

利根地区でも、利根川の小流域で古墳時代の最大集落である後田遺跡では、臼玉が主体であり、石製模造品もあるが、全体的に少ない。むしろ土製の勾玉や丸玉の存在から、現地での需要に対して供給が追いつかない部分を石から土で補ったとも言える。この遺跡は沼田地域に所在した「淵田郷」の中心地とも考えられているが、集落の規模から考えれば、祭祀の頻度が低く感じられる。この他にも、門前Ａ遺跡からは丸玉、沼田市の向田遺跡では管玉、町田小沢Ⅱ遺跡から臼玉、白沢村の寺谷Ⅱ遺跡の18号竪穴住居から多数の剣形の石製模造品が出土しており、寺谷遺跡からは臼玉と勾玉が僅かだが出土している。

赤城山西麓の赤城村では古くは寺内遺跡で、最近では宮田諏訪原遺跡でも巨石を対象として土器と玉類が多数出土している。榛名山東麓の渋川市行幸田畑中遺跡では管玉と臼玉、吉岡町熊野遺跡でも臼玉が僅かだが出土している。副葬品の形で古墳から出土する事例としては、川場村の生品西浦遺跡の古墳群や沼田市の奈良古墳群などから比較的多く出土している。

深澤氏は、石製模造品の生産・流通・消費システムを「古墳副葬用」と「集落祭祀用」の二つに区分し、５世紀代に古墳への副葬と併行して集落での祭祀が開始され、５世紀後半にはその主要な石材が蛇紋岩などから滑石に移行していくという興味深い説明をしている。

では、実際に祭祀の対象としては何が選ばれていたのであろうか。通常は、神の寄り代としての山や巨石などの自然の地形、樹木や動物などを対象とすることが多いが、時期が５世紀後半から６世紀前半にかけての時期であることから、おそらくは、当時活発に活動していた榛名山を鎮めるためだという考えも出されている。特に、先に述べた宮田諏訪原遺跡の報告で、小林修一氏はこの地域は赤城山の西麓に位置するが、赤城山よりもむしろ南西方向に位置する榛名山を真近に見ることが出来る地域であり、宮田諏訪原遺跡を始め、祭祀に関連する遺跡が多いことを指摘している。そして、「５世紀代において、古墳時代における榛名山の最初の爆発となった榛名有馬火山灰（Hr－AA）の噴火・噴出があった」ことから、こうした火山である榛名山の活動は勿論、赤城山も含めてその高く聳える尾根から作り出される雲による夕立や雷などの天候の急変に対しても、人々は脅威を感じていたのではないだろうか。

特に、榛名山は「伊香保峯」とも呼ばれ、万葉集では「伊香保峯に雷な鳴りそねわが上には故はなけども子らによりてぞ」など９首も詠まれており、平安時代後期に編纂された延喜式では、全国の神社を式内社として座社収録しており、群馬県内についても上野十二社のうちの六の宮である榛名神社が鎮座する。一方の赤城山も櫃石の存在など、同じく万葉集に「上毛野黒保の峰呂のくず葉かたかなしけ児等にいや離りくも」と詠まれており、同じく延喜式上野十二社のうち二の宮である赤城神社が鎮座している。

大工原豊氏は、妙義山がダブって見える磯部地区からの蜃気楼の観察記録から、こうした自然現象に対して、古くは縄文時代の人々も妙義山を祭祀の対象にしていたと指摘している。

全国的な範囲でみてみると、玉作りが盛んな中国地方では、古墳時代中期から後期にかけて、石材の選択に大きな変換点が存在する。それは、滑石の利用が中期段階で増加する傾向である。群馬の場合、特に大規模な滑石の産地を抱えており、それを背景とする多野・藤岡地区の優位性は高いと考えられるが、当時の政治状況や経済状況など再考の必要性が高い。

参考文献
女屋和志雄　1988　「群馬県における古墳時代の玉作」『群馬の考古学』　財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
坂井　隆　1989　『八寸大道上遺跡』　財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
田口一郎・加部二生・杉山秀宏　1993　「群馬県の概要」「古墳時代の祭祀　－祭祀関係の遺構と遺物－」　東日本埋蔵文化財研究会
深澤敦仁　2005　「原石の流通と玉作（関東）－群馬県地域の様相に基づく仮説モデルの提示－」「古墳時代の滑石製品　－その生産と消費－」埋蔵文化財研究会
小林　修　2005　「宮田諏訪原遺跡Ⅰ・Ⅱ」　赤城村教育委員会
大工原豊　2005　「天神山遺跡と妙義山　－縄文人の信仰と山との関わり－」「磯部蜃気楼の謎　雷と蜃気楼と神と人」　安中市ふるさと学習館

第3節　焼失住居

住居の構造を考える上で、焼失した痕跡の残る住居の検出は大変貴重である。本遺跡でも４号竪穴住居、５号竪穴住居、６号竪穴住居の３軒と、僅かに検出された３号竪穴住居を含めると、実に半数以上が焼失した痕跡の残る住居である。特に４号竪穴住居と５号竪穴住居の状態は残存状態が比較的良好である。

では、実際にこれまでに報告がなされている遺跡の事例についてみてみることとする。

まず、吾妻町内からみていくと、小泉宮戸遺跡では古墳時代の７軒中無し、奈良時代から平安時代の26軒中１軒、小泉天神遺跡では７軒中無し、諏訪前遺跡では33軒中３軒、前畑遺跡では24軒中１軒、郷原遺跡では平安時代の２軒中１軒、宿遺跡では古墳時代の１軒中無しである。長野原町の向原遺跡では古代の10軒中３軒、林宮原Ⅱ遺跡では古墳時代の１軒中１軒、平安時代の６軒中無し、横壁勝沼遺跡では平安時代の１軒中１軒、西久保遺跡では６軒中無し、花畑遺跡では３軒中無し、未報告ながら林檎木Ⅱ遺跡では平安時代の20数軒中10軒以上である。草津町の井堀遺跡では１軒中無し。六合村の熊倉遺跡では平安時代の１軒中無し。嬬恋村の干俣前田Ⅲ遺跡では平安時代の１軒中１軒、干俣前田Ⅳ遺跡では平安時代の１軒中無し。中之条町の五十嵐遺跡では平安時代の11軒中３軒、宿割遺跡では古墳時代の１軒中無し、長岡Ⅱ遺跡では奈良時代の１軒中無し、七日市遺跡では古墳時代の13軒中１軒、平安時代の５軒中１軒。中沢遺跡では古墳時代から平安時代の30軒中無し、桃瀬遺跡では古墳時代から平安時代の８軒中無しである。吾妻東村では報告例が無い。高山村の新田西沢遺跡では平安時代の１軒が焼失住居である。

利根川の上流域である利根地域をみてみると、水上町の東原遺跡では平安時代の７軒中無し、月夜野町の洞Ⅰ遺跡では平安時代の１軒中無し、洞Ⅲ遺跡では平安時代の５軒中無し、深沢遺跡では２軒中無し、下牧小竹遺跡では１軒中無し、大竹遺跡では平安時代の11軒中１軒だけ、高平遺跡では５軒中無し、門前A遺跡では18軒中１軒、上石倉遺跡では１軒中無し、村主遺跡で奈良時代の14軒中無し、平安時代の17軒中無し、梨の木平遺跡で１軒中無し、梨の木平C遺跡では３軒中無し、諏訪遺跡では古墳時代の６軒中１軒、後田遺跡では古墳時代から平安時代の290軒中無しである。新治村の東峰須川雷電遺跡では平安時代の３軒中無し、竹改戸遺跡では３軒中無し。川場村の生品西浦遺跡では20軒中無し、高野原遺跡では古墳時代の８軒中５軒と割合が高い。白沢村の寺谷遺跡では古墳時代の５軒中無し、寺谷Ⅱ遺跡では古墳時代の12軒中２軒、奈良時代から平安時代の８軒中２軒。沼田市大釜遺跡では30軒中無し、戸神諏訪遺跡では古墳時代の70軒中１軒だけ、奈良時代から平安時代の98軒中６軒。戸神諏訪Ⅱ遺跡では古墳時代の11軒中１軒、平安時代の37軒中無し。戸神諏訪Ⅲ遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期の28軒中８軒と多く、平安時代の100軒中無し、戸神諏訪Ⅳ遺跡では古墳時代から平安時代の16軒中無し、戸神諏訪Ⅴ遺跡では古墳時代から平安時代の47軒中無し、稲荷遺跡では古墳時代の５軒中１軒、平安時代の３軒中無し、石墨遺跡では28軒中１軒だけ、向田遺跡では古墳時代から平安時代の27軒中１軒だけ、岡谷毛勝遺跡では奈良時代から平安時代の10軒中無し、町田手古叉遺跡では古墳時代から平安時代の45軒中１軒だけ、町田小沢遺跡では古墳時代から平安時代の１８軒中無し、町田十二原遺跡では古墳時代から平安時代の54軒中１軒だけ、奈良原遺跡では平安時代の２軒中無し、上川田下原遺跡では古墳時代から平安時代の16軒中無し、下川田平井遺跡では古墳時代から平安時代の15軒中無し、佐山向原遺跡では２軒中無し、下清水遺跡では古墳時代の４軒中無し、十王曲遺跡では平安時代の12軒中無し、川端遺跡では平安時代の23軒中１軒だけ、西遺跡では平安時代の１軒中無し、赤坂遺跡では平安時代の９軒中１軒、菅戸田Ⅱ遺跡では平安時代の２軒中無し、中原遺跡では平安時代の３軒中無し、奈良田向遺跡では平安時代の13軒中無しである。

赤城山西麓の昭和村糸井宮前遺跡では古墳時代前期の35軒中13軒、後期から平安時代の34軒中無し、大貫原遺跡では平安時代の６軒中無し、森下中田遺跡では古墳時代から平安時代の82軒中無し。赤城村の勝保沢中ノ山遺跡では古墳時代の５軒中２軒、勝保沢剃刀窪遺跡では古墳時代の２軒中２軒、中畦遺跡では平安時代の１軒中無し、諏訪西遺跡では古墳時代が１軒中無し、上三原田大宮遺跡では奈良時代から平安時代の28軒中１軒だけ、上三原田中坪前遺跡では奈良時代から平安時代の８軒中無し、三原田城遺跡では１軒中無し、三原田三反田遺跡では奈良時代から平安時代の37軒中無し、三原田諏訪上遺跡では古墳時代の22軒中８軒、

津久田華蔵寺遺跡では平安時代の１軒中無し、津久田桜ノ木遺跡では古墳時代の１軒中１軒、溝呂木大御堂遺跡では平安時代の８軒中無し、樽舟戸遺跡では古墳時代の８軒中１軒、南雲寺後遺跡では平安時代の１軒中無し、宮田廻ノ木遺跡では古墳時代の１軒中無し、寺内遺跡では古墳時代の10軒中１軒、見立峯Ⅰ遺跡では奈良時代から平安時代の８軒中無し、見立峯Ⅱ遺跡では奈良時代から平安時代の７軒中１軒、滝沢日向掘遺跡では古墳時代の３軒中無し、平安時代の10軒中無し。北橘村の分郷八崎遺跡では奈良時代から平安時代の44軒中１軒だけ、真壁向山遺跡で平安時代の５軒中無し、谷津遺跡では平安時代の１軒中無し、芝山遺跡では平安時代の21軒中無し、箱田遺跡群では平安時代の46軒中無しである。

吾妻川と利根川が合流する地域での子持村の黒井峯遺跡では古墳時代の17軒中17軒すべて、北牧大境遺跡では８軒中無し、白井二位屋遺跡では奈良時代から平安時代の69軒中１軒だけ、白井南中道遺跡では奈良時代から平安時代の62軒中１軒だけ、白井大宮遺跡では平安時代の３軒中無しである。

榛名山の東麓である渋川市の有馬遺跡では古墳時代前期の24軒中１軒、奈良時代から平安時代の164軒中２軒。有馬条里遺跡では42軒中１軒、有馬久宮間戸遺跡では古墳時代から平安時代の９軒中無し、有馬中井遺跡では平安時代の２軒中１軒、有馬廃寺遺跡では平安時代の５軒中無し、石原清水田Ⅱ遺跡では奈良時代から平安時代の５軒中無し、石原東遺跡では奈良時代から平安時代の51軒中１軒だけ、石原西浦遺跡では奈良時代から平安時代の６軒中無し、石原久保見道遺跡では８軒中無し、石原手川遺跡では平安時代の１軒中無し、田中遺跡では古墳時代から平安時代の36軒中３軒、行幸田畑中Ｂ遺跡では51軒中１軒だけ、畑中Ｃ遺跡では奈良時代から平安時代の２軒中１軒、行幸田山遺跡では古墳時代から平安時代の３軒中無し、中筋遺跡では古墳時代から平安時代の21軒中３軒。半田中原・南原遺跡では奈良時代から平安時代の162軒中１軒だけ、半田中原遺跡では平安時代の３軒中無し、半田南原Ⅰ遺跡では平安時代の１軒中無し、半田薬師遺跡では平安時代の14軒中無し、半田薬師Ｋ遺跡では平安時代の４軒中無し、半田工業団地遺跡では奈良時代から平安時代の２軒中無し、半田築地遺跡では１軒中無し、半田剣城遺跡では平安時代の３軒中無し、八木原沖田遺跡群では古墳時代の４軒中無し、奈良時代から平安時代の107軒中２軒だけ。梳屋遺跡では古墳時代から平安時代の３軒中無し、高見戸遺跡では奈良時代から平安時代の２軒中無し、空沢遺跡では奈良時代から平安時代の86軒中１軒だけ、空沢西遺跡では平安時代の２軒中無し、諏訪ノ木遺跡では平安時代の１軒中無し、諏訪ノ木Ⅱ遺跡では奈良時代から平安時代の20軒中１軒、諏訪ノ木Ⅴ遺跡では奈良時代から平安時代の40軒中無し、諏訪ノ木Ⅹ遺跡では平安時代の３軒中無し、発京遺跡では平安時代の２軒中無し、寺畑遺跡では奈良時代から平安時代の７軒中無し、若宮遺跡では奈良時代から平安時代の10軒中無し、大久保Ｂ遺跡では奈良時代から平安時代の６軒中無しである。吉岡町の大久保遺跡では古墳時代から平安時代の119軒中無し、七日市遺跡では古墳時代の48軒中無し、金竹西遺跡では古墳時代から平安時代の93軒中２軒だけ、金竹西Ａ遺跡では奈良時代から平安時代の２軒中無し、大下遺跡では奈良時代の１軒中無し、熊野遺跡では古墳時代から平安時代の43軒中無し、滝沢遺跡では平安時代の５軒中無し、下八幡南遺跡では奈良時代から平安時代の６軒中無し、善徳遺跡では平安時代の３軒中無し、中御所遺跡では古墳時代から平安時代の13軒中無し、見柳東遺跡では古墳時代の62軒中無し、畑中遺跡では平安時代の６軒中無し、中町遺跡では奈良時代から平安時代の５軒中無し、前原遺跡では６軒中無し、沼南遺跡では奈良時代から平安時代の68軒中無し、長久保大畑遺跡では３軒中無し、新田入口遺跡では古墳時代から平安時代の39軒中無し。樽東村の御堀遺跡では奈良時代から平安時代の36軒中無し、多屋遺跡では平安時代の５軒中無し、倉海戸遺跡では平安時代の２軒中無し、別分八幡下遺跡では平安時代の５軒中無し、清水貝戸遺跡では平安時代の４軒中無しである。

以上、吾妻地区から北毛地区、それに渋川地区をみてきたが、大部分の遺跡では１軒あるかないかであるが、弥生時代から古墳時代前期にかけて沼田市の戸神諏訪遺跡は非常に高い。同じように三原田諏訪上遺跡では古墳時代の２２軒中８軒と高い割合であり、本遺跡をはじめ長野原町の各遺跡も割合が高いと言える。県内の他地域との比較を実施していないために、あくまで利根・吾妻地域の傾向としては一部の地域、あるいは一時期に偏る傾向は読み取れる。その理由については明らかではないが、今後の課題としたい。

なお、上記した各遺跡での焼失住居の詳細を確認した発掘報告書などの参考文献は多数のため、別の機会に収録することとし、ここでは省略する。

第4節　石組カマド

カマドは、それまでの炉に替わって室内の調理場となる施設である。大陸から伝えられたとされる新技術のひとつで、熱効率を格段に高めることを目的としている。群馬県内では、5世紀中頃に竪穴住居の壁に付設される形で、急速に取り入れられていく。

本遺跡ではカマドが検出された5軒のうち、1号、3号、4号、6号の4軒もの竪穴住居がそれぞれ石をカマドの袖や天井部、それに煙道部などの構築材に利用している。カマドの掘り方しか残っていなかった2号竪穴住居についても、拡張により3号竪穴住居になったと考えて、さらに、時期と規模から見て3号竪穴住居とほぼ同等と考えられる5号竪穴住居に、北壁あるいは東壁にカマドが存在すると想定するならば、本遺跡のすべての竪穴住居が何らかの形で石をカマドの構築の材料として使用していることとなる訳である。

吾妻地区では、石を使用したカマドとして著名な吾妻町の姉山遺跡が以前から知られており、その規模も袖部分から煙出し部分まで約2mと大きく、ほぼ石組みの構造である。

筆者も子持村の白井南中道遺跡の発掘調査中に、2区52号竪穴住居など多数の出土を確認しており、長野原町楡木Ⅱ遺跡でも、同様に多数の平安時代の竪穴住居の大半から石組カマドが検出されている。

高橋氏は同様の構造を持つカマドについて、吾妻町小泉宮戸遺跡の報告の中でまとめており、特に19号・26号竪穴住居を「石蓋石組煙道カマド」という名称を付け、同様の事例として、吾妻町東上野遺跡、同町小泉天神遺跡、同町姉山遺跡、子持村白井二位屋遺跡、昭和村森下中田遺跡、県外の事例として長野県佐久市跡部儘田遺跡をあげている。これは暖房効果を狙った構造とも思われ、朝鮮半島にみられる「オンドル」に近い印象を受けるとし、さらにその分布は吾妻・利根・沼田などの山間部に多く、冬期の厳しい気候に適応した地域性とも推定されるとしている。

この他に、カマドの構築の際の袖などの基礎作りの材料としては土器が、古墳や寺院などに近接する特定の地域では埴輪や瓦が転用されている事例が多い。そこで、粘土だけの構造ではなく、石を利用するカマドについて、下記の通りに分類の基準を設定して、これまでの報告事例を各発掘報告書から集計してみる。

Ⅰ類　袖から燃焼部側面、さらに煙道部から煙出し部分にまで石を使用。天井石とも言うべき天蓋有り。

Ⅱ類　両袖とそれに架かる鳥居状だけ。

これらは、上野国分僧寺・尼寺中間地域の報告の中で、黒沢はるみ氏が分類したA～Eの5類のうち、C類がⅡ類に、D類がⅠ類に相当する。

ここで、北毛地区と吾妻地区での焼失住居の発掘調査事例を報告書から集成することとする。

吾妻町の小泉宮戸遺跡では古墳時代の7軒中無し、奈良時代から平安時代の26軒中Ⅰ類5軒、Ⅱ類1軒。小泉天神遺跡では奈良時代から平安時代の7軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類1軒。諏訪前遺跡では平安時代の33軒中Ⅰ類4軒、Ⅱ類4軒。前畑遺跡では古墳時代から平安時代の24軒中Ⅱ類11軒、郷原遺跡では平安時代の2軒中Ⅰ類1軒、宿遺跡では古墳時代の1軒中無し。長野原町の林楡木Ⅱ遺跡では未報告ながら平安時代の大部分が石組、向原遺跡では平安時代の10軒中Ⅰ類3軒、Ⅱ類5軒。林宮原Ⅱ遺跡では古墳時代の1軒中Ⅰ類1軒、平安時代の6軒中Ⅰ類4軒、Ⅱ類1軒と割合が高い。横壁勝沼遺跡では平安時代の1軒中Ⅱ類1軒。西久保遺跡では平安時代の6軒中無し、花畑遺跡では平安時代の3軒中無し、川原湯勝沼遺跡では平安時代の3軒中Ⅰ類2軒。草津町の井堀遺跡では1軒中Ⅱ類1軒。六合村の熊倉遺跡では平安時代の1軒中Ⅱ類1軒。嬬恋村の干俣前田Ⅲ遺跡では平安時代の1軒中Ⅰ類1軒、干俣前田Ⅳ遺跡では平安時代の1軒中Ⅰ類1軒。中之条町の七日市遺跡では古墳時代の13軒中Ⅱ類2軒、平安時代の5軒中Ⅱ類1軒。中沢遺跡では古墳時代から平安時代の30軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類3軒。桃瀬遺跡では古墳時代から平安時代の8軒中Ⅱ類1軒。五十嵐

遺跡では平安時代の11軒中Ⅱ類3軒、宿割遺跡では古墳時代の1軒中無し、長岡Ⅱ遺跡では奈良時代の1軒中Ⅰ類1軒である。吾妻東村は報告無し。高山村の新田西沢遺跡では平安時代の1軒中Ⅰ類1軒である。

利根川の上流域である利根地域をみてみると、水上町の東原遺跡では平安時代の7軒中Ⅱ類2軒。月夜野町の洞Ⅰ・洞Ⅲ遺跡では平安時代の6軒中無し、深沢遺跡では2軒中無し、下牧小竹遺跡では1軒中Ⅱ類1軒、大竹遺跡では平安時代の11軒中Ⅱ類3軒、高平遺跡では平安時代の5軒中Ⅱ類2軒、門前A遺跡では古墳時代から平安時代の18軒中Ⅱ類6軒、上石倉遺跡では古墳時代から平安時代の1軒中Ⅰ類1軒、村主遺跡では奈良時代の14軒中無し、平安時代の17軒中Ⅰ類1軒。梨の木平遺跡では1軒中Ⅰ類1軒、梨の木平C遺跡では3軒中無し、諏訪遺跡では古墳時代の6軒中Ⅰ類2軒、Ⅱ類1軒。新治村の東峰須川雷電遺跡では平安時代の3軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類1軒。川場村の生品西浦遺跡では20軒中Ⅰ類4軒、Ⅱ類1軒。高野原遺跡では古墳時代の8軒中無し。白沢村の寺谷遺跡では古墳時代の5軒中Ⅰ類1軒、寺谷Ⅱ遺跡では古墳時代の12軒中無し、奈良時代から平安時代の8軒中Ⅰ類2軒、Ⅱ類2軒。沼田市大釜遺跡では30軒中Ⅱ類4軒、戸神諏訪遺跡では奈良時代から平安時代の98軒中Ⅰ類19軒、Ⅱ類15軒。戸神諏訪Ⅱ遺跡では古墳時代の11軒中Ⅰ類2軒、Ⅱ類3軒、平安時代の37軒中Ⅰ類9軒、Ⅱ類14軒。戸神諏訪Ⅲ遺跡では平安時代の100軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類28軒。戸神諏訪Ⅳ遺跡では古墳時代から平安時代の16軒中Ⅰ類4軒、Ⅱ類2軒。戸神諏訪Ⅴ遺跡では古墳時代から平安時代の47軒中Ⅰ類10軒、Ⅱ類3軒。稲荷遺跡では古墳時代から平安時代の8軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類1軒。石墨遺跡では28軒中Ⅰ類2軒、Ⅱ類13軒。向田遺跡では27軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類2軒。岡谷毛勝遺跡では奈良時代から平安時代の10軒中Ⅰ類2軒、町田手古又遺跡では古墳時代から平安時代の45軒中Ⅰ類14軒、Ⅱ類2軒。町田小沢遺跡では古墳時代から平安時代の18軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類5軒。町田十二原遺跡では古墳時代から平安時代の54軒中Ⅰ類4軒、Ⅱ類10軒。奈良原遺跡では平安時代の2軒中無し、上川田下原遺跡では16軒中Ⅰ類2軒、Ⅱ類7軒。下川田平井遺跡では古墳時代から平安時代の15軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類1軒。佐山向原遺跡では2軒中無し、下清水遺跡では4軒中無し、十王曲遺跡では平安時代の12軒中Ⅰ類5軒、Ⅱ類2軒。川端遺跡では平安時代の23軒中Ⅰ類6軒、Ⅱ類6軒。奈良田向遺跡では平安時代の13軒中Ⅱ類5軒、西遺跡では平安時代の1軒中無し、赤坂遺跡では平安時代の9軒中Ⅱ類1軒、背戸田Ⅱ遺跡では平安時代の2軒中無し。

赤城山西麓の昭和村糸井宮前遺跡では古墳時代から平安時代の69軒中Ⅰ類5軒、Ⅱ類8軒。大貫原遺跡では平安時代の6軒中Ⅱ類1軒、森下中田遺跡では古墳時代から平安時代の82軒中Ⅰ類26軒、Ⅱ類11軒。赤城村の勝保沢剃刀窪遺跡では古墳時代の2軒ともⅠ類、中畦遺跡では平安時代が1軒中無し、諏訪西遺跡では古墳時代が1軒中無し、上三原田大宮遺跡では奈良時代から平安時代の28軒中Ⅰ類7軒、Ⅱ類7軒。上三原田中坪前遺跡では奈良時代から平安時代の8軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類4軒、三原田城遺跡では1軒中Ⅰ類1軒、三原田三反田遺跡では奈良時代から平安時代の37軒中Ⅰ類1軒、三原田諏訪上遺跡では古墳時代の22軒中無し、津久田華蔵寺遺跡では平安時代の1軒中無し、津久田桜ノ木遺跡では古墳時代の1軒中無し、溝呂木大御堂遺跡では平安時代の8軒中Ⅰ類4軒、Ⅱ類2軒。栂舟戸遺跡では古墳時代の8軒中無し、南雲寺後遺跡では平安時代の1軒Ⅰ類、宮田瘤ノ木遺跡では古墳時代の1軒中無し、寺内遺跡では古墳時代の10軒中Ⅰ類5軒、見立峯Ⅰ遺跡では奈良時代から平安時代の8軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類2軒。見立峯Ⅱ遺跡では奈良時代から平安時代の7軒中Ⅱ類1軒、滝沢日向掘遺跡では古墳時代の3軒中Ⅰ類1軒、平安時代の10軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類1軒。北橋村の分郎八崎遺跡では44軒中Ⅱ類8軒、真壁向山遺跡では平安時代の5軒中Ⅱ類3軒、谷津遺跡では平安時代の1軒中無し、芝山遺跡では平安時代の21軒中Ⅱ類2軒、箱田遺跡群では平安時代の46軒中Ⅰ類6軒、Ⅱ類2軒である。

子持村の黒井峯遺跡では古墳時代の17軒中Ⅱ類14軒と割合が高い。北牧大境遺跡では8軒中Ⅱ類1軒、白井二位屋遺跡では69軒中Ⅰ類9軒、Ⅱ類16軒。白井南中道遺跡では奈良時代から平安時代の62軒中Ⅰ

井二位屋遺跡では69軒中Ⅰ類9軒、Ⅱ類16軒。白井南中道遺跡では奈良時代から平安時代の62軒中Ⅰ類14軒、Ⅱ類10軒。白井大宮Ⅱ遺跡では平安時代の3軒中無しであり、おそらくは白井地区を中心に堆積している軽石の崩落をも防ぐ目的もあったと考えられる。

渋川市の有馬遺跡では奈良時代から平安時代の164軒中Ⅰ類6軒、Ⅱ類34軒。有馬条里遺跡では42軒中Ⅱ類1軒と僅かである。石原清水田Ⅱ遺跡では奈良時代から平安時代の5軒中無し、石原東遺跡では51軒中Ⅰ類5軒、Ⅱ類3軒。石原西浦遺跡では奈良時代から平安時代の6軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類3軒。石原久保見道遺跡では8軒中Ⅱ類2軒、石原手川遺跡では平安時代の1軒中無し、有馬中井遺跡では平安時代の2軒中無し、有馬廃寺では5軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類1軒。有馬久宮間戸遺跡では9軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類が2軒。田中遺跡では36軒中Ⅰ類3軒、Ⅱ類2軒。行幸田畑中B遺跡では51軒中Ⅰ類が4軒、Ⅱ類が9軒。行幸田山遺跡では古墳時代から平安時代の3軒中Ⅰ類1軒、中筋遺跡では古墳時代から平安時代の21軒中Ⅰ類2軒、Ⅱ類1軒。半田中原・南原遺跡では162軒中Ⅰ類62軒、Ⅱ類50軒と非常に多い。半田中原遺跡では平安時代の3軒中Ⅱ類1軒、半田南原Ⅰ遺跡では平安時代の1軒中Ⅱ類1軒、半田薬師遺跡では平安時代の14軒中Ⅱ類3軒、半田薬師K遺跡では平安時代の4軒中無し、半田工業団地遺跡では2軒中Ⅰ類1軒、半田祭地前遺跡では1軒中無し、半田剣城K遺跡では平安時代の3軒中無し、八木原沖田遺跡群では古墳時代の4軒中Ⅱ類1軒、奈良時代から平安時代の107軒中Ⅰ類2軒、Ⅱ類7軒。祇屋遺跡では古墳時代から平安時代の3軒中Ⅰ類1軒、高貝戸遺跡では奈良時代から平安時代の2軒中Ⅰ類1軒、空沢遺跡では奈良時代から平安時代の86軒中Ⅰ類7軒、Ⅱ類3軒。諏訪ノ木遺跡では平安時代の1軒中無し、諏訪ノ木Ⅱ遺跡では奈良時代から平安時代の20軒中Ⅰ類2軒、諏訪ノ木Ⅴ遺跡では奈良時代から平安時代の40軒中Ⅰ類9軒、Ⅱ類14軒。諏訪ノ木Ⅹ遺跡では平安時代の3軒中無し、発京遺跡では平安時代の2軒中Ⅱ類2軒、寺畑遺跡では奈良時代から平安時代の7軒中無し、若宮遺跡では奈良時代から平安時代の10軒中Ⅱ類1軒、大久保B遺跡では奈良時代から平安時代の6軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類4軒。吉岡町の大久保遺跡では古墳時代から平安時代の119軒中Ⅰ類6軒、Ⅱ類20軒。七日市遺跡では古墳時代の48軒中Ⅰ類3軒、Ⅱ類5軒。金竹西遺跡では古墳時代から平安時代の93軒中Ⅱ類8軒。中町遺跡では奈良時代から平安時代の5軒中無し、大下遺跡では奈良時代の1軒中無し。熊野遺跡では古墳時代から平安時代の43軒中Ⅱ類1軒だけ。滝沢遺跡では平安時代の5軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類3軒。下八幡南遺跡では奈良時代から平安時代の6軒中Ⅱ類1軒。善徳遺跡では平安時代の3軒中無し、中御所遺跡では古墳時代から平安時代の13軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類5軒。見柳東遺跡では古墳時代の62軒中Ⅰ類3軒、Ⅱ類5軒。畑中遺跡では平安時代の6軒中Ⅱ類2軒、沼南遺跡では平安時代の68軒中Ⅰ類15軒、Ⅱ類3軒。長久保大畑遺跡では3軒中Ⅱ類3軒。新田入口遺跡では古墳時代から平安時代の39軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類3軒。榛東村の御堀遺跡では奈良時代から平安時代の36軒中無し。多屋遺跡では平安時代の5軒中Ⅰ類2軒、倉海戸遺跡では平安時代の2軒中Ⅱ類1軒、別分八幡下遺跡では平安時代の5軒中Ⅰ類1軒、Ⅱ類2軒。清水貝戸遺跡では平安時代の4軒中無しである。

今回、対象とした地域では一部に土器の再利用が見られるものの、石の利用が多い傾向が読み取れる。また、土器などの再利用はほとんど見られない。これがこの地域の特徴なのかどうか、今後は県内全体でみてみたい。また、通常は住居の廃絶の際にカマドも壊していく可能性もあるために、カマド本来の構造がそのまま残っているのは火山活動や火災などの不可抗力により、生活していた状態そのまま放置しなければならなかった場合に限られるであろう。そのため、Ⅰ類やⅡ類の数が本来は多かったと推定される。

なお、上記した各遺跡でのカマドの詳細を確認した発掘報告書などの参考文献は多数のため、別の機会に収録することとし、ここでは省略する。

参考文献

黒沢はるみ　1987　「第2項　カマドについて」『上野国分僧寺・尼寺中間地域（2）』　財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

第５節　吾妻町の古墳

吾妻川沿いの左右両岸の河岸段丘には、後世の開発によりかなりの数の古墳が壊されてきたものの、現在でもいくつかの古墳が残存している。

県内の横穴式石室の集成の際に諸田康成氏がまとめており、（吾妻郡全体の総数を247基と間違えており、上流域での計７基（長野原町２基、六合村無し、草津町１基、嬬恋村４基）の記載も全くなされていないものの、）これがこの地区についての最新の概要である。

第４表は、1938（昭和13）年に群馬県が総力を挙げて県内の古墳の調査を一斉に行った結果をまとめた古墳台帳である『上毛古墳総覧』から吾妻郡部分を転載したものである。これによれば、群馬県内の総数は8,423基、そのうち吾妻郡内には274基（3.3%）が確認されたとなっている。もちろん、中世の塚や自然の流れ山などを古墳と見間違っている事例もあるが、逆に削平などにより平らになってしまっていたことで当時の確認から漏れてしまっていた事例も最近の発掘調査でいくつか検出されており、報告時に「総覧漏れ」と記載されている。さらに、一度も確認されないままに後世の開発行為の中に消し去られたものも当然あるものと考えられるが、その数は不明としか言えない。むしろ約１万基と言われる実際の数の増減にさほどの影響は無いものと考えられる。なお、総覧を作成する際の調査台帳を確認すると、古墳の通称や地名などに記載ミスが幾つかある。おそらくは漢字の読み違いなどが原因と考えられ、本来の資料を直接確認することが必要である。古墳の形状についても、前方後円墳と記載されているものの大部分は二基の円墳の誤認と考えられており、吾妻地区には明確な前方後円墳は存在しないようである。

吾妻郡の範囲は、地形では西は鳥居峠、北は上ノ倉山、南は草坂峠、東は北側の小野子山と南側の榛名山の裾野が接近する小野上地区であり、利根川との合流部分側から見れば、まさに袋小路の盆地地形を呈している。そしてそのほぼ中心部分を西から東に流れる吾妻川が南北に分断する形で存在している。さらに西半分は吾妻渓谷により寸断された形となっており、まさに吾妻地区は西と東に大きく分かれることとなる。

一方、吾妻川は利根川に子持村と渋川市東町の地点で合流するが、そこまでの全長約76.2kmにも及ぶ流域には周囲の山々が迫り、東西に細長く幅が狭い河岸段丘が何ヶ所にも形成されている。その中でも、中之条町の伊勢町地区は広い河岸段丘が発達しており、この地域で最も広い沖積地を形成している。このため、生産基盤はこの地域を中心と考えられ、同様に広い河岸段丘を持つ右岸の吾妻町の太田地区にも想定される。

吾妻町内には174基（県内での割合2.1%、郡内での割合63.6%）で、中之条町の65基よりも多い。内訳は、岩島46基（0.5%、16.8%）、原町80基（0.9%、29.2%）、太田36基（0.4%、13.1%）、坂上12基（0.1%、4.4%）である。だが実際には、坂上地区に存在するとされているものについては、これまで発掘調査が実施された事が無く、そのためにいずれも古墳との確認は得られていない。第８図の分布図では満行塚古墳と境野古墳の２ヶ所だけを掲載したが、それは県の文化財システムの地図に収録されているのが理由であり、古墳と断定している訳ではなく、その確認も今後の課題である。

また、下流域の渋川市や子持村では６世紀の２度の榛名山の火山活動による噴出物である、軽石や火山灰に覆われた遺跡が多数存在する。中には墳丘部が完全に覆われてしまってその存在が把握出来なかった古墳がいくつもあり、有瀬古墳群や中ノ峯古墳などがその代表例である。同様の事例やこの地域の低位段丘面を覆う浅間山の泥流の下に隠れている可能性も大いにあり、今後も発見される可能性もある。

吾妻町内では、10基単位での大規模な古墳群と、２基以上だが分散している小規模な古墳群に大きく区分できる。近接する四戸古墳群は前者の大規模に相当し、総覧の段階で24基が確認されており、そのうちの４基が1964年と1967年に発掘調査されており、いずれも副葬品も少ないが小さな円墳であるが、６世紀前半から

7世紀の前半にかけての時期のものである。その南側の生原地区の生原古墳群では、その中の岩島村42号墳と新たに確認された（漏れ）1号墳の2基が発掘調査されている。それ以外に、原町地区の下之町古墳群に下郷古墳群、太田地区の岩井古墳群と植栗古墳群、それに小泉古墳群などがある。一方、後者に該当するのは左岸の岩島地区に存在する古墳である。町道の拡幅工事に伴い一部が発掘調査された岩島4号墳は、推定直径が下段で17m、上段で11mの二段構築の円墳で、墳丘の構造は「積石塚」的な要素が強く、構築年代は7世紀前半と推定されている。「積石塚」的な構造は、椎名山の西～南麓にかけての渋川周辺や高崎西部周辺に多く見られ、渡来系の人々との関係が想定されている。それ以外には吾妻川の支流である名久田川流域に平古墳群、四万川流域に小川古墳群や寺久保古墳群が存在する。

吾妻地区の古墳は、最も古いものが石ノ塔古墳で5世紀末と考えられている。この古墳は1783（天明3）年の浅間泥流に覆われていたが、主体部が石棺状の竪穴式石室であり、副葬品には直刀・鎌・鉄斧などが出土している。また、机古墳も同様の竪穴式石室であり、管玉が出土している。

その他の大部分は6世紀後半から7世紀後半にかけての時期のものであり、いわゆる群集墳と呼ばれるものである。前述したようにその規模も小さく数基単位で形成されており、その立地も平地を取り巻く丘陵上や斜面に築造されることが多く、河川の合流地域に形成された段丘、おそらくは比較的広い平地を生産域として開発すると共に、その一角に集落を、さらに周囲の丘陵に墓域を設定した訳である。

吾妻町原町の大宮厳鼓神社には6世紀前半から中葉にかけての仿製の獣形鏡1面と蹶手大刀1振が伝来されており、これらが本来は古墳の副葬品であったと考えられており、この地域の古墳からの出土と考えるのが妥当であろう。

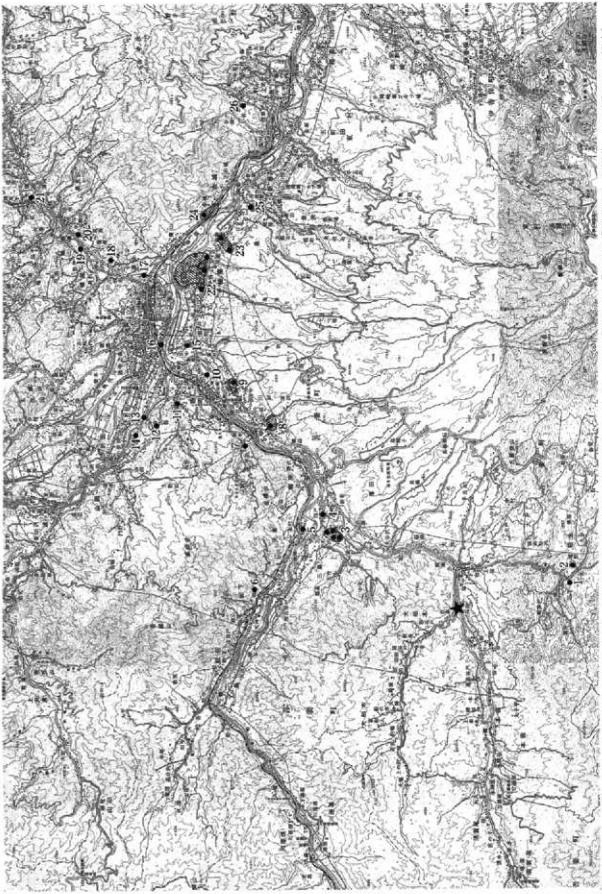
吾妻町の古墳の分布の西端は岩島地区の机古墳であり、吾妻渓谷から先の上流域には、綜覧には記載されているが、明確な古墳と確認されたものは無い。だが、最近古墳時代の竪穴住居が林の宮原遺跡や下原遺跡などから検出しており、今後も発見される可能性もあることから、いずれは古墳そのものも検出されることがあるかも知れない。

いずれにしても、発掘調査が実施された古墳は少なく、形状や年代など古墳の実情が明確ではない資料も多いことから、今後の研究の進展を待ちたい。

第37図は、吾妻町・中之条町地域の主な古墳・古墳群の分布図であり、下の表は、その番号に対応する古墳・古墳群の名称である。

1	満行塚古墳（吾妻町）	坂上村5号	
3	生原古墳群（吾妻町）	岩島村32、33、36～38、42、43号	
5	岩島4号墳（吾妻町）	岩島村4号	
7	諏訪前遺跡（吾妻町）	綜覧漏れ（平成7年発見）	
9	下郷古墳群（吾妻町）	原町67～69号	
11	在家古墳群（吾妻町）	原町54～56号	
13	小川古墳群（中之条町）	中之条町25、31～37号	
15	岩井古墳群（吾妻町）	太田村1～21号	
17	只則古墳群（中之条町）	中之条町13～16号	
19	横塚古墳（中之条町）	名久田村1号	
21	名久田8号墳（中之条町）	名久田村8号	
23	小泉古墳群（吾妻町）	太田村25、26、34号	
25	小泉天神古墳群（吾妻町）	太田村27号	
2	境野塚古墳（吾妻町）	坂上村6号	
4	四戸古墳群（吾妻町）	岩島村13～31、34、35、39～41号	
6	机古墳（吾妻町）	綜覧漏れ（昭和39年発見）	
8	川戸古墳群（吾妻町）	原町29～53、58～61、70～72、78号	
10	下之町古墳群（吾妻町）	原町2～10、12～14号	
12	寺久保古墳群（吾妻町）	原町25～28号	
14	笛吹塚古墳（中之条町）	澤田村1号	
16	石ノ塔古墳（中之条町）	中之条町18、19号	
18	小塚古墳群（中之条町）	名久田村13～18号	
20	平古墳群（中之条町）	名久田村2～7、9、11、12号	
22	植栗古墳群（吾妻町）	太田村22～24、35、36号	
24	市城古墳群（中之条町）	中之条町1～11号	
26	御塚（小野上村）	小野上村1号	

参考文献については、第2章第3節を参照してください。



第37図　吾妻町・中之条町地域の主要な古墳・古墳群分布（国土地理院：５万分の１「中之条」・「渋川」・「榛名山」・「軽井沢」を編集、10万分の１に縮小）

第4表　「上毛古墳綜覧」吾妻郡一覧

町村名	古墳番号	古墳名称	形状	現状	発掘の有無	大字	所在地字	番地	地目	面積（尺）横	縦	規模 歩	大きさ	高さ	出土品	備考
中之条町	一	寺前ノ塚山	円	雑草地	無	市城	明神	1197	畑	5	29	24	6			石宮アリキ
	二	越後守墓跡ノ塚	円	山林	有	市城	曽洞	353	山林	3	22	不詳			直刀	中澤越後守ノ墓アリ
	三	御座石ノ塚跡	円	畑	有	市城	御座石	259	畑	3	4	不詳			刀、差数本	
	四	立石	円	畑	有	市城	亀石	39ノ1	畑	7	17	不詳			刀、差数本	帆石アリ
	五		円	畑	有	市城	亀石	18ノ1	畑	9	12	26	5			石棺整然タリ
	六		円	草地	無	市城	亀石	13	畑	18	0	24	5	土器		
	七		円	草地	無	市城	亀石	20	畑	3	10	19	4			
	八		円	草地	無	市城	亀石	9	畑	11	17	15	7			
	九		円	草地	有	市城	亀石	9	原野	6	28	23	4			
	一〇		円	草地	無	市城	亀石	2ノ1	畑	4	18	11	5			
	一一		円	都石アリ	有	市城	亀石	2ノ2	畑			不詳	5			
	一二		前方後円	雑草地	無	青山	小貝戸	乙446	畑		19	69	4			石祠アリ
	一三		円	雑草地	有	伊勢町	只面	434	畑	41	3	16	5		刀剣、土器	石郭存ス　吾妻社蔵
	一四		円	雑草地	有	伊勢町	只面	434	畑	41	3	27	27		土器	石郭存ス
	一五		円	都石アリ	有	伊勢町	只面	447	畑	7	7	不詳				
	一六	堀岡山	円	墓地	無	伊勢町	只面	329	墓地			30	6			
	一七		円	道路	有	中之条	長田原	56ノ1	道路			不詳	5		土器、石	
	一八		円	畑	有	中之条	石之塔	393ノ1	畑		36	4	不詳		土器	
	一九		円	畑	有	中之条	石之塔	384ノ2	畑	7	27	32	3		曲玉、土器	
	二〇	狩野塚	円	芝生	無	西中之条	永田原	190	宅地	6	18	20	8			石祠開口ス
	二一		円	水田	有	中之条	長田原	72	田	19	36	13	4			
	二二		円	水田	有	中之条	長田原	75	田	8	7	14	4			
	二三		円	畑	無	中之条	長田原	1862	畑	2	24	23	4			
	二四		円	畑	無	西中之条	永田原	1884ノ1	畑	6	14	30	12			
	二五		円	畑	有	中之条	小用	362	畑	1	21	不詳				埴輪破片
	二六		円	水田	有	中之条	小用	366	田	7	10	不詳			曲玉	
	二七		円	水田	有	中之条	小用	369	田	11	10	不詳				
	二八		円	水田	有	中之条	小用	371	田	22	20	不詳				帆石アリ
	二九		円	水田	有	中之条	小用	1838	田	6	30	不詳			直刀	
	三〇		円	水田	有	中之条	小用	1805	田	10	0	不詳				
	三一		円	雑草地	有	中之条	小用	217	畑	3	6	26	6			石祠開口ス
	三二									15	25	不詳				帆石アリ
	三三		円	畑	有	中之条	小用	265	畑	11	5	23	5			青石アリ
	三四		円	畑	有	中之条	小用	264	畑	13	11	22	3			青石郭石アリ
	三五		円	畑	有	中之条	小用	204		16	24	35	5			青石郭石アリ
	三六		円	雑草地	有	中之条	小用	169	畑	5	27	43	8			石郭存ス(南方ニ開ク)
	三七		円	雑草地	有	中之条	小用	187	畑	25	19	21	5	土器		
	三八		円	墓地	有	西中之条	永田原	119	墓地			43	8			帆石アリ
	三九		円	宅地	有	西中之条	永田原	77	宅地	4	28	不詳				帆石アリ
	四〇		円	道路	有	中之条	王子原	764	道路			不詳				
東村	一		円	芝地	無	新巻	雛付	869	墓地	1	25	20	7			五輪塔及墓石アリ
	二	金塚	円	芝地	無	新巻	御厩	775	原野		25	30	7			石祠アリ
	三		円	芝地	無	新巻	御厩	772ノ1	畑	8	14	20	5			
	四	公家塚	円	芝地	無	新巻	菅原	597	畑	1	27	10	7			
	五		円	芝地	無	新巻	菅原	594	墓地		22	17	5			
	六	堀之内塚	円	芝地	無	長田	道下	189	畑及石塚	11	2	23	8			
	七	源重塚	不詳	畑	不詳	五町田	高橋	680	畑及石塚	3	5	不詳				
	八	経塚	不詳	共同墓地	不詳	五町田	平五郎	1010	墓地	2	6	不詳				
	九		不詳	田	無	五町田	十二ノ前	407ノ2	田	4	13	不詳				
	一〇	大蔵経ノ塚(大塚)	円	山林	無	五町田	十二ノ下	甲1745	山林	139	22	83	33			軍迫石塚アリ
	一一	中塚	円	山林	無	鳴高	十二ノ下	甲1745	山林	139	22	17	10			
	一二	小塚	円	山林	無	鳴高	十二ノ下	1745	山林	22	9	17	7			
	一三	五輪塔	不詳	畑	無	鳴高	諏訪ノ久保	甲1555	畑	12	12	不詳				
	一四	瀧郎塚	円	山林	有	鳴高	諏訪ノ久保	1551	原野	9	14	99	33			
	一五	(経塚)	円	山林	無	鳴高	鳴澤	1024	原野		11	13	8			五輪塔及石徴アリ
	一六		円	山林	無	岡崎	砂押	1477ノ1	山林	34	11	33	7			雷神丸トイフ
太田村	一		円	草地	有	岩井	西	乙24	墓地地		16	45	7			青石アリ
	二		不詳	草地	有	岩井	西	25	宅地	30	26	不詳				
	三		不詳	畑	有	岩井	西	26	畑	11	29	不詳				大日ヲ祠ル
	四		不詳		有	岩井	西	38	山林	7	5	42	5			青石アリ
	五		円	竹林	有	岩井	西	甲27	山林	2	27	42	6	勾玉		
	六		円	竹林	有	岩井	西	38	山林	7	5	45	7			石郭存ス
	七		円	竹林	有	岩井	西	43	山林	9	8	44	7			帆石アリ
	八		円	草地	有	岩井	西	乙27	畑	8	17	27	6			石郭存ス
	九		円	竹林	有	岩井	西	28	山林	3	3	54	9			石郭一部存ス
	一〇		不詳		有	岩井	西	32	畑	12	17	不詳				帆石アリ
	一一		円	草地	有	岩井	西	33	畑		24	42	6			
	一二		円	草地	有	岩井	西	8084	畑	512	20	33	7			
	一三		不詳	草地	有	岩井	西	76	畑	18	14	不詳				帆石アリ
	一四		円	草地	有	岩井	西	135	畑	10	16	不詳			勾玉、土器	帆石アリ
	一五		不詳	水田	有	岩井	田中	298	田	9	6	不詳				二十三夜石徴アリ

町村名	古墳番号	古墳名称	形状	現状	発掘の有無	所在地大字	所在地字	番地	地目	面積（尺）坪	面積（尺）歩	規模 大きさ	規模 高さ	出土品	備考
	一六		不詳	畑	有	岩井	八幡	159	畑	14	28	不詳		偽像	
	一七	コウ塚	円	山林	有	岩井	寺薄	庚1693	山林	70	24	56	10		石棺開口ス
	一八		円	山林	無	岩井	日陰	1933ノ1	山林	27	5	30	5		石鏃アリ
	一九		円	山林	不詳	岩井	長板	1929	山林	52	1	45	20		
	二〇	琴平山	円	山林	有	岩井	原田	1238	雑種地	6	2	27	5	刀、土器	丘陵利用ノ墳丘
	二一	白山塚	不詳	白山神社	有	岩井	松本	1026	宮地		0				
	二二	渕路山	円	山林	有	岩井	田ノ原	2162	山林	23	6	60	8	勾玉、銅鏡	石棺開口ス
	二三	田長塚	不詳	宅地	有	横原	小畑原	917ノ2	宅地		23	不詳		玉類、直刀、鈴	巨大ナル横石
	二四	神力塚	円	山林	無	横原	坂ノ上	甲1255	山林	3	0	60	9		墳前修ヲ祀ル
	二五		不詳	畑	有	小泉	宮戸	441	畑	9	1	不詳		金環	貴石、石棺存ス
	二六	白鳥	不詳	白鳥神社	有	小泉	宮戸	344	宅地						貴石、石棺存ス
	二七		円	畑	有	小泉	天神	989	畑	9	17	36			貴石、石棺存ス
	二八	大日塚	不詳	畑	有	桑原	クヌギ	49	田	9	15	不詳			
	二九		円	畑	有	桑原	鞍谷	856	原野		5	12	4		
	三〇	御塚	円	草地	無	桑原	道東	甲764	原野	1	8	24	5		享保年間ノ石塔
	三一		円	畑	有	桑原	新井	493	原野	10	21	不詳			貴石存ス　石鏃アリ
	三二		円	墓地	無	桑原	新井	467	墓地		29	16	8		
	三三	道見塚	円	山林	無	横原	道原	甲2795	山林	520	18	11	3		
	三四		円	山林	有	小泉	宮戸	甲475	畑	1	16	18	10		石棺存ス
	三五	渕路山塚	円	山林	有	小泉	鹿島塚	2523ノ1	山林	102	0	30	8	玉類、金環	石鏃アリ
	三六	鹿島塚ノ塚	不詳	草地	有	小泉	鹿島塚	2515	山林	11	27	不詳			棺石、貴石多数
原町	一一		円		有	原町	上之町	536	山林	3	28	15	5	刀剣	石棺一部アリ
	一二		不詳		有	原町	下之町	446	宅地		4	不詳			棺石アリ
	一三		円		有	原町	下之町	甲448ノ2	畑	5	12	19	4		棺石アリ
	一四		円	竹林	有	原町	下之町	471	山林	2	11	40	9		石棺存ス
	一五		円	桑畑	有	原町	下之町	466	山林	3	11	20	5		石棺一部存ス
	一六		円	桑畑	無	原町	下之町	467	畑	10	28	23	5		
	一七		円		有	原町	下之町	467	畑	10	28	27	4		
	一八		円		有	原町	下之町	370	墓地	3	18	36	7		棺石露ル
	一九		円		不詳	原町	下之町	369	墓地	4	23	60	9	埴輪破片	白山ヲ祀ル
	一〇		円	古墳	有	原町	下之町	460	畑	19	7	36	15		貴石アリ
	一一		円		有	原町	南町	335	畑	8	2	不詳		金環	結晶アリ
	一二		円		有	原町	下之町	460	畑	19	7	18	3	埴輪破片数在ス	墳丘一部ノミ在ス
	一三		円	畑	有	原町	下之町	460	畑	19	7	不詳		埴輪破片数在ス	
	一四		円		有	原町	下之町	370	原野		14	不詳			白山アリ
	一五		円		有	原町	南町	353	宅地	9	26	不詳			石棺存ス
	一六		不詳		有	原町	南町	337　353	宅地	6	22	不詳		釧	石棺開口ス
	一七		円		有	下之町	薄尻	260ノ2	畑	26	18	36	10	金環	
	一八		不詳		有	下之町	薄尻	260ノ1	畑	2	22	不詳		玉類	
	一九		円	芝地	有	下之町		367	畑	13	28	48	6		
	二〇		円	女学校敷	有	原町	見市谷戸	192	畑	14	13	25	7		
	二一		円	芝地	有	原町	見市谷戸	204	畑	14	16	36	6		
	二二		円		有	原町	見市谷戸	209	山林	5	15	80	12		石棺開口ス
	二三		円		有	原町	見市谷戸	56	畑	5	21	15	5		棺石アリ
	二四		円	墓地	有	原町	八幡原	2931	墓地		4	不詳		埴輪、刀、金環、玉類	
	二五		円	畑	有	原町	寺久保	3046	畑	2	22	36	9		石棺開口ス
	二六		円	芝生	有	原町	櫛下	3031ノ乙	原野	3	4	不詳			棺石アリ
	二七		円	水田	有	原町	櫛下	甲2998	畑	10	17	不詳		刀、馬具	
	二八		円	水田	有	原町	櫛下	甲2998	畑	10	17	不詳		玉類、金環	
	二九		円	川戸神社	有	川戸			社地	42	7	60	9		貴石散在ス
	三〇		円	墓地	不詳	川戸	宮前	1462	墓地	1	16	37	9	埴輪円筒	
	三一		円	竹林	有	川戸	平山	1228	畑	8	24	60	9		石棺アリ
	三二		円		有	川戸	椿原	1342	畑	4	17	45	8	玉類	石棺アリ
	三三		円		有	川戸	椿原	1341	畑	22	1	60	6	刀、鏡鐸	石棺存ス
	三四		円	桑畑	有	川戸	椿原	1339ノ1	畑	7	4	30	6		貴石アリ
	三五		円	桑畑	有	川戸	椿原	1339ノ1	畑	7	4	24	4		貴石アリ
	三六	大日塚	円		無	川戸	宮前	1389	山林	1	12	40	9		
	三七	金塚	円		有	川戸	宮前	1389	墓地		8	42	6	金環	石棺存ス
	三八		不詳		有	川戸	宮前	1388	田	6	15	不詳			貴石存ス
	三九		円		有	川戸	宮前	1399	畑	17	28	30	6	土器破片	貴石存ス
	四〇		円		有	川戸	開墾	1616	畑	1	9	54	9	玉類、馬具	棺石存ス
	四一		不詳		有	川戸	開墾	1631	宅地	6	19	不詳		金玉、土器	石等多少
	四二		円		有	川戸	開墾	1606ノ1	宅地	5	15	30	9		棺石アリ
	四三		円		有	川戸	開墾	1606ノ2	畑	15	7	33	7	玉類、馬具	石棺開口ス
	四四		不詳	形ナシ	有	川戸	玉料	1707	畑	5	11	不詳			石棺アリ
	四五	十二ノ塚	円	川戸社	有	川戸	玉料	1745	畑	2	11	49	10	玉類	石棺アリ
	四六		円		有	川戸	玉料	1750	墓地	8	5	33	10		石棺開口
	四七		円	畑	有	川戸	玉料	1767	畑	6	4	不詳		玉、刀	
	四八		不詳	形ナシ	有	川戸	玉料	1701	畑	9	18	不詳			
	四九		不詳	畑	有	川戸	玉料	1714　1721	宅地畑	77	13	不詳			

町村名	古墳番号	古墳名称	形状	現状	発掘の有無	所在地 大字	所在地 字	所在地 番地	地目	面積（尺）畝	面積（尺）歩	規模 大きさ	規模 高さ	出土品	備考
	五〇		不詳		有	川戸	國盡	1576	畑	10	9	86	13		
	五一		円		有	川戸	國盡	1576	畑	10	9	33	5		石郭アリ
	五二		円		有	川戸	鷲田	851甲ノ2	畑	10	2	47			郭石アリ
	五三		円		有	川戸	上ノ谷戸	1526	畑	20	14	36	5		葺石アリ
	五四		円		有	鄙町	楊南城	2778	宅地	2	5	48	8	金環、玉、須恵	
	五五		円	山林	有	鄙町	下鄙郷	3188	山林	39	25	15	6	土器破片	
	五六		円		有	鄙町	鷲頭	3979	畑		17	48	8	石敷、石茅	石郭開口ス
	五七	鬼塚塚	円		有	鄙町	上野	1048ノ2	山林	3	22	80	12	曲玉	石郭アリ
	五八		円		有	川戸	宮平	1048ノ2	宅地		19	33	10	鉄	郭石アリ
	五九		不詳		有	川戸	南谷土	800乙	宅地	6	2	不詳		鉄	葺石アリ
	六〇		不詳	畑	有	川戸	田中	521	宅地	6	19	不詳			石郭存ス
	六一		円	水田	有	川戸	田中	441	田	16	18	不詳			郭石アリ
	六二		円		有	川戸	下郷	204	畑	1	18	125	20		石郭存ス
	六三		円		有	川戸	下郷	205	畑	14	26	49	10		墳大ナル石郭存ス
	六四		円		有	川戸	下郷	209	畑	6	10	不詳		管玉	葺石、石郭アリ
	六五		円		有	川戸	下郷	乙215	墓地		3	不詳		刀	分銅瑞鏡
	六六		不詳		有	川戸	下郷	263	宅地	2	29	不詳		土器破片	葺石存ス
	六七		不詳		有	川戸	下郷並木	238	畑	5	22	不詳		土器	
	六八		不詳	水田	有	川戸	下郷並木	184	畑	15	19	不詳			石郭開口ス
	六九		不詳	桑畑	有	川戸	下郷並木	221	畑	12	3	不詳			石郭存ス
	七〇	正兵衛塚	円		有	川戸	多田	162ノ乙	畑	1	2	90	7		葺石アリ
	七一		円	山林	有	川戸	多田	112	山林	4	18	67	6		石郭アリ
	七二		円	山林	有	川戸	多田	112	山林	4	18	50	9		郭石敷乱ス
	七三		円	山林	有	金井	水頭	95	畑	1	20	65	6		郭石敷乱ス
	七四		円	竹林	無	金井	水頭	329	竹林	1	3	不詳		土器	
	七五		円	一ノ宮神社	不詳	金井	吉敷	481	社地	31	2	不詳			葺石アリ
	七六		不詳		有	金井	水頭山	甲571	山林	30	24	不詳		刀、玉類	石郭存ス
	七七		円		有	鄙町	新井	1355	畑	3	5	不詳		刀	石郭存ス
	七八		円	道路	有	川戸	七薄	35ノ2	畑		3	不詳			
	七九		円		有	鄙町	薄尻	265	畑	19	16	不詳			葺石アリ
	八〇		円		不詳	鄙町	山田川	97	畑	15	0	不詳			葺石アリ
岩倉村	一	イチツス塚	円	芝生	無							9	4		石祠アリ
	二	ノノウ塚	前方後円	山林	無	矢倉	宮ノ脇		畑	1	20	240	24		
	三	ボタン	円	墓地	無	矢倉	神ノ前		墓地	1	15	66	12		
	四		円	荒地	有	矢倉	神ノ前	1001ノ1	畑	15	1				
	五		円	原野	有	矢倉	中矢倉	甲413	田	9	25	20	3		
	六	胴塚	円	荒地	有	笠下	寄行薄		畑		4	12	9		石郭存ス
	七	胴塚	円	芝地	有	松谷	廣畑		墓地			18	3		
	八	富士塚	円	芝地		松谷	久ヶ戸					26	10		
	九	オ塚	円	芝地	有	三島	二本木	911	畑	10	18	6	3		
	一〇	オ塚	円	芝地	無	三島	國原	6359ノ3	墓地		4	18	5		
	一一	午塚	円	桑畑	有	三島	鍛冶屋	436	畑	1	29	80	18	石	
	一二			桑畑	無	三島	万本薄		畑			7		埴輪破片	
	一三		円		有	三島	四戸	116ノ1	畑	4	3	12	5	土器	
	一四		円	畑	有	三島	四戸	116ノ1	宅地			24	6	埴輪土器破片	
	一五		円	畑	有	三島	四戸	116ノ1	畑			17	4		
	一六	萬福院	円	石宮アリ	有	三島	四戸	87	畑	9	17	33	6	馬具	
	一七		円	桑畑	有	三島	四戸	87	畑	9	17	17	2		
	一八		円	桑畑	無	三島	四戸	76	山林	4	26	51	9		
	一九		円	荒地	不詳	三島	四戸	77	社地	5	6	33	3		
	二〇		円	畑	有	三島	四戸	88ノ5 88ノ4	墓地			不詳			
	二一		不詳	畑	有	三島	四戸	115	畑	13	10	不詳			
	二二		円	墓地	有	三島	四戸	114	畑			16	4		
	二三		不詳	竹林	有	三島	四戸		畑			13			
	二四		円	畑	有	三島	四戸	112	畑	12	1	不詳			
	二五	十五塚	円	畑	有	三島	四戸	141	宅地	21	13	26	9	馬具、埴輪、刀、土器	
	二六		円	畑	有	三島	四戸	71ノ1	宅地	1	22	不詳		曲玉	
	二七		円	工場敷地	有	三島	四戸	53ノ1		5	9	不詳			
	二八		不詳	町林道	有	三島	四戸 53ノ2	甲56ノ2	畑			不詳			
	二九		円	畑	有	三島	四戸	乙56ノ2	道路	1	17	不詳		底刀	
	三〇		不詳	道路	有	三島	四戸	59	畑			不詳			
	三一		前方後円	畑	有	三島	四戸	68	畑	8	26	不詳		玉類、金環	
	三二		円	畑	有	三島	生原	805	畑	2	20			環鏡玉	石郭開口ス
	三三		円	畑	有	三島	生原	806	畑	3	16				石郭開口ス
	三四		円	荒地	有	三島	四戸	384	畑	8	6	12		刀、玉	
	三五		円	畑	有	三島	四戸	373	畑	3	15	不詳			
	三六		不詳	桑畑	有	三島	生原	435	畑	22	2	不詳			
	三七		円	桑畑	有	三島	生原	485	畑	12	8	15	2		
	三八		円	桑畑	有	三島	生原	488ノ2	畑			不詳			
	三九		円	桑畑	有	三島	四戸	511	畑			20	5	馬具	

町村名	古墳番号	古墳名称	形状	現状	発掘の有無	大字	所在地 字	番地	地目	面積（尺）紙	歩	規模 大きさ	高さ	出土品	備考
	四〇		円	桑畑	有	三島	四戸	510	畑			15	4	曲玉、金環	
	四一		円	桑畑	有	三島	四戸	509	畑	3	16	12	3	金環	
	四二		円		有	三島	生原	620				不詳		刀、金環	造除神ヲ祠ル
	四三		円	荒地	有	三島	生原	580ノ1	畑	6	17	18	4	玉類	
	四四		円		有	厚田	兵庫	甲121ノ4	宅地		28	31	9		稲荷社アリ
	四五		円	山林	無	厚田	兵庫	115	宅地		22	27	8		
	四六		円		有	鄕原	古谷	1138	墓地			12	3		石塔アリ
坂上村	一	犬子塚	不詳	吉岡神社	不詳	本宿	松原	2052	山林	4	9	不詳			
	二	田城塚	不詳	山林	不詳	本宿	田城	685	山林	3	2	不詳			稲荷
	三	人塚	円	山林	不詳	本宿	萩生	七入	山林	12	11	30	3		
	四	大日堂塚	円	竹林	不詳	本宿	萩生	田谷	畑	14	13	20	3		
	五	満行塚	円	山林	無	本宿	萩生	1833	山林	18	11	36	9		
	六	境野塚	前方後円	山林	無	本宿	境野	2094	墓地	9	4	31	6		
	七	大戸塚	前方後円	小祠	無	大戸	雲ノ澤	2592	原野	5	6	43	7		
	八	胡桃澤塚	円	畑	無	須賀尾	胡桃澤	1487	畑	1	26	57	8		
	九		円		不詳	須賀尾	堀ノ内	1750	墓地	2	0	不詳			
	一〇	鹿石ノ御塚	円	墓地	無	大柏木	鹿石	358	墓地	3	22	16	3		
	一一	松ノ本ノ御塚	円	墓地	無	大柏木	松ノ本	1413	墓地	2	15	31	5		
	一二		円	小祠	無	須賀尾	清水	不詳	林野	2	0	46	5		
長野原町	一	鐘塚	前方後円	雑木林	無	大津	馬込	73 74 其他	畑	20	2	220	7		
	二	五輪塚	前方後円	雑木林	無	興喜屋	外輪原	乙1594	原野		27	51	2		
嬬恋村	一		円	墓地	不詳	西窪	上ノ山	185	墓地	4	26	30	10		
	二	四八塚	円	山林	無	三原	岩井堂	1063	墓地	25	24	18	6		
	三		円	草地	無	三原	唐松窪	甲1161	原野	2	10	14	4		
	四		円	杜地	無	今井	西平出東	138	畑	3	13	18	5		
草津町	一	平工塚	円	芝地	無	草津	蓮起地	4ノ1	原野	187	23	27	8		
澤田村	一	笛吹塚	円	芝地	有	山田	深町	134	原野	3	17	32	32	曲玉、管玉	石塔多シ
	二		円	畑	有	山田	勝負薬	乙118	原野	2	4	40	40		石郭アリ
	三		円	芝地	有	山田	勝負薬	乙116	原野	17	6	30	30		石郭アリ
	四		円	芝地	有	山田	勝負薬	114	畑	4	15	25	25		
	五		円	藪	有	折田	雛山	甲30	畑	17	1	25	25		
	六		不詳	道路敷	有	山田	清水	2290ノ1	畑	306	5	不詳		金環、玉、刀、土器	郭石アリ
	七	往蔵塚	不詳	畑	有	山田	高沼	甲226	畑	3	11	不詳		金環、刀	
名久田村	一	大塚	円	芝地	有	平		1057ノ1	畑	3	24	51	9	刀	石郭周囲ス
	二		円	芝地	有	平		2270	畑	1	23	21	5		
	三		円	田	有	平		2279	田	7	1	50	9		
	四		円	芝地	有	平		2026	山林		11	42	6		石郭アリ
	五		円	石置場	有	平		2030	畑	22	17	50	7		石郭アリ
	六		円	宅地	有	平		2038	宅地	3	76				
	七		円	芝地	有	平		2037	畑	3	24	52	7		
	八		前方後円	石置場	有	平		2047	畑	1	27	51	6		
	九		円	石置場	有	平		2058	畑	3	2	33	5		
	一〇		不詳	田	不詳	大堀		甲582	田	9	13	不詳			
	一一		不詳	墓丘ナシ		平		2134							
	一二		不詳	田		平		782	田	7	17	不詳			
	一三		円	芝地	有	横尾		366	山林		10	33	7		石郭存ス
	一四		円	芝地	有	横尾		943	畑		28	31	7		石郭周囲ス
	一五		円	竹林	有	横尾		1131	原野		13	30	6		郭石アリ
	一六		円		有	横尾		1305	畑	1	6	30	10		石郭アリ
	一七		円	石置場	無	横尾		2022	畑	6	22	30	5		
	一八		円	芝地	有	横尾		2041	畑	2	3	30	5		
高山村	一	念塚塚	前方後円	山林	無	尻高	大の口		山林	1	0	16	12		
	二	經塚	円	墓地	無	尻高	蘭田田中		墓地		12	12	5		
	三	坡中塚	円	墓地	無	尻高	蘭田田中		墓地			18			
	四	坡中塚	円	畑	無	尻高	蘭田戸谷		畑		12	12	6		
	五	行人塚	円	墓地	無	尻高	戸宮古野		墓地	1	0	30	6		
	六	藤塚	円	山林	有	尻高	熊野					12	7		
	七	坡中塚	円	畑	無	尻高	蘭田					12	4		
	八	淨塚(鄕塚)	円	墓地	無	尻高	蘭田河原					12	4		
	九		円	畑	無	中山	上ノ原	甲1640	畑	7	29	8	30		
	一〇	饗歳塚	円	畑	無	中山	中田畑	甲632	畑	8	17	12	4		
	一一		不詳	芝地	有	中山	辻堂	2397	畑	8	4	不詳			
	一二	鳥見塚	不詳	畑	不詳	尻高	蘭田水澤		山林			不詳			

第6節　土壌

本遺跡の発掘調査時に、当事業団の理事でもある上武大学伊勢屋ふじこ教授の見解を頂いた。現地での立会いによる見解であるために、その後の調査の進展でやや異なる可能性もあるものの、今後の参考資料として収録することとした。

◎遺跡内の洪水堆積について

1号竪穴住居部分に認められる砂のレンズ状の堆積については、局地的なものであり、規模も決して大きくはない。

遺跡担当者が洪水堆積の可能性があるとした地層である基本土層の第6層については、周辺の土と粒土が同じであることや粒が球状に整っていないことなどから、洪水などによる再堆積の土壌ではなく、単に色調の違いと考えられる。おそらくは土壌の腐食化が弱いことから生じる黒色化の低下による視覚的な問題であろう。（腐食化の度合いが低い、つまり広葉樹を中心とする植物が少ない植生を引き起こした気候の低温化が原因か。）

また、黒色化を除く土壌の色調の変化そのものは、地下水位の変動による鉄分の付着など、後世の影響が強く出ることから、あまり参考にならない場合もある。

これらのことから、この地域での7世紀から11世紀の間の低温化が考えられる。他の資料から追試が必要である。

◎地形の形成と河川との関係

遺跡の北側に流れる温川の浸食状況を見た場合、基盤の礫、及び河川堆積と考えられる礫層の様子から、古く見ても1万年以後の浸食と考えられる。

現在の川床までの比高約20mが約1万年の間に形成されるのは一般的な事例である。むしろ、北側に広がる安山岩質の岩体の存在が一定の場所だけを短時間で縦方向に深く刻み込む状態を作り出したものと考えられる。一般には幅広い流域の中で横方向に広く浅く削り込むのが通常であり、段丘を形成しながら深く掘り込んでいくのには長い時間がかかるものである。

◎礫層の傾斜

この地域の地形は、縄文時代の段階に北北西から南東にかけて緩やかに傾斜しているのが遺跡内のセクションから読みとれるが、平安時代の浅間山の爆発により堆積した軽石の様子からはほとんど平らになってしまっている。これは温川以外の小河川の存在が南に広がる下位ロームがのる丘陵と現在の国道に沿ってあったものと考えられる。（国道南側に位置するガソリンスタンドが伏流水を利用していることからもその考えが証明されている。）

遺跡の北側が高いのは、自然堤防というわけではなく、そうした小河川による削り込みによって南側が低くなったことが原因である。

（文責　麻生）

第5章　自然科学分析

第1節　土層とテフラ

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

群馬県域とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代が不明な土層や遺構が検出された吾妻町霜田遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って示標テフラとの同定を行い、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった遺構は、Ⅱ区北基本土層断面、Ⅱ区南基本土層断面、Ⅱ区北基本土層断面南地点、Ⅰ区基本土層断面の4地点である。（採取地点は、17頁第9図参照）

2．土層の層序

（1）Ⅱ区北基本土層断面

Ⅱ区北基本土層断面では、下位より亜円礫混じり暗灰褐色土（層厚16cm以上，礫の最大径123mm）、黒褐色土（層厚13cm）、黄色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚12cm）、黄褐色軽石混じり黒褐色土（層厚8cm，軽石の最大径4mm）、黄色軽石を少量含む暗灰褐色土（層厚17cm，軽石の最大径5mm）、黄褐色軽石混じり黒褐色土（層厚21cm，軽石の最大径6mm）、黒褐色土（層厚15cm，7層）、褐色土ブロック混じりで若干色調が暗い褐色土（層厚28cm，6層）、盛土（層厚77cm）が認められる（図1）。発掘調査では、7層下部から古式土師器が検出されている。

（2）Ⅱ区南基本土層断面

Ⅱ区南基本土層断面では、下位より亜円礫を少量含む黒色土（層厚31cm以上，礫の最大径41mm）、黄褐色軽石混じり黒褐色土（層厚22cm，軽石の最大径7mm）、黄褐色軽石を多く含む暗褐色土（層厚22cm，軽石の最大径23mm）、黄褐色軽石混じり黒褐色土（層厚13cm，6mm）、黄褐色軽石混じり暗褐色土（層厚12cm，軽石の最大径5mm）、若干色調が暗い褐色土（層厚16cm）、暗褐色土（層厚11cm）、黒色土（層厚4cm，5層）、成層したテフラ層（層厚7.3cm，4層）、暗灰褐色砂質土（層厚3cm）、褐色軽石混じり黄褐色軽石層（層厚9cm，軽石の最大径33mm，石質岩片の最大径9mm）、暗灰褐色土（層厚21cm）が認められる（図2）。

これらのうち成層したテフラ層の直下からは、水田遺構が検出されている。この成層したテフラ層は、下位より黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.2cm）、褐色軽石層（層厚5cm，軽石の最大径43mm，石質岩片の最大径19mm）、黄褐色砂質細粒火山灰層（層厚1cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.3cm）、黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.8cm）から構成されている。このテフラ層は、その層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B，荒牧，1968，新井，1979）に同定される。また、その上位の褐色軽石混じり黄褐色軽石層には、縞状軽石も認められる。このテフラ層は、層位や岩相などから、1128（大治3）年に浅間火山から噴出した浅間粕川テフラ（As-Kk，早田，1991，1995）に同定される。

（3）Ⅱ区北基本土層断面南地点

Ⅱ区北基本土層断面南地点では、下位より黒色土（層厚3㎝以上，5層）、成層したテフラ層（層厚7.5㎝，4層）、若干色調が暗い灰色土あるいは黒褐色土（層厚0.6㎝程度）、褐色軽石混じり黄褐色軽石層（層厚31㎝，軽石の最大径47㎜，石質岩片の最大径19㎜）、暗灰褐色表土（層厚35㎝）が認められる（図3）。

これらのうち成層したテフラ層は、下位より黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.5㎝）、褐色軽石層（層厚5㎝，軽石の最大径41㎜，石質岩片の最大径16㎜）、黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚3㎝）から構成されている。このテフラ層は、その層相からAs－Bに同定される。その上位の褐色軽石混じり黄褐色軽石層には、縞状軽石も認められる。このテフラ層は、層位や岩相などからAs－Kkに同定される。

（4）Ⅰ区基本土層断面

Ⅰ区基本土層断面では、下位より暗褐色土（層厚17㎝，6層）、黒色土（層厚3㎝）、成層したテフラ層（層厚6.7㎝）、暗灰褐色土（層厚2㎝）、褐色軽石混じり黄褐色軽石層（層厚26㎝，軽石の最大径67㎜，石質岩片の最大径30㎜）、暗灰褐色表土（層厚36㎝）が認められる（図4）。

これらのうち成層したテフラ層は、下位より黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.2㎝）、褐色軽石層（層厚4㎝，軽石の最大径57㎜，石質岩片の最大径15㎜）、灰色細粒火山灰層（層厚0.2㎝）、黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚1㎝）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.3㎝）、黄褐色砂質細粒火山灰層（層厚0.6㎝）、灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.6㎝）から構成される。このテフラ層は、その層相からAs－Bに同定される。その上位の褐色軽石混じり黄褐色軽石層には、縞状軽石も認められる。このテフラ層は、層位や岩相などからAs－Kkに同定される。

3．テフラ検出分析

（1）分析試料と分析方法

示標テフラの層位を明らかにするために、Ⅱ区北基本土層断面およびⅡ区南基本土層断面の2地点において、基本的に5㎝ごとに採取された試料のうち、22点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

1）試料10ｇを秤量。

2）超音波洗浄により泥分を除去。

3）80℃で恒温乾燥。

4）実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

（2）分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。Ⅱ区北基本土層断面では、試料15より上位の試料から軽石が検出された。試料15および試料13には、黄灰色軽石（最大径2.8㎜）が比較的多く含まれている。試料11には、淡褐色や灰色の軽石（最大径1.0㎜）が少量認められる。試料9より上位では、黄灰色軽石（最大径3.3㎜）が含まれている。火山ガラスは、いずれの試料からも検出された。とくに試料15から試料3にかけて、比較的多くの軽石型ガラスが含まれている。それらの色調は、白色や灰白色である。

Ⅱ区南基本土層断面では、試料19より上位の試料から軽石が検出された。試料19から試料7にかけては、黄灰色軽石（最大径4.8㎜）が認められる。とくに試料17や試料13から試料9にかけて多く含まれている。試

料17には、ほかに黄白色軽石（最大径2.4㎜）も認められる。試料5から試料1にかけては、灰白色軽石（最大径3.0㎜）が含まれている。さらに試料7や試料3には、褐色の軽石（最大径4.1㎜）が少量ずつ認められる。

この地点においても、火山ガラスはいずれの試料からも検出された。とくに試料17より上位には、比較的多くの軽石型ガラスが含まれている。それらの色調は、白色や灰白色である。また試料17、試料15、試料11には、無色透明のバブル型ガラスが少量含まれている。

4．屈折率測定

（1）測定試料と測定方法

層相やテフラ検出分析の結果、テフラの降灰層準のある可能性が考えられた試料や、とくに濃集している軽石について、テフラの起源を明らかにするために、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）により、テフラ粒子の屈折率測定を行った。測定対象となった試料は、Ⅱ区北基本土層断面の試料13′、試料7′、Ⅱ区南基本土層断面の試料5、試料7、試料11′、試料13′、試料17′の7点である。

（2）測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。Ⅱ区北基本土層断面の試料13′の火山ガラス（n）の屈折率は、1.513-1.520である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.706-1.708である。試料7′に含まれる重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.706-1.709である。

Ⅱ区南基本土層断面の試料17′の火山ガラス（n）の屈折率は、1.509-1.514である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.706−1.712（modal range：1.707−1.711）である。試料13′の火山ガラス（n）の屈折率は、1.509−1.513である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.706-1.709である。

Ⅱ区南基本土層断面の試料11′には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.706-1.708である。試料7には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.707-1.710である。試料5には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.706-1.711である。

5．考察－示標テフラとの同定

Ⅱ区北基本土層断面のテフラのうち、試料13′の軽石については、その特徴から約5,400年前*1に浅間火山から噴出した浅間六合軽石（As−Kn：早田，1990，早田，1996）に由来する可能性が高い。このAs−Knは、軽石の産出状況から試料15付近に降灰層準があると考えられる。また試料7′の軽石は、その層位や特徴などから約4,000～5,000年前*1に浅間火山から噴出した浅間D軽石（As−D：荒牧，1968，新井，1979,町田・新井，1992，早田，1996）に由来する可能性が考えられる。このAs−Dは、軽石の産出状況から試料9付近に降灰層準があると考えられる。

Ⅱ区南基本土層断面の試料17′の軽石については、その層位や特徴などから、As−Knのほか、約1.3～1.4万年前*1の浅間板鼻黄色軽石（As−YP，新井，1962，町田・新井，1992）、約1.1万年前*1の浅間総社軽石（As−Sj，早田，1990，早田，1996）、約8,200年前*1の浅間藤岡軽石（As−Fo，早田，1991）などに由

来する軽石が混在している可能性がある。この地点では、軽石の産出状況から試料17付近にAs-Knの降灰層準があると考えられる。試料13′と試料11′の軽石は、その特徴から各々As-KnとAs-Dに由来している可能性が高い。軽石の産出状況や層相などから、ここでは試料13と試料11付近に、各々As-KnとAs-Dの降灰層準があると推定される。

さらに試料７（７層）や試料５（６層）に含まれるテフラについては、とくに斜方輝石の屈折率から、４世紀中葉*2に浅間火山から噴出した浅間Ｃ軽石（As-Ｃ，荒牧，1968，新井，1979）に由来するものと思われる。このことは、７層から古式土師器が出土していることとも矛盾しない。試料５から試料１にかけて認められる灰白色軽石についても、その岩相からAs-Ｃに由来すると考えられる。

６．小結

霜田遺跡において地質調査、テフラ検出分析、および屈折率測定を行った。その結果、下位より浅間六合軽石（As-Kn，約5,400年前*1）、浅間Ｄ軽石（As-Ｄ，約4,000～5,000年前*1）、浅間Ｃ軽石（As-Ｃ，４世紀中葉*2）などに由来するテフラ粒子のほか、浅間Ｂテフラ（As-Ｂ，1108年）、浅間粕川テフラ（As-Kk，1128年）などが認められた。発掘調査で検出された水田遺構の層位は、As-Ｂの直下にあると考えられる。

*1　放射性炭素（^{14}C）年代.

*2　現在では４世紀を遡るとする説が有力になっているようである（たとえば，若狭，2000）。しかし、具体的な年代観が示された研究報告例はまだない。現段階においては「３世紀後半」あるいは「３世紀終末」と考えておくのが妥当なのかも知れないが、土器をもとにした考古学的な年代観の変更については、考古学研究者による明確な記載を待ちたい。

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，p.41-52.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法－研究対象別分析法」，p.138-148.

荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報，no.45，65ｐ.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276ｐ.

早田　勉（1990）群馬の自然と風土．群馬県史通史編，１，ｐ.37-129.

早田　勉（1991）浅間火山の生い立ち．佐久考古通信，no.53，ｐ.2-７.

早田　勉（1995）テフラからさぐる浅間山の活動史．御代田町誌自然編，ｐ.22-43.

早田　勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第１テフラより上位のテフラについて－．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，７，ｐ.256-267.

若狭　徹（2000）群馬の弥生土器が終わるとき．かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く－古墳が成立する頃の土器の交流」，ｐ.41-43.

表1　テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
Ⅱ区北基本土層	1	＋	黄灰	2.4	＋	pm	白,灰白
	3	＋＋	黄灰	2.3	＋＋	pm	白,灰白
	5	＋＋	黄灰	3.1	＋＋	pm	白,灰白
	7	＋＋	黄灰	3.3	＋＋	pm	白,灰白
	9	＋＋	黄灰	2.1	＋＋	pm	白,灰白
	11	＋	淡褐，灰	1.0	＋＋	pm	白,灰白
	13	＋＋	黄灰	2.8	＋＋	pm	白,灰白
	15	＋＋	黄灰	1.8	＋＋	pm	白,灰白
	17	－	－	－	＋	pm	白
Ⅱ区南基本土層	1	＋	灰白	1.8	＋＋	pm	白,灰白
	3	＋	灰白＞褐	3.0，4.1	＋＋	pm	白,灰白
	5	＋	灰白	2.1	＋＋	pm	白,灰白
	7	＋	黄灰＞褐	1.9，3.0	＋＋	pm	白,灰白
	9	＋＋	黄灰	3.1	＋＋	pm＞bw	白,灰白
	11	＋＋	黄灰	4.0	＋＋	pm＞bw	白,灰白,透明
	13	＋＋	黄灰	2.3	＋＋	pm	白,灰白
	15	＋	黄灰	1.6	＋＋	pm＞bw	白,灰白
	17	＋＋	黄灰>黄	4.8，2.4	＋＋	pm＞bw	白,灰白,透明
	19	＋	黄灰	1.4	＋	pm	白,灰白
	21	－	－	－	＋	pm	白
	23	－	－	－	＋	pm	白,灰
	25	－	－	－	＋	pm	白

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，＋：少ない，－：認められない．
最大径の単位は，mm．bw：バブル型，pm：軽石型．

表2　屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス(n)	組成	斜方輝石(γ)
Ⅱ区北基本土層	7′	－	opx＞cpx	1.706−1.709
Ⅱ区北基本土層	13′	1.513−1.520	opx＞cpx	1.706−1.708
Ⅱ区南基本土層	5	－	opx＞cpx	1.706−1.711
Ⅱ区南基本土層	7	－	opx＞cpx	1.707−1.710
Ⅱ区南基本土層	11′	－	opx＞cpx	1.706−1.708
Ⅱ区南基本土層	13′	1.509−1.513	opx＞cpx	1.706−1.709
Ⅱ区南基本土層	17′	1.509−1.514	opx＞cpx	1.706−1.712(1.707−1.711)

屈折率の測定は，温度一定型測定法（新井，1972，1993）による．最大径の単位は，
mm．opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石．（　）は，modelu rangeを示す．

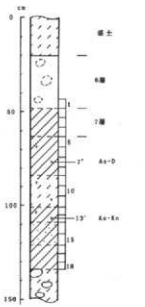


図1　Ⅱ区北基本土層断面

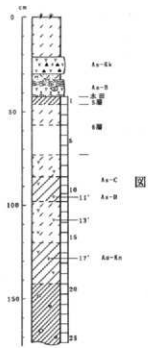


図2　Ⅱ区南基本土層断面

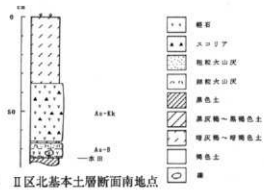


図3　Ⅱ区北基本土層断面南地点

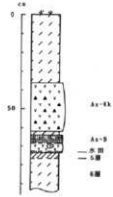


図4　Ⅰ区基本土層断面

第２節　プラント・オパール分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（杉山，2000）。

２．試料

試料は、Ⅱ区南基本土層断面、Ⅱ区北基本土層断面南、Ⅰ区基本土層断面の３地点から採取された計13点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。（採取地点は、17頁第９図参照）

３．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１ｇに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μm以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10－５ｇ）をかけて、単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科（ネザサ節）は0.48である。

４．分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な５分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

５．考察

（１）水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000)。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

１）Ⅱ区南基本土層断面

As-Kk直下層（試料１）からAs-Knの下層（試料８）までの層準について分析を行った。その結果、As－B直下層（試料２）からAs－C混層（試料５′）までの各層からイネが検出された。このうち、As－B直下の５層（試料２）および６層（試料３、４）では、密度が6,000～9,000個/gと高い値であり、As－Cの上層（試料５）でも4,500個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。As－C混層（試料５′）では密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

２）Ⅱ区北基本土層断面南

As-Kk直下層（試料１）およびAs－B直下層（試料２）について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。密度はAs-Kk直下層（試料１）では700個/gと低い値であり、As－B直下層（試料２）でも2,300個/gと比較的低い値である。ただし、各層はそれぞれ直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、各層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

３）Ⅰ区基本土層断面

As-Kk直下層（試料１）およびAs－B直下層（試料２）について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。このうち、As－B直下の５層（試料２）では密度が8,300個/gと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。As-Kk直下層（試料１）では、密度が1,500個/gと比較的低い値である。ただし、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

（２）堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。イネ以外の分類群では、ほとんどの層準でヨシ属が多量に検出され、ススキ属型やタケ亜科は少量である。おもな分類群の推定生産量によると、As－B直下層およびその下位層ではヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。

以上のことから、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属などが繁茂する湿地の環境であったと考えられ、As－Cの上層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。なお、稲作の開始以降もヨシ属が多く見られることから、水田雑草などとしてヨシ属が生育していたことや、休閑期間中にヨシ属が

繁茂していたこと、さらにヨシ属が施肥などの目的で水田内に持ち込まれたことなどが想定される。

6．まとめ

プラント・オパール分析の結果、水田遺構が検出された浅間Bテフラ（As−B，1108年）直下の5層からはイネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、6層および浅間C軽石（As−C，4世紀中葉）の上層でもイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。さらに、浅間柏川テフラ（As−Kk，1128年）直下層でも、稲作が行われていた可能性が認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが繁茂する湿地の環境であったと考えられ、As−Cの上層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。

文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

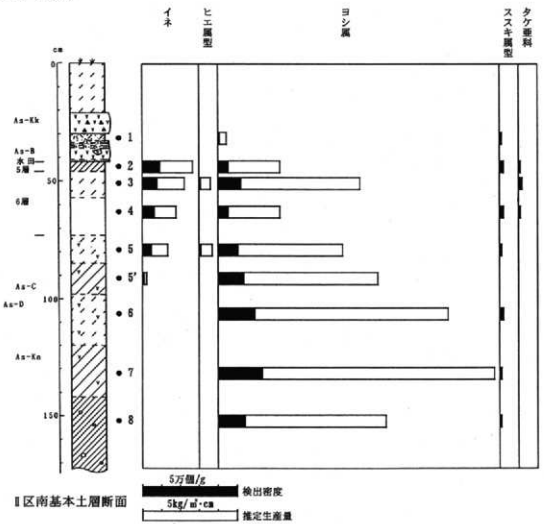


図1　霜田遺跡におけるプラント・オパール分析の結果（1）

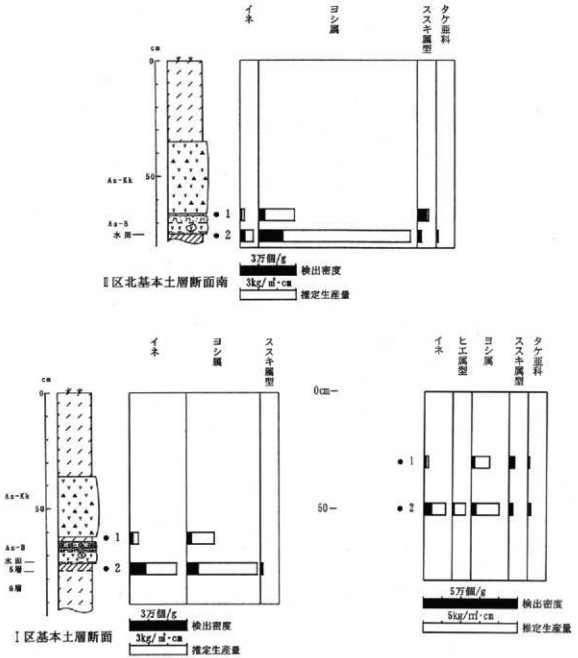


図１　霜田遺跡プラント・オパール分析の結果（２）

表１　群馬県、霜田遺跡におけるプラント・オパール分析結果

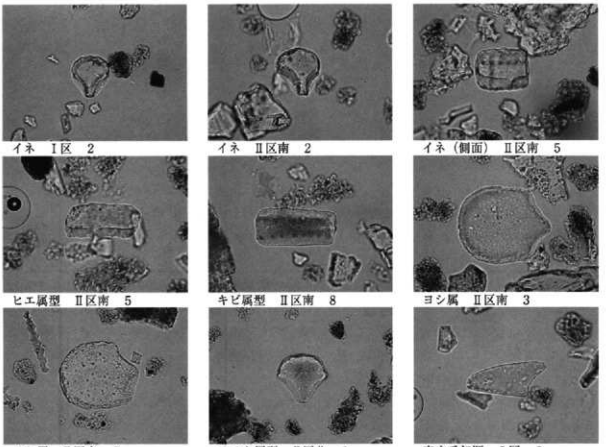
検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	Ⅱ区南基本土層柱状 1	2	3	4	5	5'	6	7	8	Ⅱ区北基本土層柱 1	2	Ⅰ区基本土層 1	2
イネ	*Oryza sativa (domestic rice)*		90	70	60	45	7				7	23	15	80
ヒエ属型	*Echinochloa type*			7		8								
ヨシ属	*Phragmites (reed)*	7	52	120	52	105	135	194	233	142	30	128	23	60
ススキ属型	*Miscanthus type*	7	15		15	8		15	8	7	45	15		8
タケ亜科	*Bambusoideae (Bamboo)*		7	15	7							8		

推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa (domestic rice)*		2.64	2.20	1.76	1.32	0.22				0.22	0.66	0.44	2.42
ヒエ属型	*Echinochloa type*			0.62		0.62								
ヨシ属	*Phragmites (reed)*	0.47	3.30	7.56	3.30	6.62	8.50	12.20	14.73	8.99	1.89	8.06	1.43	3.79
ススキ属型	*Miscanthus type*	0.09	0.19		0.19	0.09		0.19	0.09	0.09	0.56	0.19		0.09
タケ亜科	*Bambusoideae (Bamboo)*		0.04	0.07	0.04							0.04		

※試料の乾土量を1.0g設定して算出。



植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真　50μm

第3節　炭化種実

新山雅広（パレオ・ラボ）

1．試料

本遺跡から出土した炭化種実の検討は、抽出済みのプラスチックケースに保存された1試料について行った。試料名は、霜田遺跡Ⅱ区1号焼土遺構埋没土である。

2．出土した炭化種実

得られたのは、イネ炭化胚乳の完形が1個体、マメ科炭化種子の完形が2個体であった。その他に、タケニグサ種子が2個体得られたが、未炭化であり、現代のものの混入と考えられる。

3．考察

得られたのは、イネ、マメ科であった。イネは栽培植物であり、食用にされていたと考えられる。マメ科は、大きさとしてはササゲ属程度であるが、状態が悪く不明である。野生種の利用の可能性もあり、明らかな栽培植物とは言えないが、イネと共に出土していることから、いずれにしても利用されていた可能性は高いと思われる。

4．形態記載

イネ　Oryza sativa Linn..　炭化胚乳

やや扁平な楕円形。中央部は盛り上がり、縁辺部は一段下がって薄くなる。

マメ科　Leguminosae　炭化種子

完形2個体が出土したが、1個体は焼け膨れ、もう1個体は側面が発泡・欠損しており、いずれも状態はあまり良好ではない。種子のおよその長さは、4.1㎜、4.3㎜である。

第4節　樹種同定

植田　弥生（パレオ・ラボ）

1．はじめに

ここでは、古墳時代の5世紀後半～7世紀に比定され、Ⅱ区から検出された住居4軒の炭化材樹種同定結果を報告する。検討した炭化材は、3号住居(10試料)、4号住居(81試料)、5号住居(36試料)、6号住居(7試料)、合計134試料である。

古墳時代の住居出土炭化材の樹種は、二次林の優占主要樹種で知られる落葉広葉樹のクヌギ節またはコナラ節の材を主体として建築されていた事例が多く知られている(千野、1991、山田、1993など)。しかし群馬県内では資料の蓄積に従い、県中央部や北部丘陵から山麓に立地する渋川市の中筋遺跡(高橋、1988)ではオニグルミやコナラ節が多く、赤城村の勝保沢中ノ山遺跡(鈴木・能城、1988) ではコナラ節が多いがイヌシデ節・アサダ・トネリコ属・ブナ属なども検出され、県西南部の富岡町に所在する中高瀬観音山遺跡(鈴木・能城、1995)ではクヌギ節が優占するがアカガシ亜属・クリ・カエデ属なども検出され、甘楽町の台地上(標高約185m) に立地する白倉下原・天引向原遺跡(植田、1997)では常緑広葉樹のアカガシ亜属が優占しモミ属・イヌガヤ・カヤの針葉樹と複数種類の広葉樹材も利用されていた。このように資料の蓄積が進むに従い、古墳時代の建築材樹種の利用状況には地域差があったことが判ってきた。

当遺跡は県北西部の吾妻町に所在し、西から東に流れる温川の右岸中位段丘面の南斜面標高約520mに立地している。住居建築材の樹種利用の情報量は、県南部に比べ少ない状況である。古墳時代の住居建築材は、形状や材質が建築材に適し、かつ量的にも入手量の確保できる樹木を遺跡周辺の森林から選択的に利用していたと推測される。従って、当遺跡の複数の住居において炭化材樹種を明らかにすることは、県内での地域差や県北部での建築材樹種利用および周辺森林植生の復元を今後も構築してゆく過程において、さらなる資料蓄積に貢献すると考えられ、この調査が実施された。

2．炭化材樹種同定の方法

まず、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

3．結果

同定結果の一覧を表2に示し、表1では住居跡ごとに検出された樹種を集計した。なお、4号住居の№15からは異なる樹種(分類群)が検出され、5住居跡は36試料あるが5試料から異なる樹種(分類群)が検出されたので、集計では141点となっている。

住居4軒の136試料141点からは、モミ属(3点)の針葉樹1分類群、クマシデ節(1点)・イヌシデ節(23点)・ブナ属(1点)・コナラ節(12点)・クリ(15点)・ニレ属(25点)・ヤマグワ(34点)・モクレン属(2点)・クスノキ科(5点)・アジサイ属(1点)・サクラ属(3点)・ナシ亜科(3点)・ヌルデ(1点)・トチノキ(1点)・ミズキ属（4点)の落葉広葉樹16分類群、そのほかにタケ亜科(2点)・ススキ属(5点)が検出された。クス

ノキ科には、常緑性と落葉性があり、検出された2試料はともに小型の管孔であったことから、落葉性のクロモジ属である可能性が高いと思われる。

ススキ属は、茎部が同一方向に集積し潰れた状態であることから、屋根材または壁材であったと推測される。

4軒の住居跡から検出されたこれらの樹種は、温帯～冷温帯の落葉広葉樹林に生育している樹種の組みあわせに類似していた。全体的には、ヤマグワ・ニレ属・イヌシデ節の順に多くこれらは4～3軒の住居から共通して検出され、次に多いクリ・コナラ節・クスノキ科・ミズキ属は2軒から検出されたことから、利用頻度の高いまたは選択性がやや高い樹種であったと考えられる。各住居の調査試料数にばらつきはあるが、住居により樹種利用に明瞭な差は認められず、各住居からは複数種類(4～10種類)の落葉広葉樹材が検出された。

当遺跡の炭化材試料は、形状・木取り・年輪数などが記録できるような状態ではなかった。しかし、出土数の多いニレ属とヤマグワは比較的大きな材の破片であり、イヌシデ節・ミズキ属・クスノキ科・モミ属は芯持ち丸木の破片が多く、直径も細い試料が多かった。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。(図版1～6は、PL.18～23)

(1) モミ属　*Abies*　マツ科　図版1　1a－1c（5号住居40)

仮道管・放射柔細胞からなる針葉樹材。樹脂細胞は無く、樹脂道も無い。放射断面において放射柔細胞の接線壁に数珠状肥厚が見られ、放射仮道管は無い。分野壁孔は小型のスギ型が1分野に数個あり雑然と配置していることが多い。

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの5種がある。いずれの材も組織は類似しており区別はできない。

(2) クマシデ属クマシデ節　*Carpinus sect. Distegocarpus*　カバノキ科　図版1　2a－2c（4号住居129)

小型の管孔が単独または2～4個が放射方向に複合して散在し、年輪界は不明瞭な散孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は横棒数が少なく10本前後の階段穿孔、内壁に細いらせん肥厚が密にある。放射組織はほぼ同性、1～2細胞幅である。主に階段穿孔で、放射組織の集合する部分が見られなかったことから、クマシデ属のうちサワシバとクマシデを含むクマシデ節と同定した。

(3) クマシデ属イヌシデ節　*Carpinus sect. Eucarpinus*　カバノキ科　図版1　3a－3c（4号住居15)

放射組織が集合する部分と2～数個の小型の管孔が放射方向に複合し配列する部分がある散孔材。管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は単穿孔である。放射組織は方形細胞が混じるがほぼ同性、1～3細胞幅、道管との壁孔はやや大きい。集合放射組織があり、穿孔も主に単穿孔であることから、イヌシデ節と同定した。

イヌシデ節には山野に普通のイヌシデとアカシデ、乾いた山稜に生育するイワシデがある。

(4) ブナ属　*Fagus*　ブナ科　図版2　4a－4c（3号住居6)

丸みをおびた小型の管孔が密在し、年輪界では小型となり分布数も減る散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は階段数が少ない階段穿孔と単穿孔である。放射組織は異性、1～3細胞幅のものと細胞幅が広く背も高い広放射組織があり、道管との壁孔は交互状で大きなレンズ状である。

ブナ属は温帯域の極相林の主要構成樹種である。北海道南部以南の肥沃な山地に群生するブナと、本州以南のおもに太平洋側に分布しブナより低地から生育しているイヌブナの2種がある。

(5) コナラ属コナラ亜属コナラ節　*Quercus subgen. Quercus sect. Prinus*　ブナ科　図版2　5a－5c（5号

住居27)

年輪の始めに中型の管孔が１～２層配列し、その後は薄壁で孔口は角形の小型管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にチロースがある。放射組織は単列と細胞幅が広い広放射組がある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

(6) クリ　*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*　ブナ科　図版２　6a－6c（５号住居24）

年輪の始めに中型～大型の管孔が１～２層配列し、その後は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

(7) ニレ属　*Ulmus*　ニレ科　図版３　7a－7c（３号住居10）

年輪の始めに大型の管孔が１～３層ほど配列し、その後は小型の管孔が塊状に多数集合し、接線状・斜状に配列している環孔材。道管の穿孔は単穿孔、小道管の内壁にらせん肥厚がある。放射組織は同性、５～８細胞幅の紡錘形である。

ニレ属は北地の温帯に多いハルニレ・オヒョウ、暖帯の荒地や川岸に普通に見られるアキニレがあり、いずれも落葉高木である。

(8) ヤマグワ　*Morus austoralis Poiret*　クワ科　図版３　8a－8c（３号住居12）

年輪の始めに大型の管孔が１～数層配列し、その後は小型の管孔が集合し、塊状・斜状・波状に配列する環孔材。道管の穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は同性に近い異性または異性、１～８細胞幅の紡錘形、上下端に方形細胞または直立細胞がある。

前述のニレ属と類似しているものが多く、図版にはそのような試料の写真を掲載した。放射組織が明瞭な異性である試料は少なく、ニレ属との識別が困難な試料が多かった。ヤマグワの放射組織は中間部や上下端の２～３層に方形細胞があるが、当遺跡では平伏細胞がほとんどで、上下端の一層が方形細胞または直立細胞であり、縁辺部に直立細胞が鞘細胞状に見られる試料が多かった。

ヤマグワは落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布する。

(9) モクレン属　*Magnolia*　モクレン科　図版３　9a－9c（３号住居４）

小型の管孔が単独または２～数個が複合して分布する散孔材。道管の壁孔は階段状、穿孔は主に単穿孔で階段穿孔もある。放射組織はほぼ同性、１～２細胞幅、道管との壁孔は大きく階段状または対列状に整然と配列している。

モクレン属は暖帯または温帯に分布する落葉性の高木または小高木である。北海道以南の山地に生育するホオノキ・コブシ、本州と九州に生育するタムシバ、関東北部以西に生育するオオヤマレンゲ、中部地方西南部に生育するシデコブシがある。

(10) クスノキ科　*Lauraceae*　図版４　10a－10c（６号住居７）

小型の管孔が単独または２～３個が放射方向に複合して分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は方形細胞を含む異性、１～２細胞幅、上下端に油細胞が見られる。管孔が小型であることから、クロモジ属の可能性が高い。

クスノキ科は暖帯から温帯に生育し、多くは常緑の高木または低木である。管孔が小型のクロモジ属は落葉性である。

(11) アジサイ属　*Hydrangea*　ユキノシタ科　図版４　11a－11c（４号住居18）

非常に小型の管孔が散在し、年輪界の最後の管孔の径は小さい散孔材。道管の壁孔は階段状、穿孔は横棒数が多い階段穿孔、内腔には水平のチロースがある。放射組織は異性、1～2細胞幅である。

アジサイ属はおもに落葉性の低木で、暖帯から温帯下部の福島県から中部地方に分布し山中の川岸に生育する潅木のタマアジサイ、温帯の日当りのよい開けた土地や山中に生育する小高木のノリウツギなどがある。ツル性のツルアジサイは放射組織の高さが非常に高い点で区別されるがそのほかの種は材組織から区別することはできていない。

(12) サクラ属　*Prunus*　バラ科　図版4　12a－12c（4号住居124）

小型の管孔が年輪の始めにやや密に分布し、その後は放射方向・接線方向・斜状に複合して分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は異性、約5細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

サクラ属は暖帯から温帯の山地に生育する多くは落葉広葉樹である。

(13) ナシ亜科　*Rosaceae subfam. Maloideae*　バラ科　図版5　13a－13c（6号住居6）

小型の管孔が主に単独で分布し、年輪界では極めて小型となり、木部柔細胞が散在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、1～2細胞幅、道管との壁孔は小型で交互状である。

カマツカ属・ナナカマド属・リンゴ属などがあるが、材組織は類似性が高く分類群は特定できなかった。

(14) ヌルデ　*Rhus javanica L.*　ウルシ科　図版5　14a－14c（4号住居27）

年輪の始めに中型の管孔が配列し晩材に向かい徐々に径を減じて行き、晩材部では非常に小型の管孔が塊状に集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管には明瞭らせん肥厚がある。放射組織は異性、1～2細胞幅、輪郭はやや不斉、結晶細胞がある。

ヌルデは北海道以南の温帯から熱帯にまで広く分布し山野に普通の落葉小木である。

(15) トチノキ　*Aesculus turbinata Blume*　トチノキ科　図版5　15a－15c（5号住居38）

小型の管孔が単独または2～数個が複合し分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性、やや層階性が見られるところもある。

トチノキは北海道以南の温帯の谷間に生育する落葉高木である。

(16) ミズキ属　*Cornus*　ミズキ科　図版6　16a－16c（4号住居28）

孔口が円形の小型管孔が単独または2～3個が複合して分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒数が多い階段穿孔である。放射組織は異性、1～3細胞幅、多列部は平伏細胞からなりその上下端の単列部は方形細胞や直立細胞からなる。

ミズキ属は暖帯から温帯の山地に普通の落葉広葉樹である。

(17) ススキ属　*Miscanthus*　イネ科　図版6　17a（4号住居24）18a（4号住居29）　19a（5号住居2）20a（5号住居28）

直径5㎜前後の草本性の稈(茎)で、節を取り巻く葉鞘が残っている試料もあった。稈は中空ではなくスポンジ状の基本組織で埋まりその中に維管束が散在している。稈の外周には厚い厚壁細胞層にかこまれた維管束が1～2層並んでおり特に稈の中心部側でその層は厚くなる。それより内側に散在する維管束の周囲の厚壁細胞層は薄い。

ススキ属は大型になる多年草で一般にはカヤ（茅）と呼ばれ、約7種ある。日本全土の平地から山地の陽地に普通に見られ刈って屋根を覆く材料とされてきたススキ、北海道から九州の湿地に生育するオギ、東北

南部から近畿北部の山中の陽地に生育するカリヤス、関東南部以西の堤防の草地に生育するトキワススキなどがある。現時点では稈の組織から種を識別することはできていない。

(18) タケ亜科　*Gramineaesubfam.Bambusoideae*　イネ科

4号住居№15は稈の破片で、幅1.2㎝、厚み約0.4㎜であった。5号住居№34は推定直径1.5㎝の破片である。いずれもやや硬質の稈の破片で、明瞭な節があり、中心部は中空である。

いわゆるタケ・ササの仲間で、あまり太くない種類の稈と思われる。

4．考察

当遺跡の住居4軒からは、ヤマグワ・ニレ属・イヌシデ節・クリ・コナラ節が多く、このほかに複数種類の落葉広葉樹材も検出された。そして古墳時代の住居建築材としてよく知られているクヌギ節は検出されず、コナラ節も5号住居からはやや多く検出されたがそれ以外の住居跡からはほとんど検出されなかった。従って、当遺跡の住居は今まで一般的と考えられている古墳時代のコナラ節やクヌギ節が優占する住居跡とは異なる樹種利用であった。

県内の低地・平野部を含め関東平野南部では古墳時代は建築材にコナラ節とクヌギ節が多いことが知られている(千野、1991、植田、2001など)。しかし、県西南部の富岡町に所在する中高瀬観音山遺跡(鈴木・能城、1995)では古墳時代中期の焼失家屋はクヌギ節が優占するがアカガシ亜属・クリ・カエデ属なども検出されている。同じく県西南部の甘楽町の台地上(標高約185m)に立地する白倉下原・天引向原遺跡(植田、1997)では、古墳時代後期の住居は常緑広葉樹のアカガシ亜属が優占し、このほかにモミ属・イヌガヤ・カヤの針葉樹と複数種類の落葉性や常緑性の広葉樹材が利用されていた(植田、1997)。そして白倉下原・天引向原遺跡では、コナラ節とクヌギ節はほとんど検出されていない。県中央部や北東部の丘陵から山麓に立地する渋川市の中筋遺跡(高橋、1988)ではオニグルミやコナラ節が多く、赤城村の勝保沢中ノ山遺跡(鈴木・能城、1988)はコナラ節が優占しイヌシデ節・アサダ・トネリコ属なども検出されている。このように丘陵地や台地上では、コナラ節やクヌギ節が優占する遺跡もあるが、コナラ節やクヌギ節以外の樹種が多く利用されていた遺跡もあることが判ってきた。今回調査した当遺跡は、県北西部に位置し標高約520mの河岸段丘面に立地し、ヤマグワ・ニレ属・イヌシデ節などが多く利用されていた。このような樹種が利用されていた住居跡は、今まであまり知られていないと思われる。

このように資料の蓄積が進むに従い、県内では古墳時代の建築材樹種の利用状況は、一様にコナラ節やクヌギ節ではなく、地域により異なる傾向があることが判ってきた。特に平野部や低地以外では、コナラ節とクヌギ節の優占利用はあまりみられない傾向が見られる。鈴木・能城(1995)は、中高瀬観音山遺跡では弥生時代後期の焼失家屋からはクリが多く検出されたが、古墳時代中期ではクヌギ節に変化した事について、クリ材の利用は建築材に限らずとも一般的には継続されているのでクリが消失したとは考えにくく、この樹種利用の変化が「文化としてのシフトの変更によるものかどうかを示唆する事象は今の所見つかっていない。」とし、加工技術の変化が利用樹種の変化につながったのではないかとしている。県内の弥生時代の建築材樹種は、情報が少ないので各地域の弥生時代から古墳時代の樹種利用の変化を把握することはできていないが、古墳時代に限り見ると地域による樹種利用の違いは、その地域の植生と関係しているのではないかと思われる。平野部や低地は早くから人為的利用が多くあったことから周辺植生は二次林化しコナラ節やクヌギ節が豊富となり、西南部の白倉下原・天引向原遺跡周辺の丘陵地には照葉樹林が残存しており、北西部の標高が高い当遺跡周辺は人為的影響がまだ少ない自然植生の落葉広葉樹林が成立していたのではないかと推測される。

引用文献
鈴木三男・能城修一（1995）、出土炭化材の樹種、「中高瀬観音山遺跡」、304-312、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団。
鈴木三男・能城修一（1988）、群馬県勝保沢中ノ山遺跡出土炭化材の樹種、「勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ」、180-192、群馬県教育委員会。
高橋利彦（1988）、中筋遺跡出土炭化材の樹種、「中筋遺跡」、42-47、群馬県渋川市教育委員会。
千野裕道（1991）、縄文時代に二次林はあったか－遺跡出土の植物性遺物からの検討－、「研究論集　Ⅹ」214-249、東京都埋蔵文化財センター。
山田昌久（1993）、日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史、１-242、植生史研究特別第１号。
植田弥生（1997）、住居跡出土炭化材の樹種分析、「白倉下原・天引向原遺跡Ⅳ」、117-127、PLs.198-206、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団。
植田弥生（2001）、波志江中野面遺跡Ａ区23号住居跡出土炭化材の樹種同定、「波志江中野面遺跡(1)－古墳時代以降編－」、351-354、ＰＬ.179、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団。

表１　霜田遺跡住居別検出樹種集計

検出樹種	住居:古墳時代（５世紀後半～７世紀）				合　計
	３号住居	４号住居	５号住居	６号住居	
ヤマグワ	1	29	2	2	34
ニレ属	3	16	6		25
イヌシデ節	1	20	2		23
クスノキ科		4		1	5
ミズキ属	1	3			4
サクラ属		3			3
クマシデ節		1			1
アジサイ属		1			1
ヌルデ		1			1
コナラ節		1	11		12
クリ	1		13	1	15
モミ属			3		3
トチノキ			1		1
モクレン属	2				2
ブナ属	1				1
ナシ亜科				3	3
タケ亜科		1	1		2
ススキ属		2	3		5
合計	10	82	42	7	141

表２　霜田遺跡住居（５世紀後半～７世紀）出土炭化材樹種同定結果

遺　構	炭化材No	樹　種
３号住居	2	ニレ属
３号住居	4	モクレン属
３号住居	5	モクレン属
３号住居	6	ブナ属
３号住居	8	イヌシデ節
３号住居	9	ミズキ属
３号住居	10	ニレ属
３号住居	11	ニレ属
３号住居	12	ヤマグワ
３号住居	13	クリ
４号住居	2	ニレ属
４号住居	3	ニレ属
４号住居	4	ヤマグワ
４号住居	6	イヌシデ節
４号住居	7	ヤマグワ
４号住居	8	ヤマグワ
４号住居	11	イヌシデ節
４号住居	14	イヌシデ節
４号住居	15	イヌシデ節
		タケ亜科
４号住居	16	イヌシデ節
４号住居	17	イヌシデ節
４号住居	18	アジサイ属
４号住居	19	クスノキ科
４号住居	20	イヌシデ節
４号住居	21	ヤマグワ
４号住居	22	ニレ属
４号住居	23	ヤマグワ
４号住居	24	ススキ属
４号住居	26	ヤマグワ
４号住居	27	ヌルデ
４号住居	28	ミズキ属
４号住居	29	ススキ属
４号住居	30	クスノキ科
４号住居	34	イヌシデ節
４号住居	37	クスノキ科
４号住居	43	イヌシデ節
４号住居	44	イヌシデ節
４号住居	46	クスノキ科
４号住居	48	イヌシデ節
４号住居	52	イヌシデ節
４号住居	53	イヌシデ節
４号住居	54	イヌシデ節
４号住居	55	イヌシデ節
４号住居	56	ヤマグワ
４号住居	57	ヤマグワ
４号住居	59	ヤマグワ

遺　構	炭化材No	樹　種
４号住居	62	イヌシデ節
４号住居	64	ヤマグワ
４号住居	66	ヤマグワ
４号住居	69	ニレ属
４号住居	72	ヤマグワ
４号住居	74	ヤマグワ
４号住居	75	ヤマグワ
４号住居	76	ニレ属
４号住居	77	ヤマグワ
４号住居	78	ヤマグワ
４号住居	79	ヤマグワ
４号住居	80	ヤマグワ
４号住居	82	ヤマグワ
４号住居	86	ニレ属
４号住居	87	ニレ属
４号住居	88	ニレ属
４号住居	90	ニレ属
４号住居	91	ヤマグワ
４号住居	92	ヤマグワ
４号住居	97	ニレ属
４号住居	99	イヌシデ節
４号住居	100	コナラ節
４号住居	101	ヤマグワ
４号住居	102	イヌシデ節
４号住居	103	ミズキ属
４号住居	104	ミズキ属
４号住居	106	イヌシデ節
４号住居	108	イヌシデ節
４号住居	109	サクラ属
４号住居	110	ヤマグワ
４号住居	111	ニレ属
４号住居	112	ヤマグワ
４号住居	114	ニレ属
４号住居	117	ヤマグワ
４号住居	118	ヤマグワ
４号住居	119	ニレ属
４号住居	121	ニレ属
４号住居	124	サクラ属
４号住居	125	ニレ属
４号住居	128	ニレ属
４号住居	129	クマシデ節
４号住居	132	ヤマグワ
４号住居	136	ヤマグワ
４号住居	137-2	サクラ属
４号住居	138	ヤマグワ
５号住居	1	ニレ属
		コナラ節

遺　構	炭化材No	樹　種
５号住居	4	クリ
５号住居	5	クリ
５号住居	7	コナラ節
５号住居	8	クリ
５号住居	11	クリ
５号住居	12	ススキ属
		ヤマグワ
５号住居	13	クリ
５号住居	14	クリ
５号住居	15	イヌシデ節
５号住居	16	コナラ節
５号住居	17	クリ
５号住居	18	ニレ属
５号住居	19	ニレ属
５号住居	20	クリ
５号住居	23	コナラ節
		ニレ属
５号住居	24	クリ
５号住居	25	コナラ節
		ススキ属
５号住居	26	クリ
５号住居	27	コナラ節
５号住居	28	ススキ属
５号住居	29	コナラ節
５号住居	30	コナラ節
５号住居	31	ニレ属
５号住居	32	コナラ節
５号住居	34	タケ亜科
５号住居	35	イヌシデ節
		モミ属
５号住居	36	コナラ節
５号住居	37	クリ
５号住居	38	トチノキ
５号住居	39	ヤマグワ
５号住居	40	モミ属
５号住居	42	モミ属
５号住居	46	ニレ属
５号住居	47	クリ
５号住居	48	コナラ節
５号住居	43-1	クリ
６号住居	1	ヤマグワ
６号住居	2	ヤマグワ
６号住居	3	ナシ亜科
６号住居	5	ナシ亜科
６号住居	6	ナシ亜科
６号住居	7	クスノキ科
６号住居	8	クリ

写　真　図　版

1　遺跡遠景（北から：左に岩殿山、奥に大戸の手子丸城、右に丘陵部の塩ノ平を望む）

2　Ⅰ区東側トレンチ掘削状況（北から）

3　Ⅰ区東側トレンチセクション（西から）

4　Ⅰ区西側トレンチ掘削状況（北から）

5　Ⅰ区西側トレンチセクション（西から）

6　Ⅱ区南壁基本土層セクション（北から）

7　Ⅱ区東壁基本土層セクション（西から）

8　1号集石全景（南から）

9　1号集石・土器出土状況（南から）

10　1号焼土検出状況（東から）

11　1号焼土セクション（東から）

12　1号焼土全景（東から）

13　1号炉全景（南から）

14　Ⅱ区古墳時代全景（南東から）

15　1号竪穴住居検出状況（北東から）

16　1号竪穴住居セクション（北から）

17　1号竪穴住居全景（南東から）

18　1号竪穴住居カマドセクションBライン（南東から）

19　1号竪穴住居カマドセクションCライン（南西から）

20　1号竪穴住居カマド全景（南西から）

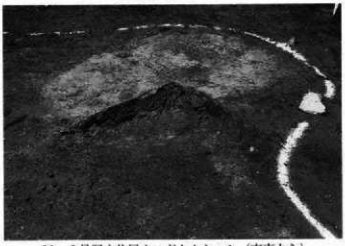
21　1号竪穴住居掘り方全景（南東から）

22　1号竪穴住居カマド掘り方セクションCライン(南西から)

23　1号竪穴住居カマド掘り方全景（南西から）

24　2号竪穴住居全景（南西から）

25　2号竪穴住居カマド検出状況（南西から）



26　2号竪穴住居カマドセクション（南東から）

27　2号竪穴住居カマド全景（南東から）

28　2号竪穴住居カマド掘り方セクション（南東から）

29　2号竪穴住居カマド掘り方全景（南から）

30　2・3号竪穴住居セクションAライン（西から）

31　3号竪穴住居遺物出土状況（南から）

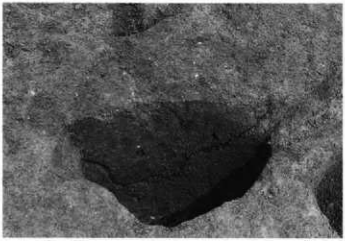
32　3号竪穴住居全景（南から）

33　3号竪穴住居セクション（南から）

34　3号竪穴住居カマドセクションDライン（西から）

35　3号竪穴住居柱穴セクションEライン（南から）

36　3号竪穴住居柱穴セクションFライン（南から）



37　3号竪穴住居柱穴セクションGライン（南から）

38　3号竪穴住居掘り方セクションAライン（南から）

39　2・3号竪穴住居掘り方全景（南から）

40　3号竪穴住居刀子出土状況（西から）

41　4号竪穴住居セクションAライン（西から）

42　4号竪穴住居セクションBライン（南から）

43　4号竪穴住居壁際焼土セクション（南から）

44　4号竪穴住居遺物・炭化材出土状況（西から）

45　4号竪穴住居全景（西から）

46　4号竪穴住居カマドセクションDライン（南から）

47　4号竪穴住居カマドセクションFライン（西から）

48　4号竪穴住居カマド全景（西から）

49　4号竪穴住居掘り方全景（西から）

50　4号竪穴住居カマド掘り方全景（西から）

51　4号竪穴住居貯蔵穴セクション（東から）

52　5号竪穴住居セクション（南東から）

53　5号竪穴住居全景（南から）

54　5号竪穴住居石製模造品・勾玉出土状況（南から）

55　5号竪穴住居こも編み石出土状況（東から）

56　5号竪穴住居掘り方全景（西から）

57　6号竪穴住居セクション（西から）

58　6号竪穴住居全景（南西から）

59　6号竪穴住居カマド付近遺物出土状況（西から）

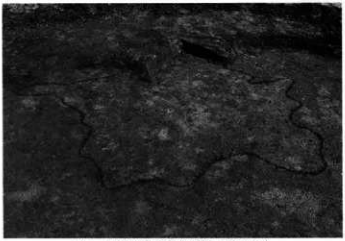
60　6号竪穴住居カマド全景（西から）

61　6号竪穴住居カマド調査状況（西から）

62　6号竪穴住居焼土セクション（西から）

63　6号竪穴住居掘り方全景（西から）

64　6号竪穴住居床下土坑全景（西から）



65　Ⅱ区2号灰分布状況（西から）

66　Ⅰ区浅間Bテフラ下水田検出状況（南から）

67　Ⅰ区浅間Bテフラ下水田検出状況（南から）

68　Ⅰ区浅間Bテフラ下水田検出状況（北から）

69　Ⅰ区浅間Bテフラ下水田検出状況（北から）

70　Ⅱ区浅間Bテフラ下水田検出状況（南から）

71　Ⅱ区浅間Bテフラ下水田検出状況（東から）

72　Ⅱ区浅間Bテフラ下水田検出状況（北から）

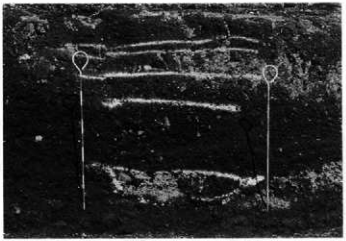
73　1号石列検出状況（東から）

74　1号土坑石検出状況（北から）

75　1号土坑全景（北から）

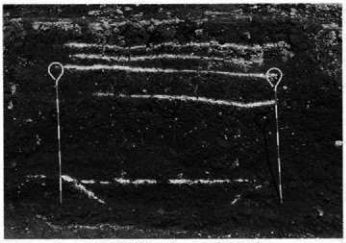
76　Ⅰ区中・近世遺構検出状況（南から）

77　Ⅰ区中・近世遺構検出状況（北から）

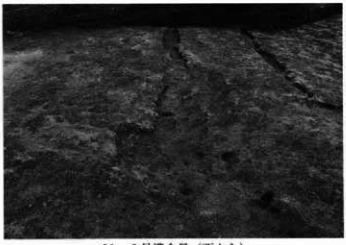


78　1号溝セクション（西から）

79　1号溝全景（西から）



80　2号溝セクション（西から）

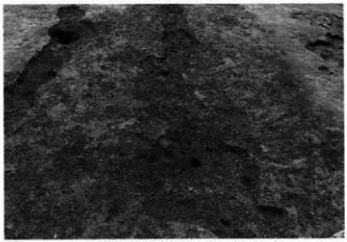


81　2号溝全景（西から）

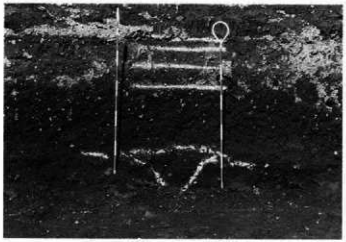
82　3号溝セクション（西から）

83　3号溝全景（東から）

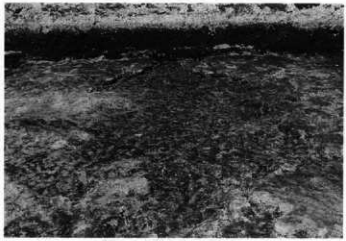
84　4号溝全景（東から）



85　5号溝全景（東から）



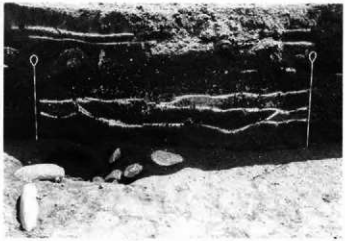
86　6号溝セクション（西から）



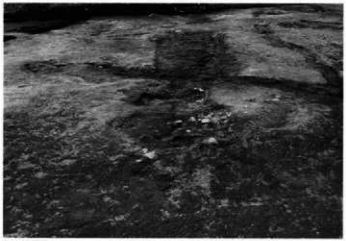
87　6号溝全景（西から）

88　7号溝セクション（西から）

89　7号溝全景（東から）



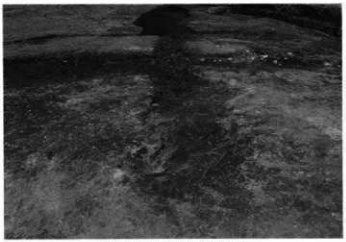
90　8号溝セクション（東から）



91　8号溝全景（東から）

92　9号溝セクション（西から）

93　9号溝全景（東から）



94　10号溝全景（西から）

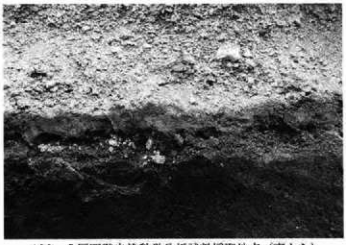
95　伊勢屋教授土壌調査風景（東から）

96　Ⅰ区中・近世遺構検出作業風景（南から）

97　Ⅱ区浅間Bテフラ下水田検出作業風景（南から）

98　坂上小学校6年生遺跡見学風景（東から）

99　発掘調査地点道路完成状況（南東から）



100　Ⅰ区西壁自然科学分析試料採取地点（東から）

101　Ⅱ区西壁自然科学分析試料採取地点（東から）

縄文－1

縄文－2

縄文－3

縄文－4

縄文－5

縄文－参考(剥片)

弥生－1

弥生－2

弥生－3

弥生－4

弥生－6

弥生－5

古墳－7

古墳－8

剥片

1住－1

1集石－1

2住－1

3住－1

3住－2

3住－4

3住－3

3住－7

3住－12

3住－11

3住－5

3住－8

3住－13

3住－6

3住－9

3住－10

3住-14

3住-16

3住-15

3住-19

3住-18

3住-17

3住-20

3住-21

3住-22

3住-23

3住-24

3住-25

3住-26

3住-27

5住-1

4住-1

4住-2

5住-2

5住-3

5住-4

5住-5

5住-6

5住-7

5住-8

5住-9

5住-10

5住-11

5住-12

5住-13

5住-14

5住-15

5住-16

5住-17

5住-18

5住-19

5住-20

5住-21

5住-22

5住-23

5住-24

5住-25

6住-1

6住-2

6住-3

6住-4

6住-5

6住-6

6住-13

6住-15

6住-18

6住-19

6住-8

6住-9

6住-7

6住-12

6住-11

6住-14

6住-10

6住-21

6住-16

6住-17

6住-20

6住-26

6住-22

6住-23

6住-25

6住-24

6住-27

6住-28

6住-29

6住-30

6住-32

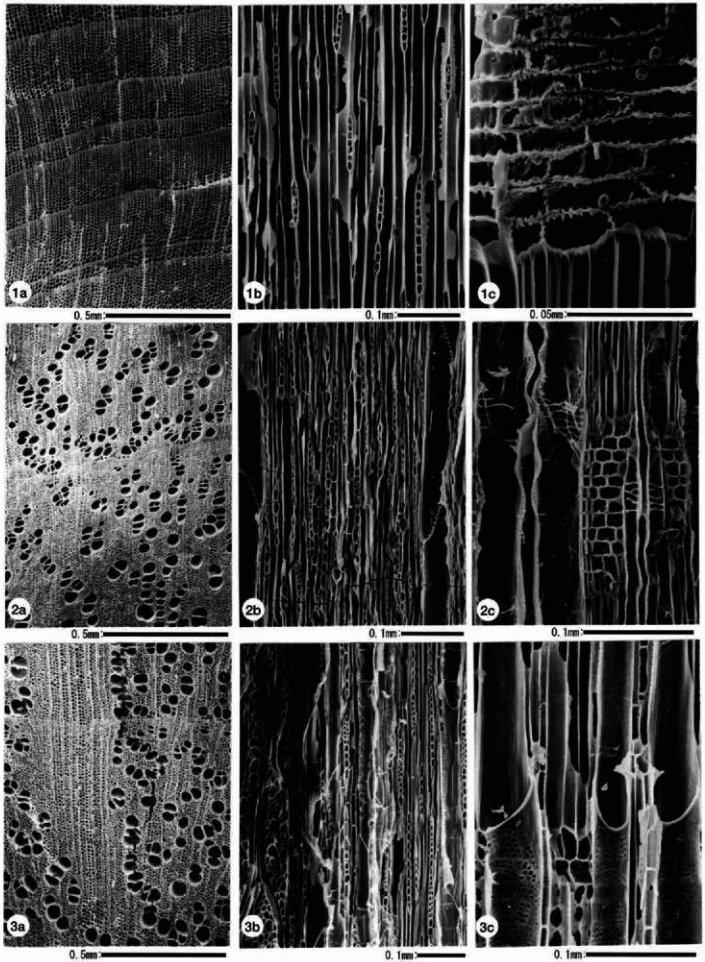
6住-36

6住-33

6住-31

6住-34

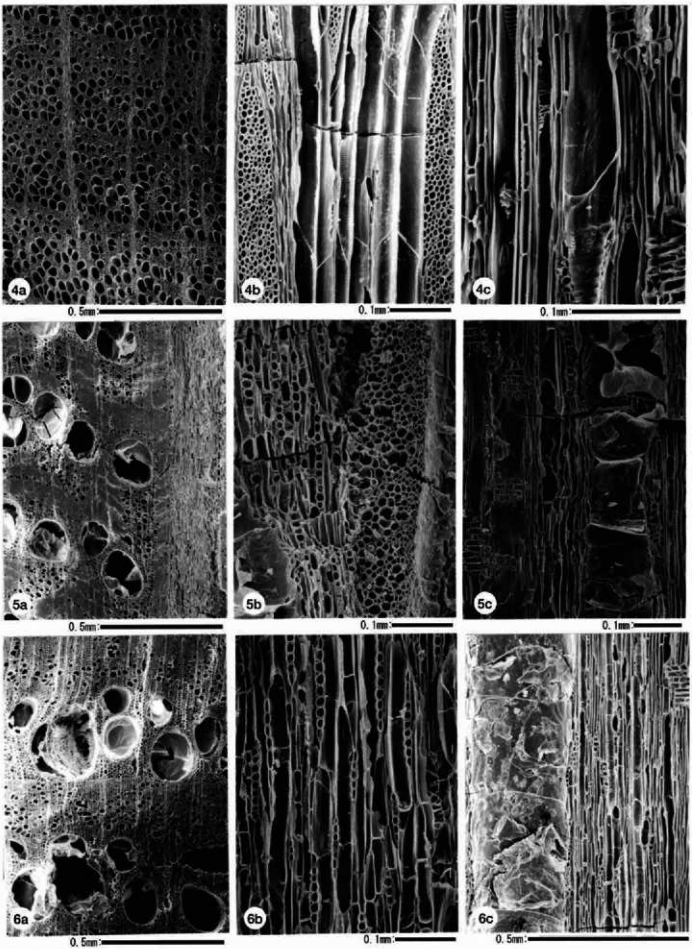
6住-35



図版1　霜田遺跡住居出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

1a－1c：モミ属（5号住居40）　2a－2c：クマシデ節（4号住居129）　3a－3c：イヌシデ節（4号住居15）

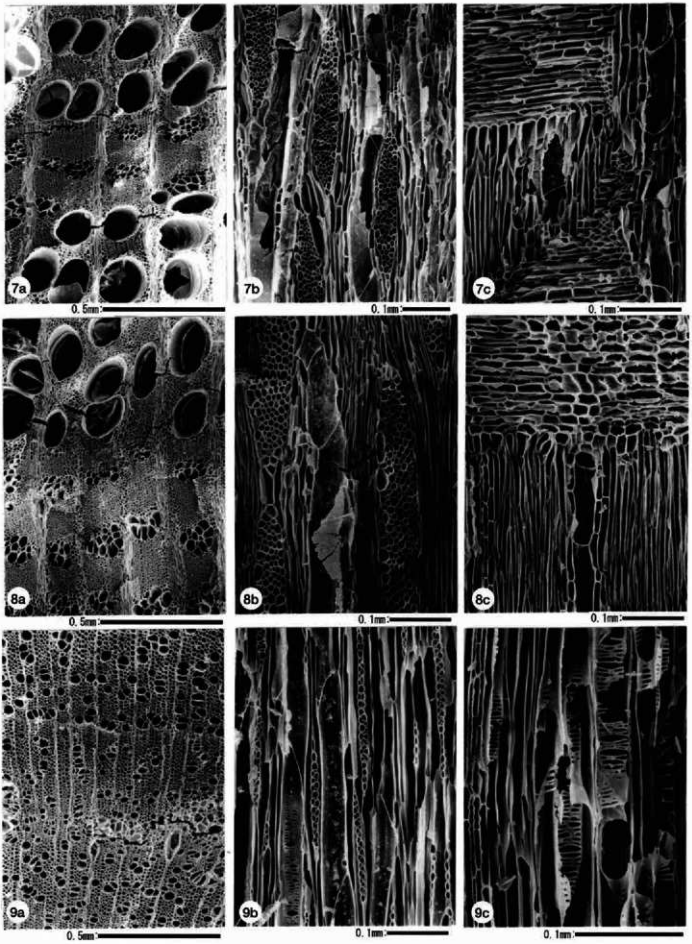
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面



図版2 霜田遺跡住居出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

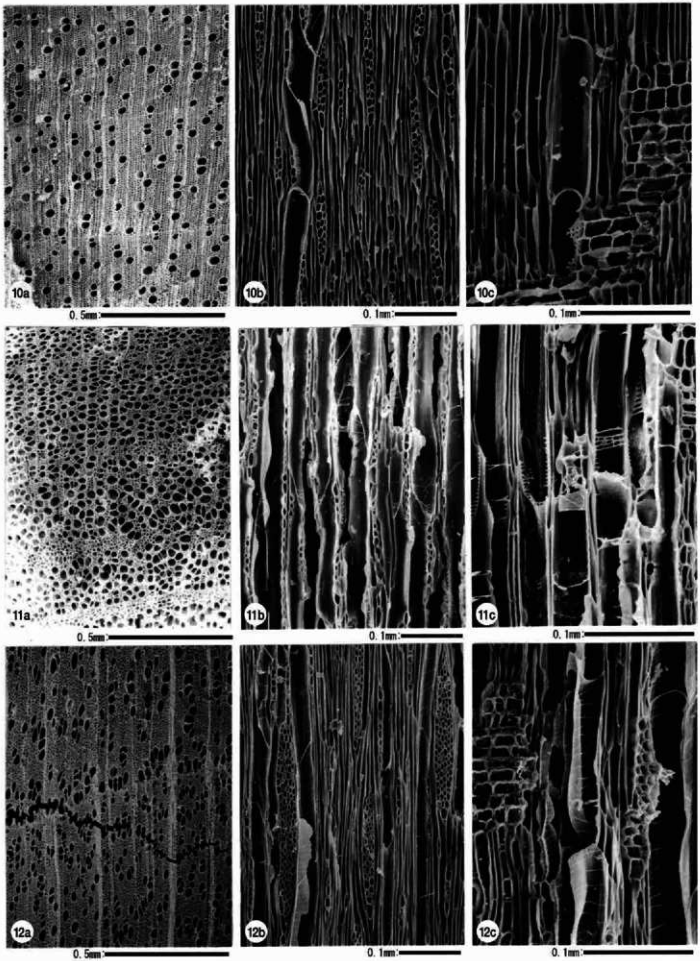
4a－4c：ブナ属（3号住居6） 5a－5c：コナラ節（5号住居27） 6a－6c：クリ（5号住居24）

a：横断面 b：接線断面 c：放射断面



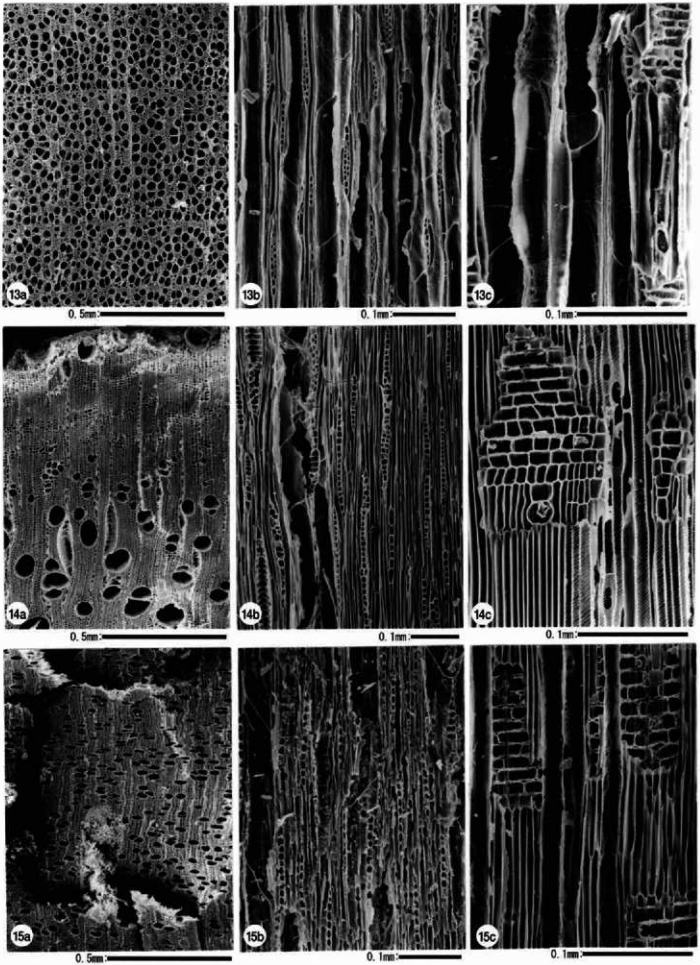
図版3 霜田遺跡住居出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

7a－7c：ニレ属（3号住居10） 8a－8c：ヤマグワ（3号住居12） 9a－9c：モクレン属（3号住居4）
a：横断面 b：接線断面 c：放射断面



図版4　霜田遺跡住居出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

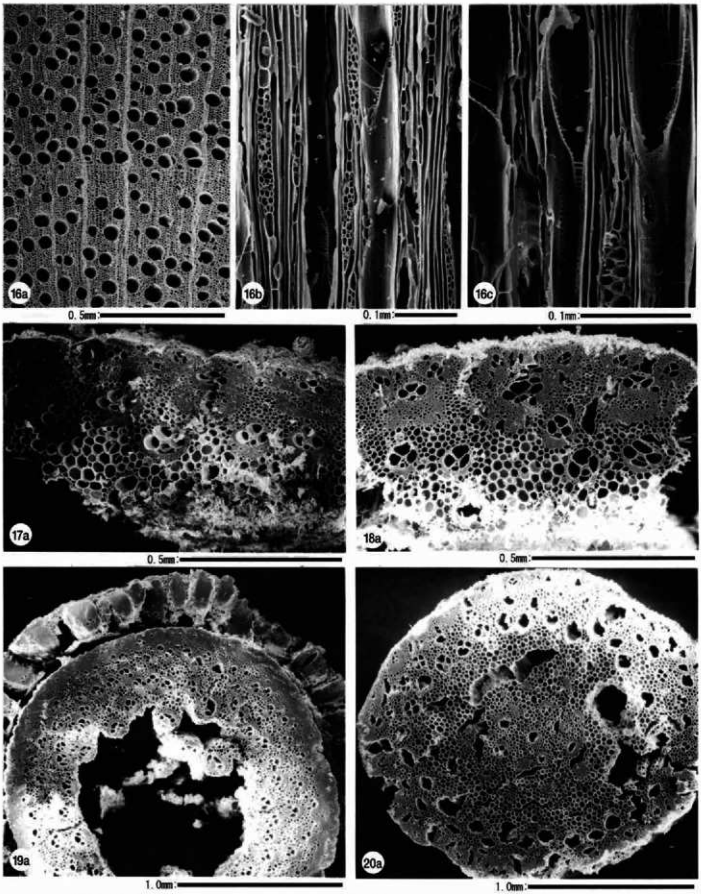
10a－10c：クスノキ科（6号住居7）　11a－11c：アジサイ属（4号住居18）　12a－12c：サクラ属（4号住居124）
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面



図版5　霜田遺跡住居出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

13a－13c：ナシ亜科（6号住居6）　14a－14c：ヌルデ（4号住居27）　15a－15c：トチノキ（5号住居38）

a：横断面　b：接線断面　c：放射断面



図版6　霜田遺跡住居出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

16a-16c：ミズキ属（4号住居28）　17a：ススキ属（4号住居24）　18a：ススキ属（4号住居29）
19a：ススキ属（5号住居2）　20a：ススキ属（5号住居28）　a：横断面 b：接線断面 c：放射断面

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書第363集

霜田遺跡

一般県道川原畑大戸線地方特定道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18年2月13日　印刷
平成18年2月17日　発行

編集・発行／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電　話（0279）52－2511(代表)
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／株式会社開文社印刷所